箱　崎　24

— 箱崎遺跡群第 39・41・44 次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 854 集

2005

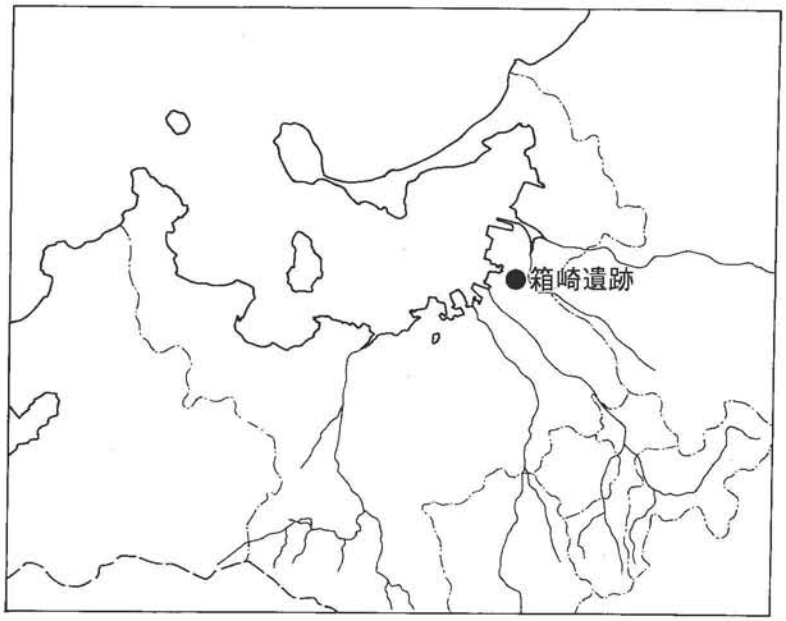
福岡市教育委員会

HAKO ZAKI

箱崎 24

— 箱崎遺跡群第 39・41・44 次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 854 集



2005

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市ではこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区箱崎における共同住宅建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、当地域の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として僅かでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり古田暢氏（第39次調査）、三愛建物株式会社（第41次調査）、児嶋邦男氏（第44次調査）をはじめ多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木とみ子

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が東区箱崎において実施した箱崎遺跡第 39・41・44 次調査の報告書である。

2．本書で報告する各調査の細目は以下のとおりである。

調査次数	調査番号	遺跡略号
第 39 次調査	０３０２	ＨＫＺ－39
第 41 次調査	０３４３	ＨＫＺ－41
第 44 次調査	０３６８	ＨＫＺ－44

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、高木誠、福田匡朗、上田龍児、安藤史郎が行った。

4．本書に掲載した遺物実測図の作成は中村、上田、今井隆博が行った。

5．本書に掲載した挿図の製図は林由紀子、今井隆博が行った。

6．本書に掲載した遺構、遺物写真の撮影は中村が行った。

7．本書で記述する輸入陶磁器の分類は以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会　「大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」（太宰府市の文化財第 49 集）

8．本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

9．付論として九州大学大学院比較社会文化研究院　中橋孝博教授による出土人骨に関する分析及び大規模事業等担当　屋山洋氏による出土獣骨の分析を掲載している。

10. 本書の編集は中村が行った。

本文目次

Ⅰ．位置と環境 …… 1
　1．位置と環境 …… 1
　2．これまでの調査 …… 4
Ⅱ．第39次調査 …… 5
　1．調査に至る経過 …… 5
　2．調査体制 …… 5
　3．調査概要 …… 8
　4．調査の記録 …… 10
　　1）井戸 …… 10
　　2）土坑 …… 16
　　3）溝 …… 30
　　4）その他の遺物 …… 30
　5．小結 …… 30
Ⅲ．第41次調査 …… 31
　1．調査に至る経過 …… 31
　2．調査体制 …… 31
　3．調査概要 …… 32
　4．調査の記録 …… 35
　　1）井戸 …… 35
　　2）土坑 …… 44
　　3）溝 …… 47
　　4）土壙墓・木棺墓 …… 49
　　5）その他の遺物 …… 51
　5．小結 …… 54
　付論 …… 55
　　1箱崎遺跡第41次調査出土の中世人骨
　　（九州大学大学院比較社会文化学府　岡崎健治・中橋孝博） …… 55
　　2箱崎41次調査出土動物遺存体について
　　（文化財部　大規模事業等担当　屋山　洋） …… 59
Ⅳ．第44次調査 …… 61
　1．調査に至る経過 …… 61
　2．調査体制 …… 61
　3．調査概要 …… 63
　4．調査の記録 …… 63
　　1）井戸 …… 63
　　2）土坑 …… 64
　　3）その他の遺物 …… 68
　5．小結 …… 68

図版目次

図版1　(1) 第39次調査北半区全景　(2) 第39次調査南半区全景
図版2　(1) SE-9（北から）　(2) SE-50（北から）
(3) SE-74（南から）　(4) SE-92（北西から）
(5) SK-40（北から）　(6) SK-63（南から）
図版3　(1) SK-69（東から）　(2) SK-70（北から）
(3) SK-73（北から）　(4) SK-76（東から）
(5) SK-80・81（南から）　(6) SK-99（東から）
図版4　(1) 第41次調査東半区全景　(2) 第41次調査西半区全景
図版5　(1) SE-33（東から）　(2) SE-64（西から）
(3) SE-65（南から）　(4) SE-66（西から）
(5) SE-67（西から）　(6) SE-68（東から）
図版6　(1) SE-155（南から）　(2) SE-156（南から）
(3) SE-157・208（西から）　(4) SE-169（南から）
(5) SE-171（北から）　(6) SE-172（北から）
図版7　(1) SK-34（西から）　(2) SK-34（東から）
図版8　(1) SK-35（西から）　(2) SK-35（東から）
図版9　(1) SK-63（西から）　(2) SK-63（南から）
図版10　(1) SK-30（西から）　(2) SK-18（東から）
(3) 調査区東端部（東から）　(4) 調査区北拡張部（北から）
図版11　(1) 第44次調査西半区第1面　(2) 第44次調査西半区第2面
図版12　(1) 第44次調査東半区第1面　(2) 第44次調査東半区第2面
図版13　(1) SE-33（西から）　(2) SE-154（北から）
(3) SK-1（西から）　(4) SK-72（東から）
(5) SK-73（東から）　(6) SK-74（南から）
図版14　(1) 第39次調査出土遺物　(2) 第41次調査出土遺物
(3) 第44次調査出土遺物

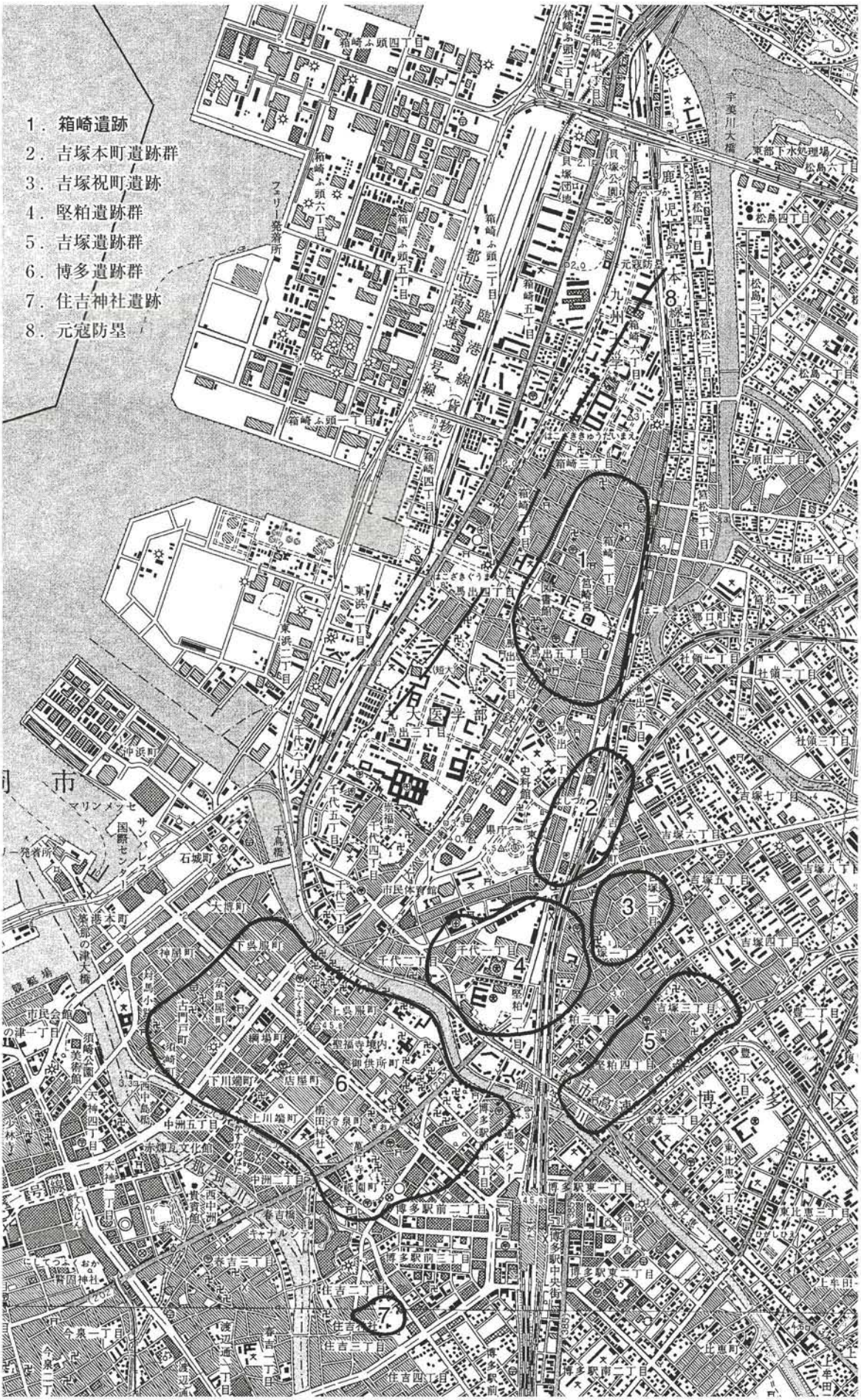
Ⅰ．位置と環境

1．位置と環境

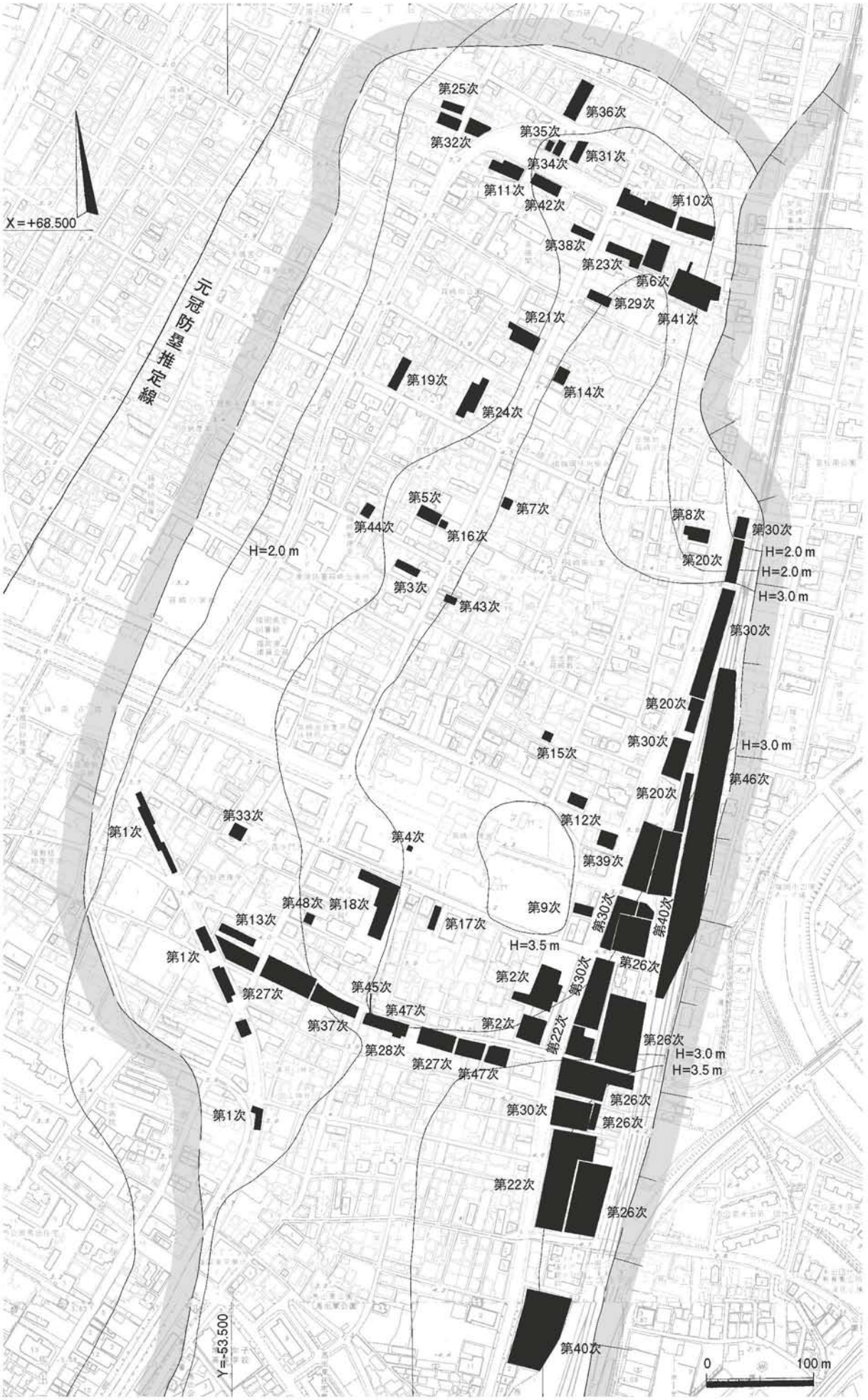
箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から室見川河口付近まで分布しており、本遺跡を含め多くの遺跡が立地している。砂丘の形成時期は考古学的及び地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。本遺跡が分布しているのは概ね南北 1000m 、東西 500m の範囲で標高 2.0m ～ 3.5m を測る。

本遺跡は 1983 年の地下鉄建設に伴う第 1 次調査以来、40 次を越える調査が行われているが、調査が本格化するのは 1990 年代以降で、縄文時代晩期～近世に至る各時期の遺構、遺物が確認されている。縄文時代晩期～弥生時代は第 6 次調査において出土した磨製石斧が最も古く、縄文時代晩期～弥生時代前期初頭のものと考えられるが、該期の遺構に伴わない。弥生時代中期～後期の土器は 18・30 次調査で確認されている。古墳時代は竪穴住居や円形及び方形周溝墓等が確認されている。8 次調査では飯蛸壺を多量に出土しており、生業を考える上で興味深い。奈良時代になると遺物は散見されるものの遺構については判然としない。10 世紀に入ると以降の箱崎遺跡の中心となる筥崎宮が創建される。延喜 21 年に八幡神の託宣により、穂波郡大分宮から遷座して延長元年に建てられたとされる。それは大分宮の節会に参詣する大宰府の役人が竈門宮に不敬を行う、郡司百姓等が饗膳するのに険しい山越えをしなければならない、放生会を行うのに海ではないため不適当であるという 3 つの理由からとされる。しかし実際のところ、新羅に対する宗教的防御や、この地が対外貿易の地点として重要であったことも大きく作用したと考えられている。この時期の遺構は後の時期に比べさほど多くなく、筥崎宮の東を中心に分布する。これ以降遺跡は西側に拡大して行き、13 世紀代以降にはほぼ全域に分布する。また 32、36 次調査によって遺跡の範囲が北及び北東側に拡大することが確認されている。

周辺の遺跡をみると南へ続く砂丘上に吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が存在している。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。出土する瓦や硯から公的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って 1996 年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第 1 次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、土壙墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州窯系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については 13 世紀～ 14 世紀前半を中心に栄え、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。吉塚遺跡群の南には国際貿易都市として中世を代表する遺跡の一つであり、箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群が位置する。出土する輸入陶磁器類は質、量共に他を圧倒している。調査はすでに 140 次を越え、弥生時代～近世に至る遺構、遺物が確認されている。さらに南には住吉神社遺跡が位置する。2004 年に第 1 次調査が行われ、中世の遺構が確認されている。



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）

2．これまでの調査

調査次数	所在地	面　積	調査期間	時　期	主な遺構	報告書
第1次	馬出5丁目地内	5000㎡	1983.7.4～12.18	12世紀後半～15世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第193集
第2次	箱崎1丁目18-32他	1500㎡	1986.11.22～1987.1.20	10世紀後半～15世紀	建物地業　建物布張状遺構　井戸　土坑　溝　粘土壙　集石遺構	第79集(県)
第3次	箱崎1丁目2731-1	156㎡	1990.1.9～2.21	12世紀中頃～15世紀	井戸　土坑　溝	第262集
第4次	箱崎1丁目2761		1989.7.5	11世紀	土坑（瓦経）	年報Vol.4
第5次	箱崎1丁目25・27	210㎡	1991.9.9～10.30	12世紀～15世紀	掘立柱建物　柵列　井戸　土坑　埋葬遺構	第273集
第6次	箱崎3丁目2437-1・4	430㎡	1994.10.20～1995.1.31	12世紀後半～13世紀	井戸　土坑　溝	第459集
第7次	箱崎1丁目2711他	85㎡	1994.11.15～12.27	12世紀前半～13世紀	井戸　土坑	第459集
第8次	箱崎1丁目2549-1他	225㎡	1996.10.1～11.14	古墳時代 12世紀中頃~13世紀	古墳時代の竪穴住居 土坑　中世の溝　井戸　土坑	第591集
第9次	箱崎1丁目1935-1	191㎡	1996.10.2～10.29	11世紀～13世紀	井戸　土坑　溝	第550集
第10次	箱崎3丁目地内	1020㎡	1996.11.11～1997.3.31	12世紀前半～13世紀	井戸　土坑　溝	第551集
第11次	箱崎3丁目3266-1他	385㎡	1997.4.30～6.27	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑　ピット	第592集
第12次	箱崎1丁目2606-1・3	155㎡	1997.8.19～9.22	11世紀～13世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	整理中
第13次	馬出5丁目520・521	297㎡	1997.10.27～12.2	15世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第592集
第14次	箱崎1丁目28-15	36㎡	1998.4.2～5.23	12世紀後半～14世紀前半	土坑　溝	第625集
第15次	箱崎1丁目2615	36㎡	1998.5.25～6.5	11世紀後半～12世紀	土坑　溝	第810集
第16次	箱崎1丁目2725	56㎡	1999.1.18～1.29	11世紀～15世紀	井戸　土坑	第703集
第17次	箱崎1丁目20-19	40㎡	1999.3.13～3.31	12世紀中頃～17世紀	土坑　溝　ピット	第704集
第18次	馬出5丁目470	920㎡	1999.6.14～9.28	12世紀中頃～16世紀	井戸　土坑　溝	第664集
第19次	箱崎1丁目2940-1	160㎡	1999.7.29～8.27	12世紀後半～14世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第664集
第20次	箱崎1丁目地内	882㎡	1999.12.13～2000.3.31	古墳時代　11～13世紀	古墳時代の竪穴住居　中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第768集
第21次	箱崎1丁目2480	545㎡(2面)	2000.3.29～6.26	12世紀中頃～14世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第705集
第22次	馬出5丁目・箱崎1丁目	2976㎡	2000.7.24～2001.3.31	古墳時代　古代末～中世	古墳時代の竪穴住居　古代末～中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第811集
第23次	箱崎3丁目2404	188㎡	2000.9.22～11.2	13世紀～17世紀	井戸　土坑	第704集
第24次	箱崎1丁目2511他	397㎡	2000.10.23～2001.1.31	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑　木棺墓	第768集
第25次	箱崎3丁目地内	87㎡	2001.4.16～4.26	13世紀後半～14世紀	土坑	整理中
第26次	箱崎1丁目地内	5255㎡	2001.5.5～2002.3.29	古墳時代　11～13世紀	古墳時代の周溝墓　中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第816集
第27次	馬出5丁目地内	1449㎡	2001.6.7～2002.2.10	12世紀～近世	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第812集
第28次	馬出5丁目24-8	41㎡	2001.7.2～7.12	中世後半	土坑　ピット	整理中
第29次	箱崎3丁目2398他	80㎡	2002.4.1～4.26	12世紀～13世紀	土坑　溝　池状遺構	第813集
第30次	箱崎1丁目地内	4997㎡	2002.4.9～2003.5.13	古墳時代　古代末～中世	古墳時代　竪穴住居　古代末～中世　掘立柱建物　井戸　土坑　溝	整理中
第31次	箱崎3丁目3358-1	80㎡	2002.5.9～6.14	12世紀～13世紀	井戸　土坑　溝	第813集
第32次	箱崎3丁目地内	442㎡	2002.4.22～9.20	13世紀～	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	整理中
第33次	馬出5丁目502・503	160㎡	2002.9.24～10.8	12世紀～	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	整理中
第34次	箱崎3丁目3356-1	70㎡	2002.11.14～12.2	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑	整理中
第35次	箱崎3丁目9-33	32㎡	2002.12.2～12.10	13世紀後半～14世紀	井戸　土坑	整理中
第36次	箱崎3丁目3380	199㎡	2002.12.11～2003.2.21	14世紀～15世紀	井戸　土坑　溝	整理中
第37次	馬出5丁目地内	493㎡	2002.12.13～2003.3.31	12世紀～	井戸　土坑　溝	整理中
第38次	箱崎3丁目9-49	90㎡	2003.2.3～3.8	13世紀～近世	井戸　土坑	第814集
第39次	箱崎1丁目2031他	149㎡	2003.4.10～5.9	11世紀～12世紀	井戸　土坑　溝	第854集
第40次	箱崎1丁目地内・馬出1丁目30	2900㎡	2003.5.14～	旧石器時代後期 古墳時代 10~15世紀	井戸　土坑　溝　掘立柱建物　小石室　方形状の溝　円形竪穴状遺構	整理中
第41次	箱崎3丁目2426他	1000㎡	2003.9.16～12.11	12世紀後半～13世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第854集
第42次	箱崎3丁目	260㎡	2003.10.21～2004.1.21	12世紀～14世紀	井戸　土坑　溝　方形竪穴状遺構	整理中
第43次	箱崎1丁目2697-1	83㎡	2003.11.21～12.5	11世紀～12世紀	土坑　ピット	整理中
第44次	箱崎1丁目35-3	114㎡	2004.2.16～3.15	12世紀～14世紀	井戸　土坑　ピット	第854集
第45次	馬出5丁目地内	152㎡	2004.3.1～3.22	12世紀～13世紀	井戸　土坑　ピット	整理中
第46次	箱崎1丁目地内	3000㎡	2004.7.1～	古墳時代初頭 11世紀~15世紀	井戸　土坑　溝	調査中
第47次	馬出5丁目地内	1000㎡	2004.7.21～	古代後半～中世後半	井戸　土坑　溝	調査中
第48次	馬出5丁目地内	87㎡	2004.11.26～11.28	近世	土坑　ピット	整理中

Ⅱ．第 39 次調査

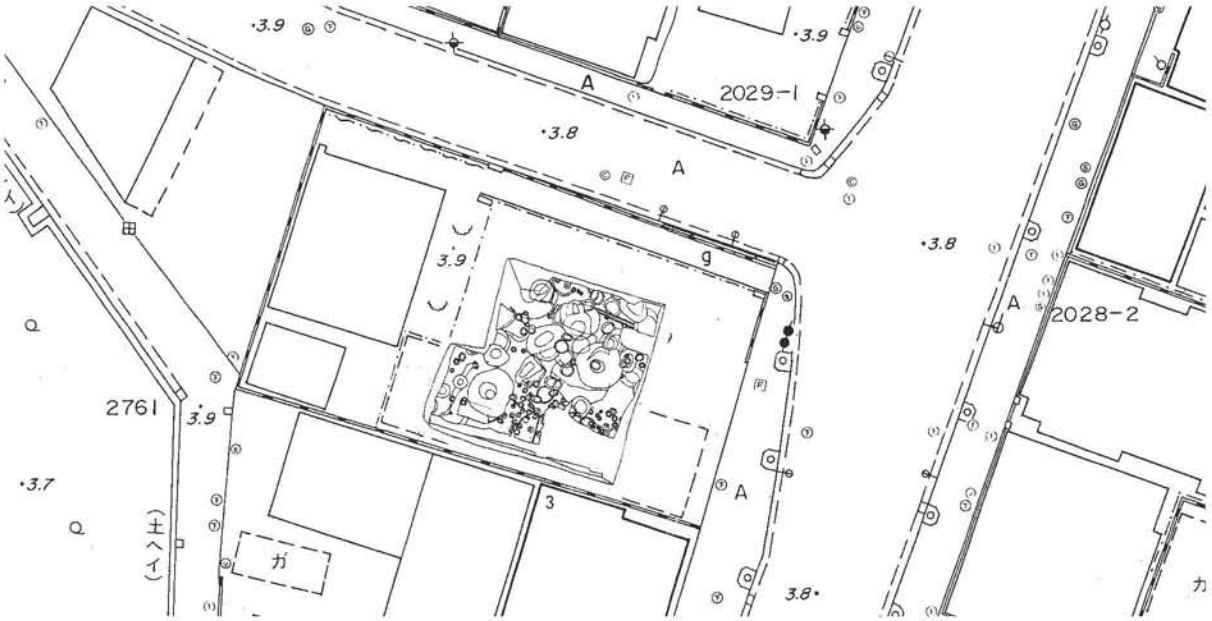
1．調査に至る経過

平成 15 年 1 月 9 日、古田暢氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市東区箱崎 1 丁目 2031 他地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡群に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年 3 月 11 日、試掘調査を行い、その結果、井戸、柱穴等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。古田氏と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成 15 年 4 月 10 日より開始、平成 15 年 5 月 9 日に終了した。

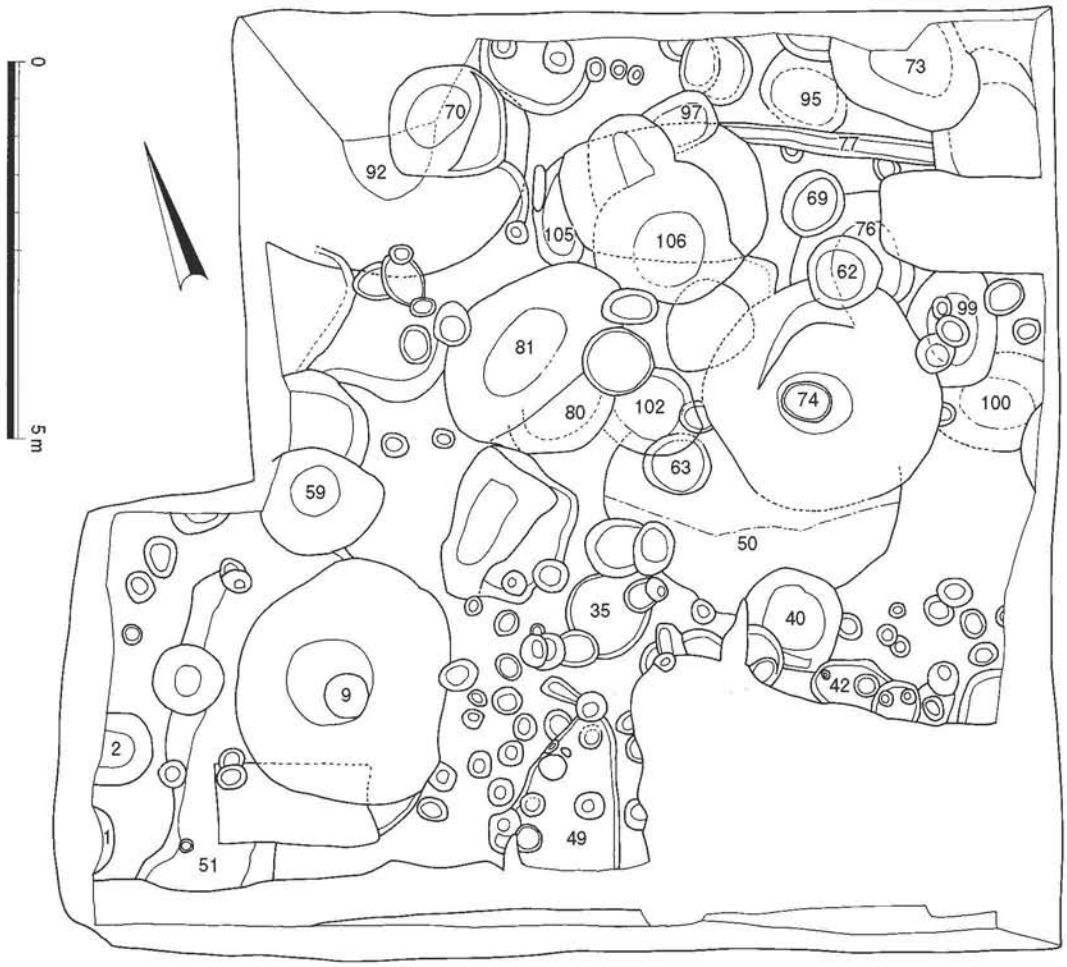
最後になりましたが、古田氏には調査に際し、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

2．調査体制

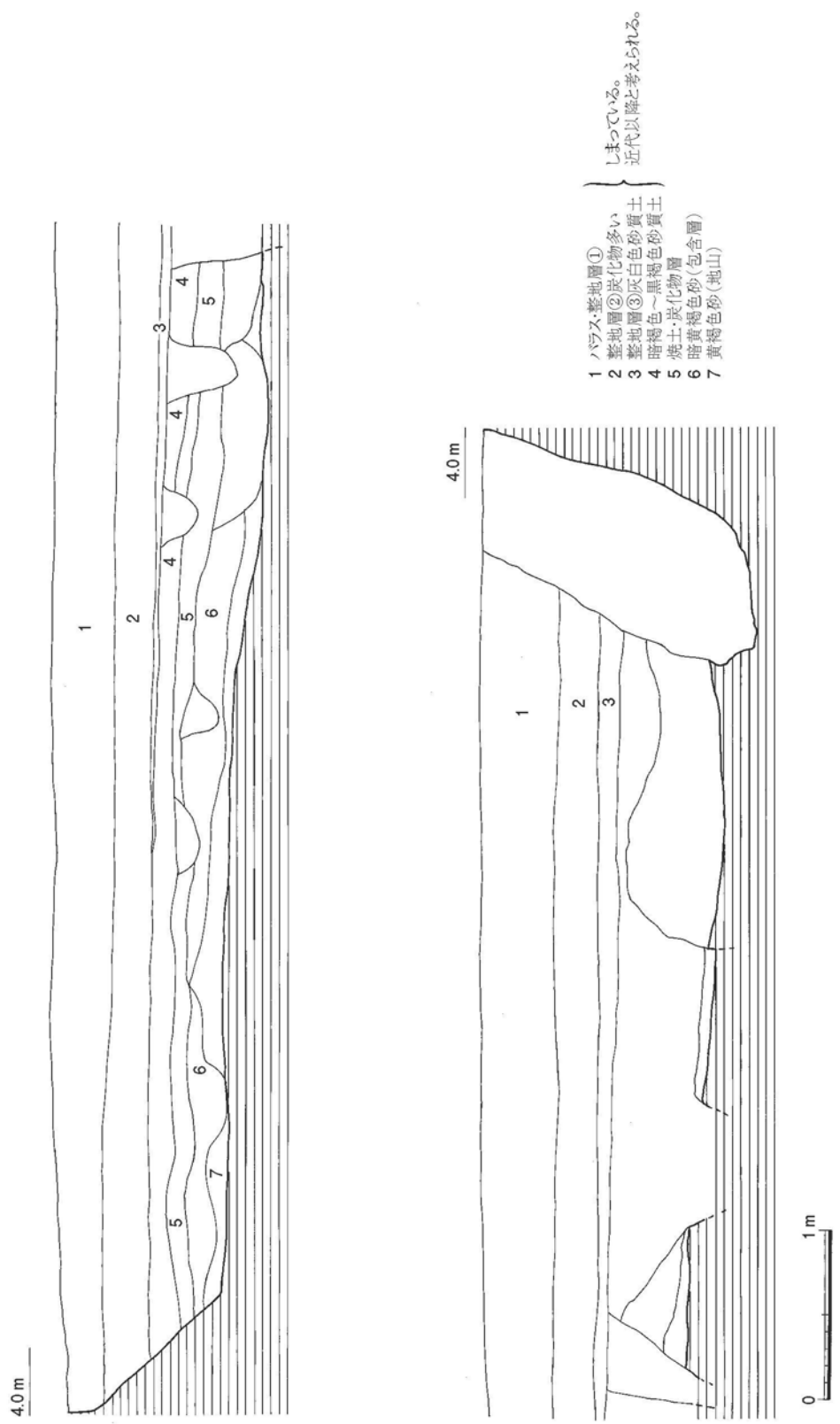
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口譲治　山崎純男（前任）
	調査第 2 係長	池崎譲二　田中寿夫（前任）
事前審査	事前審査係長	浜石哲也　池崎譲二（前任）
	主任文化財主事	吉留秀敏　米倉秀紀（前任）
	事前審査係	久住猛夫　田上勇一郎（前任）
調査庶務	文化財整備課管理係	御手洗清
調査担当	調査第 2 係	中村啓太郎
調 査 員	上田龍児	
発掘作業	小川秀雄　徳永栄彦　吹春哲男　宮崎雅秀　竹原吉秋　花田昌代　野田トヨ子	
	井上ヨシ子　田中フキ子　光安晶子　大庭智子　村崎祐子　藤澤義一　園田豊	
	上田龍児　渡辺誠　田端名穂子　中村幸子　花田則子　安藤史郎　阿部純子	
	稲崎龍也　崎村雄介　永松弘恵	
整理作業	林由紀子　下川奈津代　釜崎法子　原陽子　三栗野雅子	



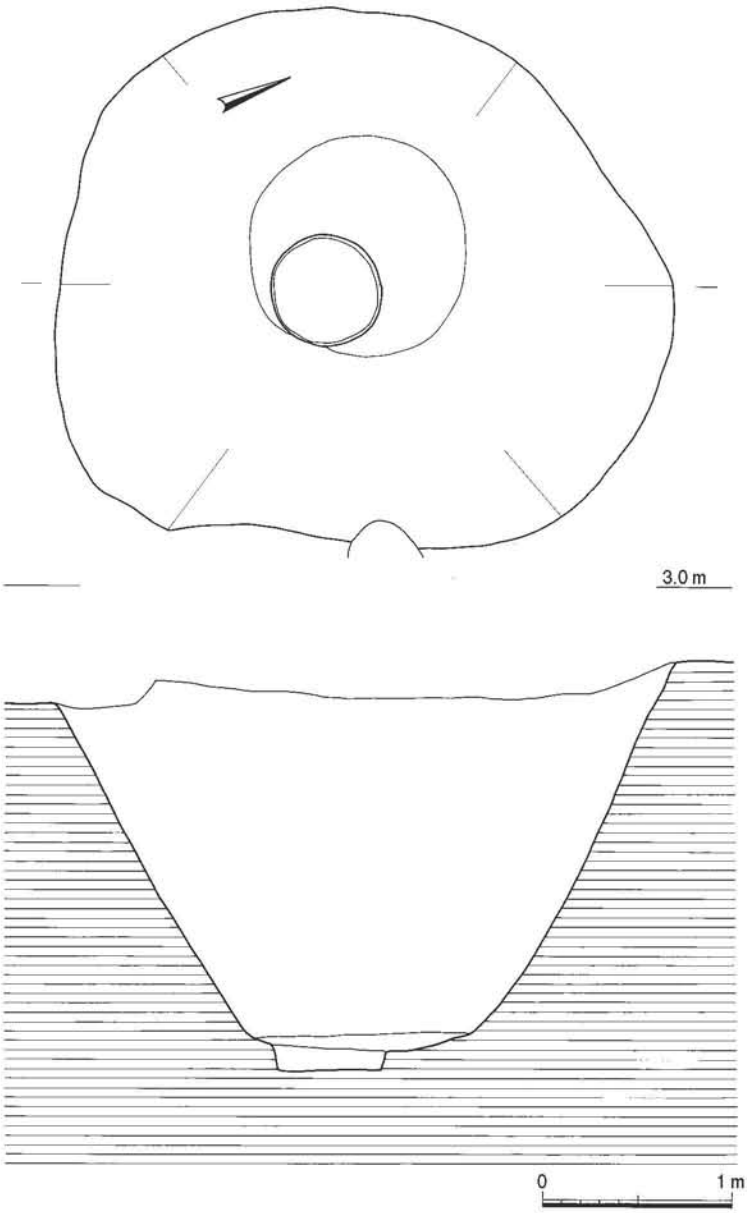
第3図　第39次調査区位置図（1/500）



第4図　遺構配置図（1/100）



第5図　南壁土層実測図（1/40）

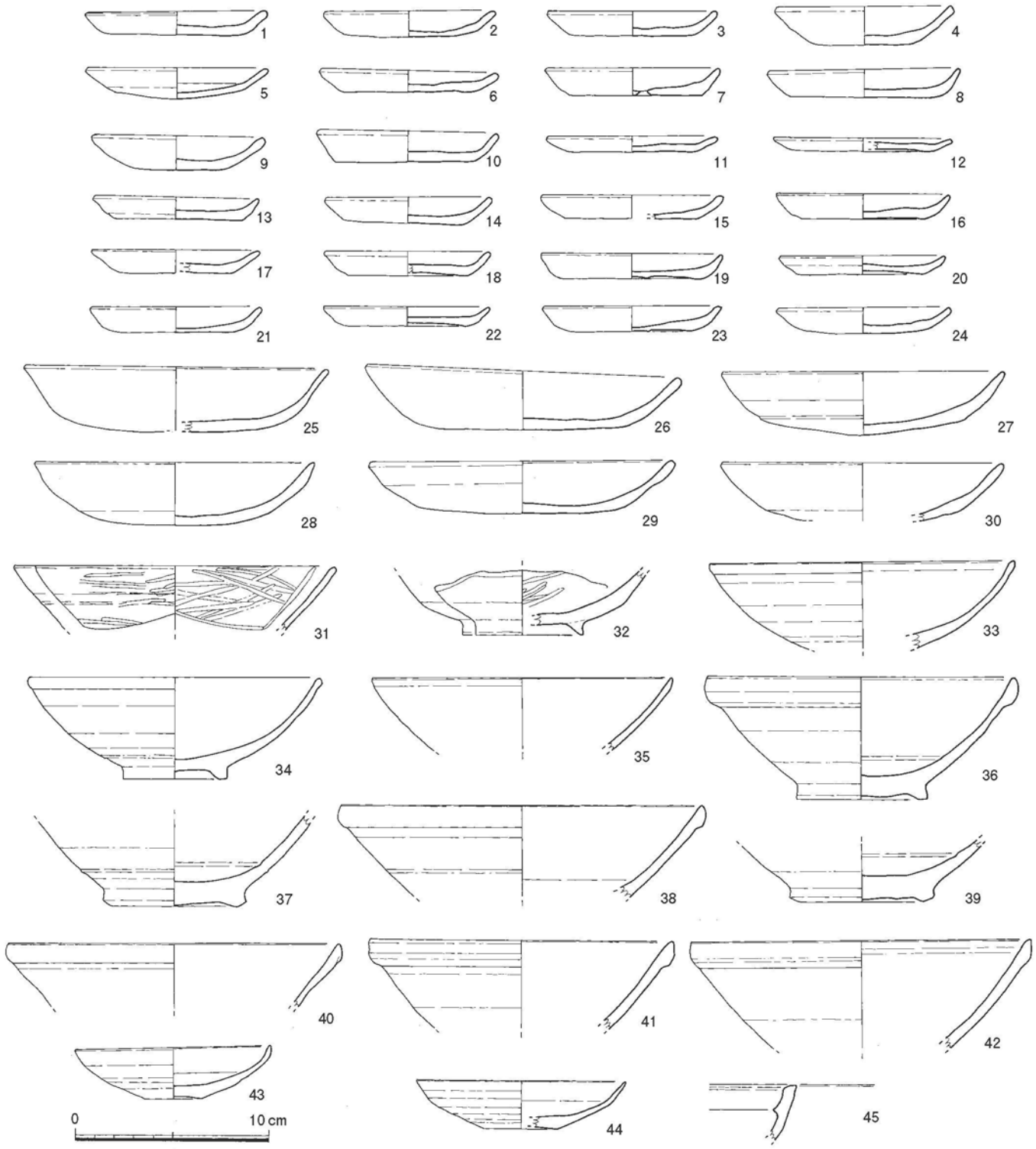


第6図　SE-9実測図（1/40）

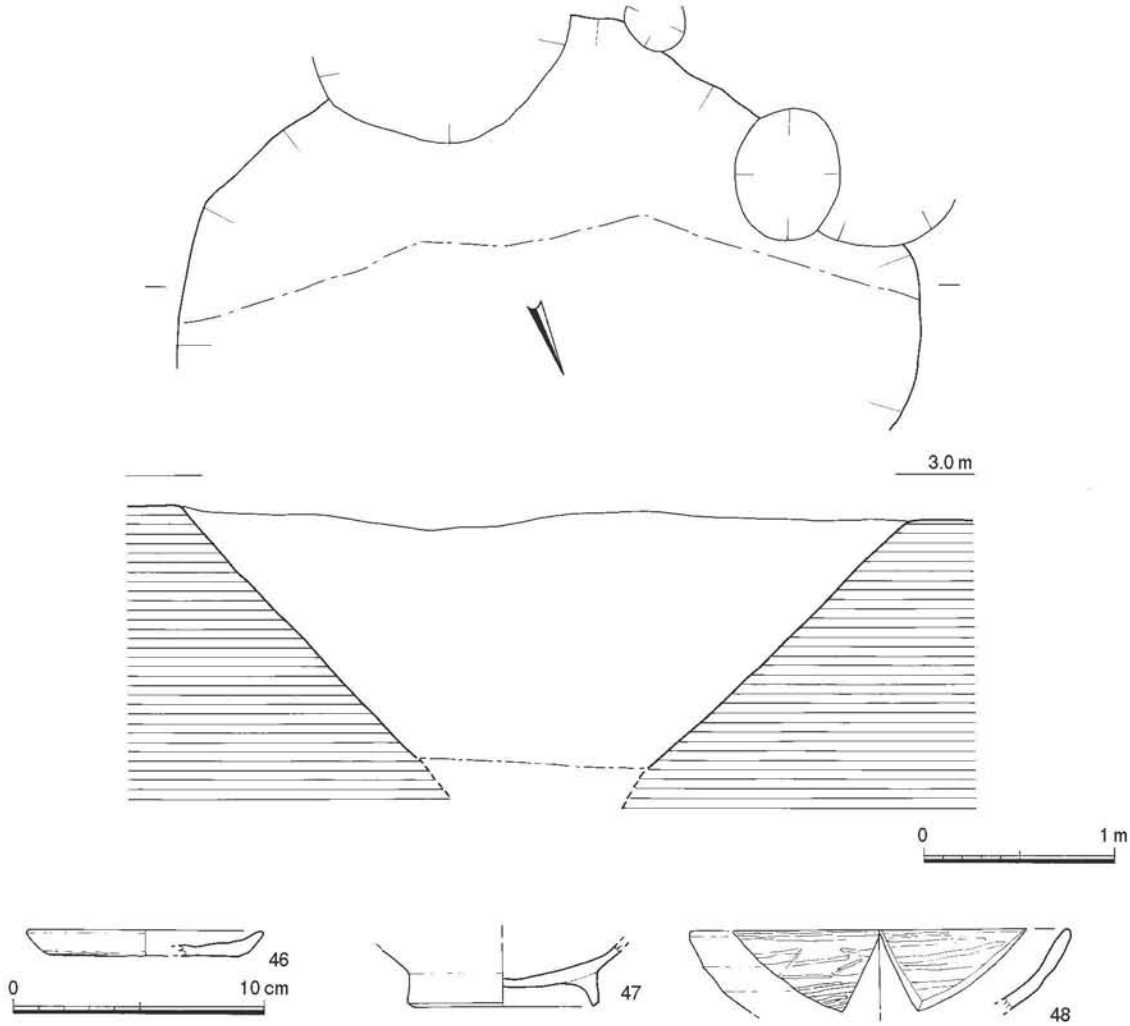
3．調査概要

第39次調査区は東区箱崎1丁目2031他に所在し、遺跡の中央東寄り、筥崎八幡宮の東に接して位置する。調査は重機による表土掘削から開始した。廃土処理の関係から調査区を南北に2分割し、南側から順に調査を行った。

基本層序は現地表から第1層　バラス・整地層①、第2層　整地層②（炭化物多い）、第3層　整地層③（灰白色砂質土）、第4層　暗褐色～黒褐色砂質土、第5層　焼土・炭化物層、第6層　暗黄褐色砂、第7層　黄褐色砂（地山）となり、第7層上面で標高2.7m～3.1mを測り、東から西に向かい傾斜する。遺構は基本的に第4～6層から掘り込まれるが、時間的都合と平面での検出が困難であるため、第7層上面で検出した。検出した遺構は井戸5基、土坑31基、溝状遺構2条、柱穴等である。調査面積は149.17㎡を測る。



第７図　SE-9 出土遺物実測図（1/3）



第８図　SE-50 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

４．調査の記録

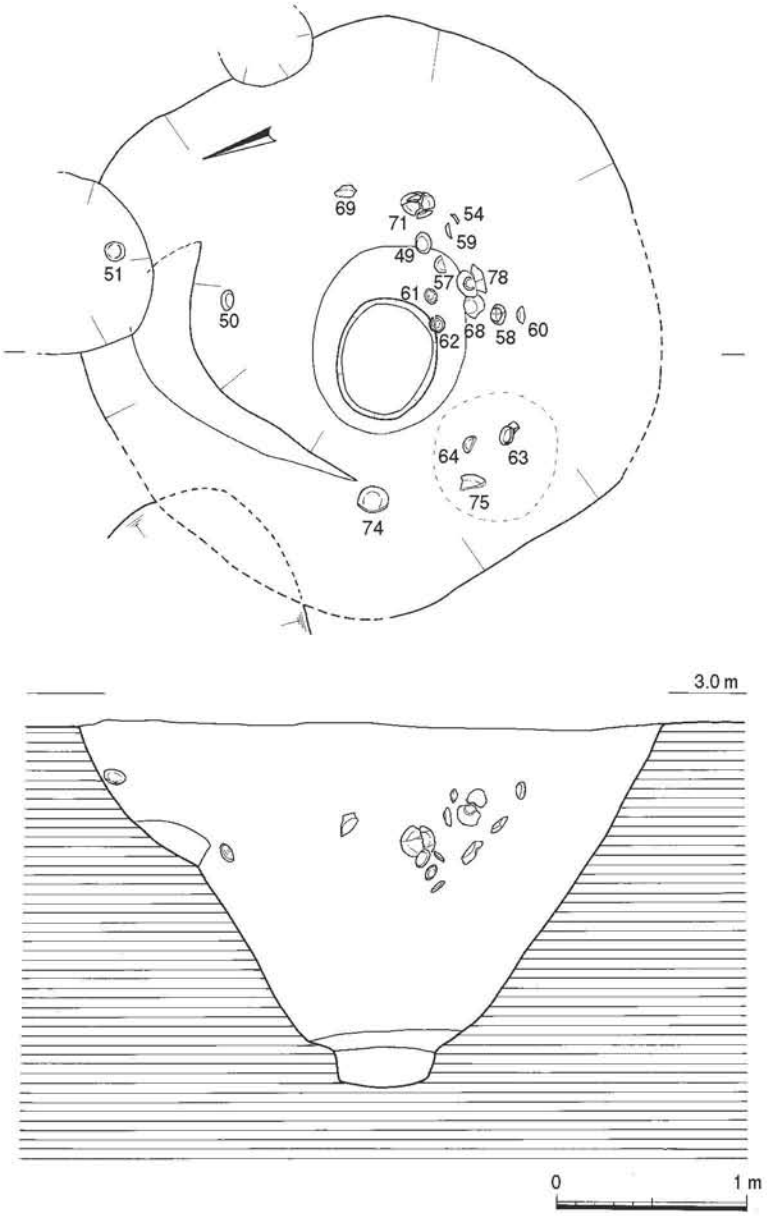
１）井戸

井戸は５基検出した。調査区の中央から北側に集中する。

SE-9（第６図）

調査区西に位置する。掘り方はやや不整な楕円形を呈し、長軸 321 ㎝、短軸 281 ㎝、深さ 232 ㎝を測る。掘り方最下部南寄りで井筒を据えた痕跡が確認されたが木質等は残っていなかった。円形を呈し、径 60 ㎝程度と考えられる。埋土上層の黒褐色砂質土（炭混じり）からは土師器坏、小皿等がまとまって出土しており、堆積状況から井筒を抜いた後投棄されたのではないかとおもわれる。

出土遺物(第７図)１～24 は土師器の小皿である。口径 8.6 ㎝～ 10.0 ㎝、器高 0.7 ㎝～ 2.0 ㎝を測る。１～６・11・24 の底部はヘラ切りで、５・24 は板状圧痕を有する。他の底部は糸切りで 12 ～ 17・19～23 は板状圧痕を有する。25 ～ 30 は土師器の坏である。口径 14.4 ㎝～ 15.8 ㎝、器高 2.8 ㎝～ 3.3 ㎝を測る。25 の底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。他は底部糸切りで板状圧痕を有する。31・32 は瓦器椀である。31 は内外面ともヘラ磨きを施す。33 ～ 42 は白磁碗である。Ⅳ類が多くを占める。43・44 は白磁皿である。45 は陶器の鉢である。



第9図　SE-74 実測図（1/40）

SE-50（第8図）

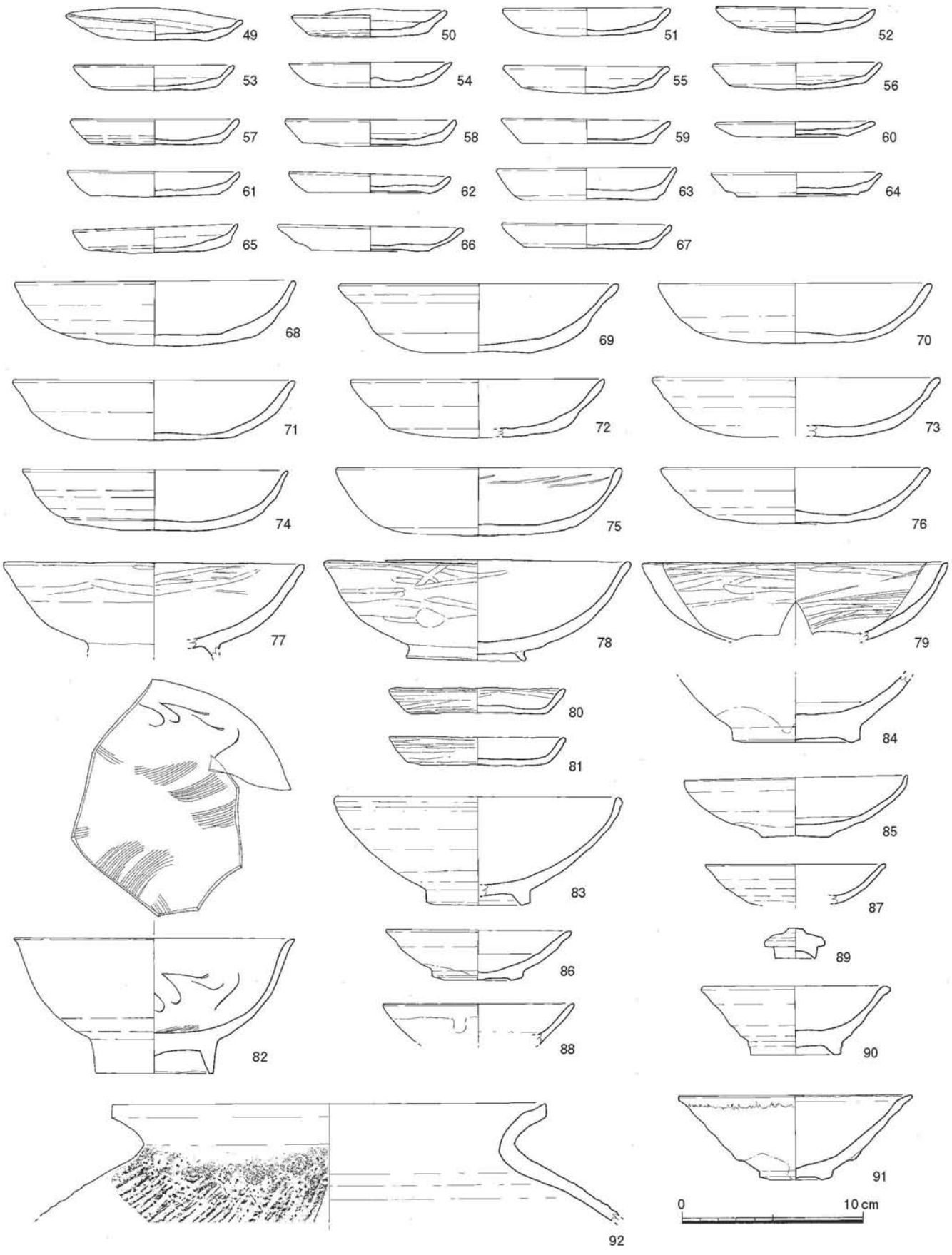
調査区中央やや東寄りに SE-74 に切られて位置する。掘り方は楕円形を呈し、長軸 380 ㎝を測る。遺構が調査区の反転部分にかかったため安全上完掘できなかった。

出土遺物（第8図）46 は土師器の小皿。復元口径 9.4 ㎝、器高 1.0 ㎝を測る。底部はヘラ切り。47・48 は土師器埦である。

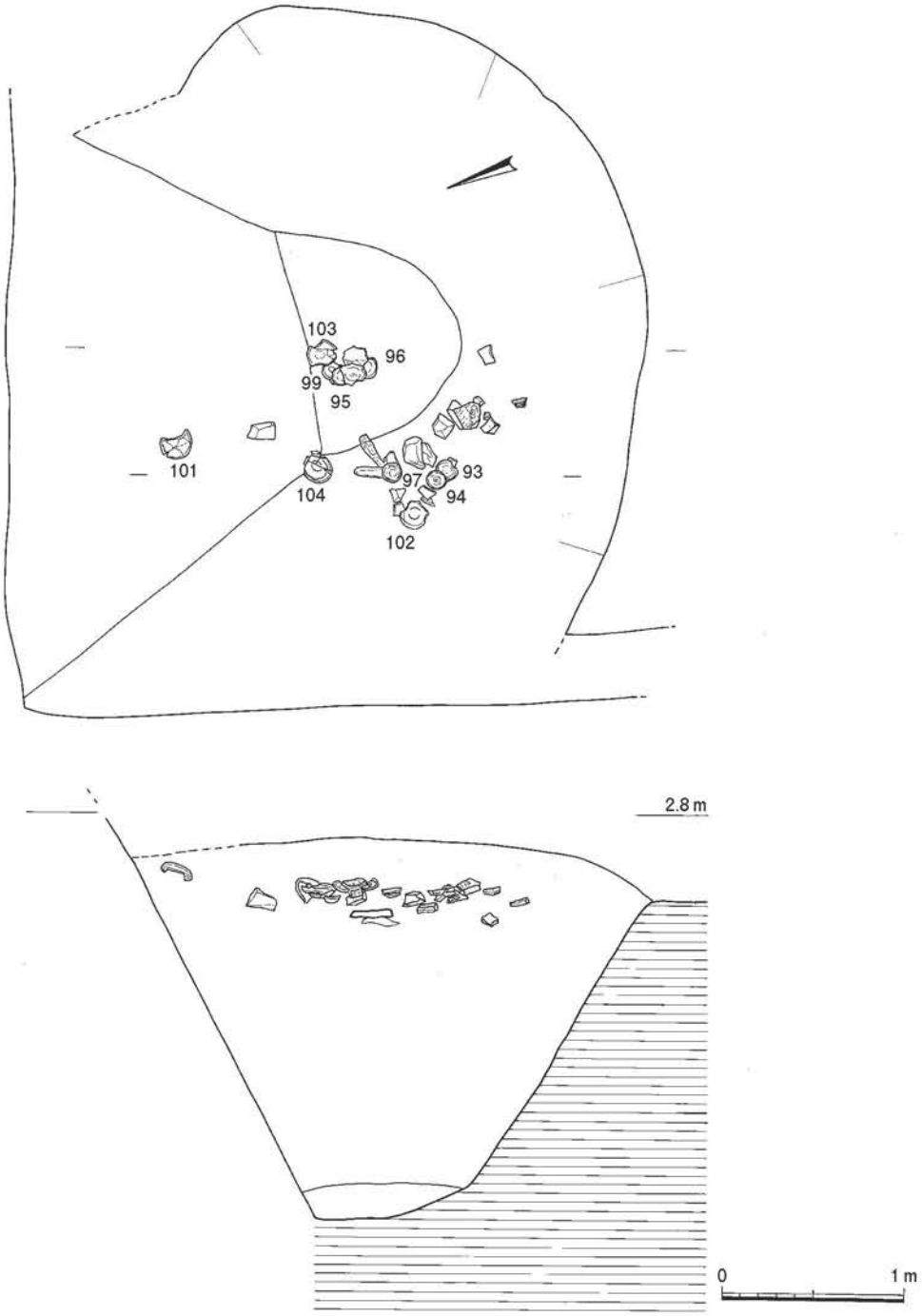
SE-74（第9図）

SE-50 を切って位置する。掘り方は円形を呈し、上段北側にテラスが付く。径 320 ㎝前後、深さ 195 ㎝を測る。掘り方最下部中央で井筒を据えた掘り方が確認されたが木質等は残っていなかった。楕円形を呈し長軸 60 ㎝程度と考えられる。

出土遺物(第10図)49～67 は土師器の小皿である。口径 8.6 ㎝～ 10.4 ㎝、器高 0.8 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。49～56 の底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。57～67 は糸切りで 62・66 以外は板状圧痕を有する。68～76 は土師器の坏である。口径 14.2 ㎝～ 15.8 ㎝、器高 3.1 ㎝～ 3.9 ㎝を測る。68～71 がヘ



第 10 図　SE-74 出土遺物実測図（1/3）

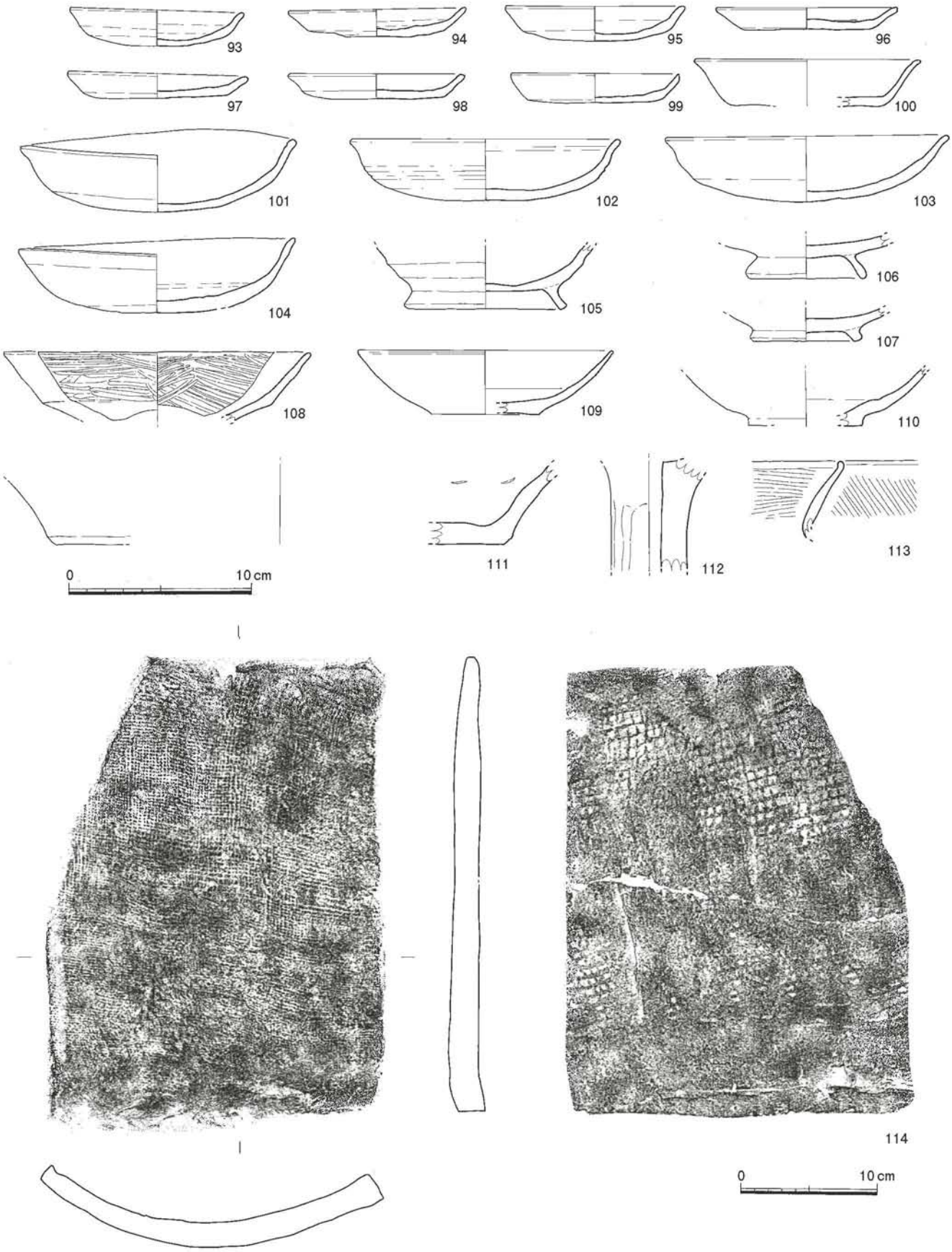


第 11 図　SE-92 実測図（1/40）

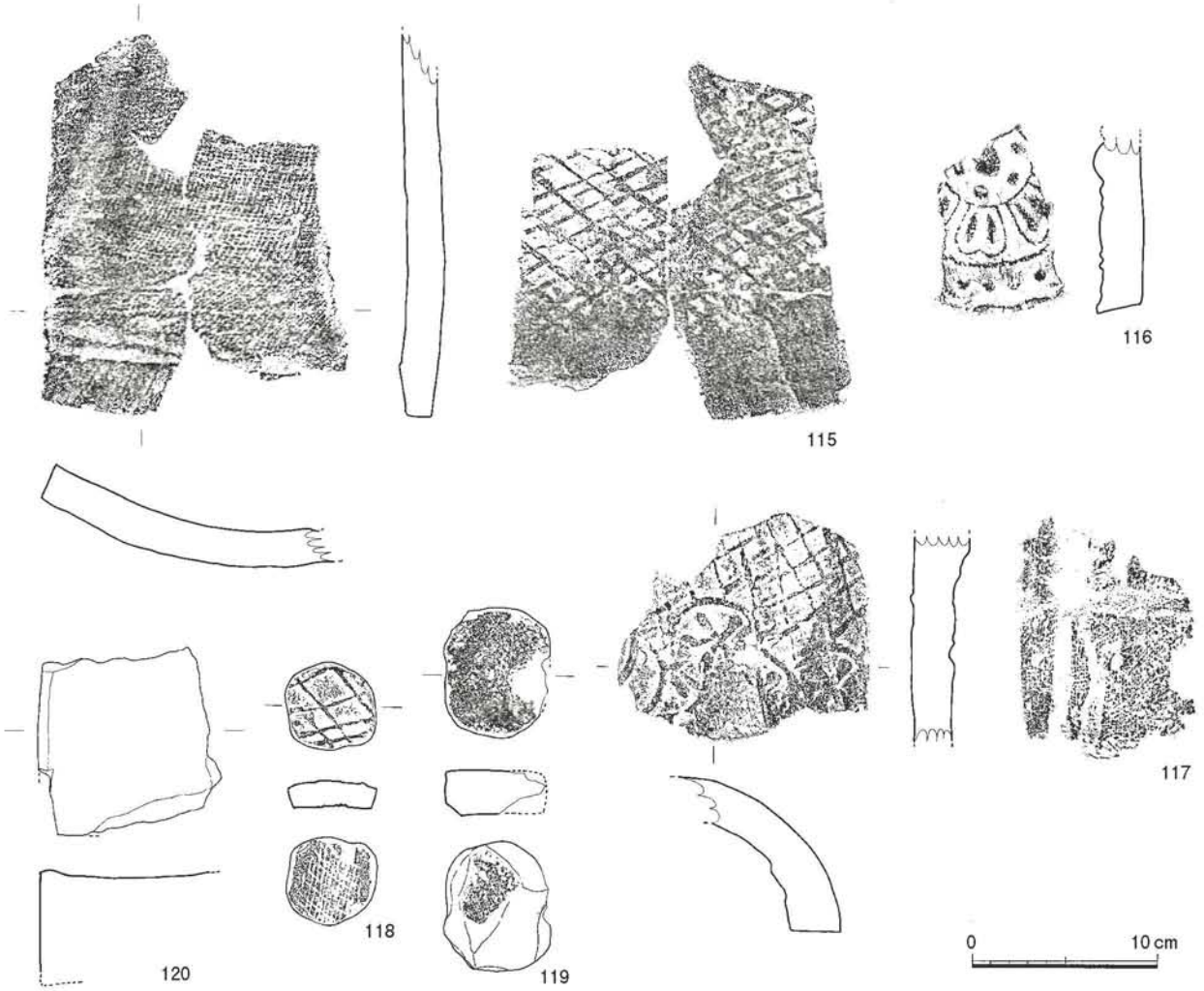
ラ切り、72 ～ 76 は糸切りでいずれも板状圧痕を有する。77 ～ 79 は瓦器椀である。口径 16.6 ㎝～ 17.0 ㎝を測る。内外面共にヘラ磨きを施す。80・81 は瓦器小皿である。口径 9.8 ㎝、器高 1.4 ㎝～ 1.6 ㎝を測る。82 ～ 84 は白磁碗である。82 がⅤ類、83 がⅡ－ 1 類、84 がⅣ類。85 ～ 88 は白磁皿である。89 は青白磁の蓋。90 は高麗青磁の皿。91 は天目茶碗。92 は須恵質の甕である。復元口径 24.0 ㎝を測る。

SE-92（第 11 図）

調査区北西隅に位置し、調査区外に延びる。調査区際で検出されたため完掘できなかった。掘り方は円形もしくは楕円形を呈するとおもわれ、深さ 203 ㎝を測る。井筒及びそれを据えるための掘り



第 12 図　SE-92 出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 13 図　SE-92 出土遺物実測図（1/4）

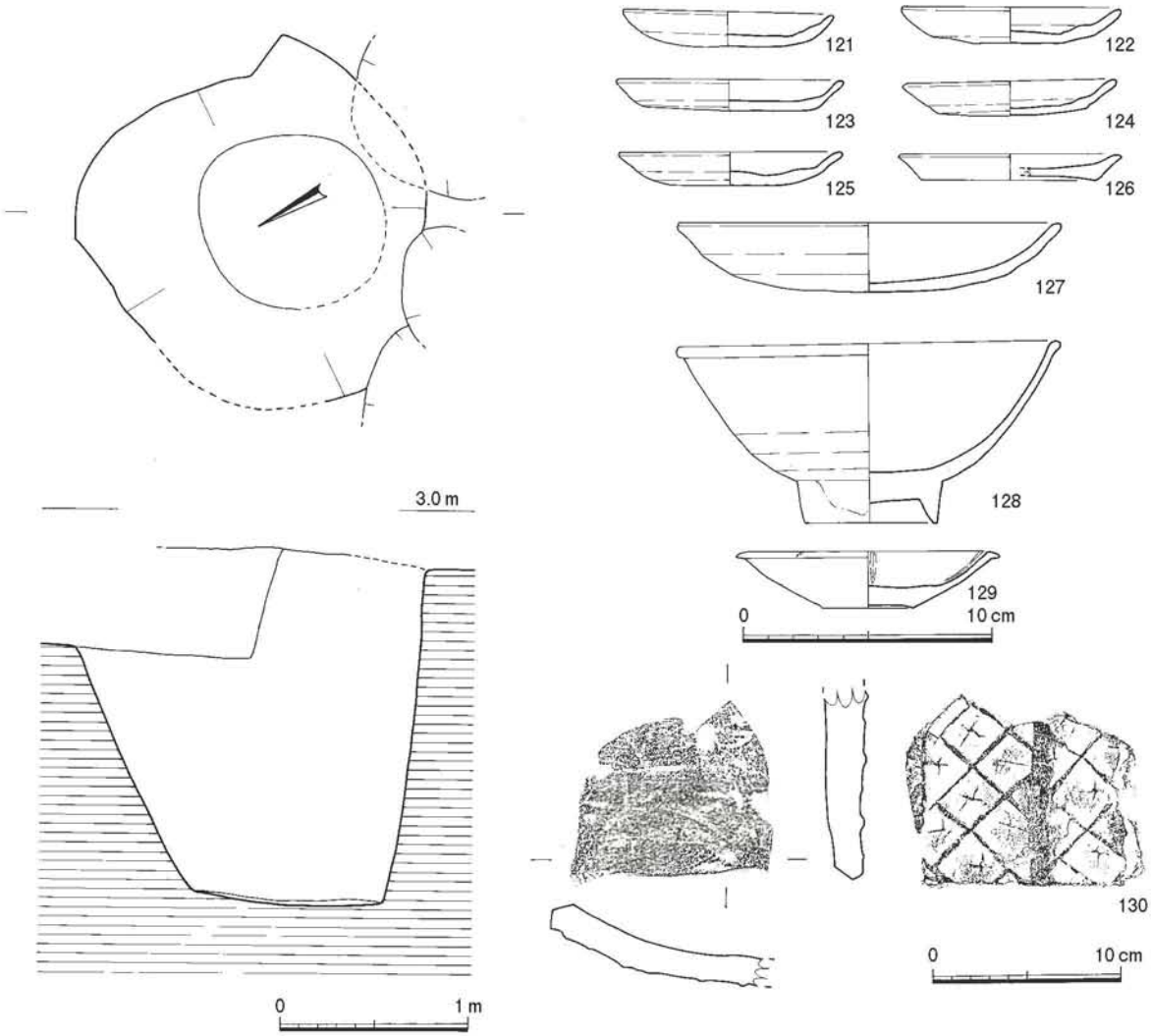
方は確認されなかった。

出土遺物（第 12・13 図）出土遺物の一部は上層よりまとまって出土した。93 ～ 99 は土師器の小皿である。口径 9.6 ㎝～ 10.0 ㎝、器高 1.3 ㎝～ 2.1 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。100 ～ 104 は土師器の坏である。100 は口径 12.4 ㎝、器高 2.5 ㎝、他は 14.8 ㎝～ 15.7 ㎝、器高 3.2 ㎝～ 3.7 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 101 以外板状圧痕を有する。105・106 は土師器の埦である。107・108 は黒色土器Ｂ類の碗である。109 は上層出土の白磁皿。110 は須恵器の坏。底部は糸切り。111 は須恵質の甕。112 は土師器の高坏。113 は古式土師器の甕で混入品。114 ～ 120 は瓦。114・115 は平瓦である。凸面は 114 が細かい方形の格子目叩き、115 が粗い格子目叩きを施す。内面は布目が残る。116 は軒丸瓦の瓦当部。復弁蓮華文で外区に珠文、内区に蓮子を配する。117 は丸瓦。叩打痕文字瓦で凸面は格子目叩きで、丸囲いの「大」の字がみられる。凹面には布目が残る。尚、同一の叩打痕文字の可能性がある瓦が第 22 次調査で出土している。118・119 は瓦玉で平瓦を再加工したものである。120 は磚である。

SE-106（第 14 図）

SE-74 の北に位置する。掘り方は円形を呈し、径 190 ㎝前後、深さ 177 ㎝を測る。掘り方上部は攪乱されている。井筒は確認できなかったが深さから考えて井戸とした。

出土遺物（第 14 図）121 ～ 126 は土師器の小皿。口径 8.6 ㎝～ 9.2 ㎝、器高 1.1 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。



第 14 図　SE-106 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

底部は 121 ～ 125 がヘラ切りで 122 以外板状圧痕を有する。126 が糸切り。127 は土師器の坏。復元口径 15.4 ㎝、器高 2.8 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。128 は白磁碗Ⅴ－3a 類。129 は白磁皿Ⅳ－2b 類。130 は凸面は粗い格子目叩きで格子の中に十字形の文様がみられる。凹面は布目が残る。他に滑石製品、鉄釘等が出土している。

2）土坑

SK-2（第 15 図）

調査区西に位置し、調査区外に延びる。楕円形を呈するとおもわれる。長さ 67 ㎝以上、幅 90 ㎝、深さ 53 ㎝を測る。

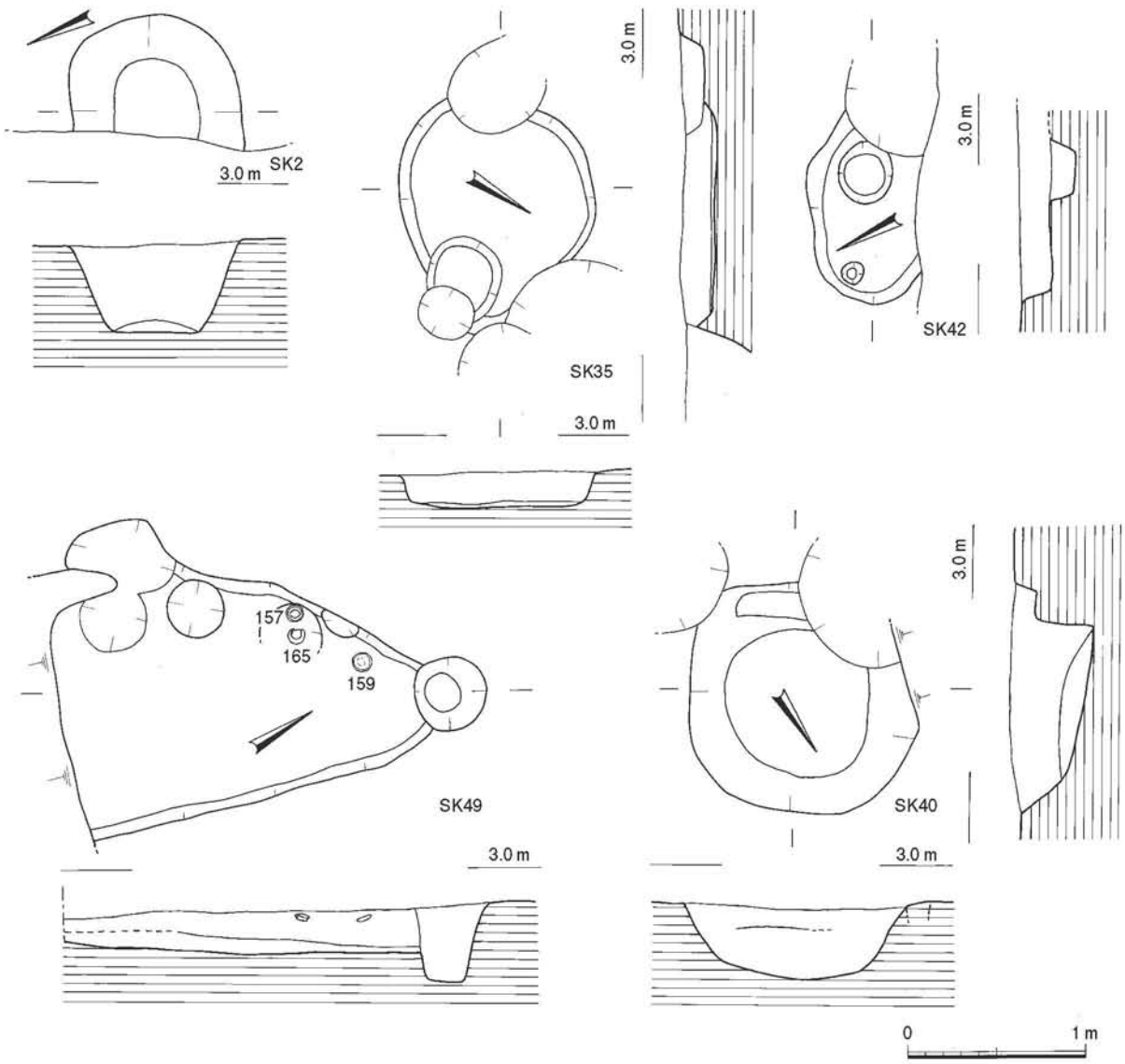
出土遺物（第 16 図）131 は土師器の小皿である。復元口径 9.5 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。

SK-35（第 15 図）

調査区南に位置し、楕円形を呈する。長さ 140 ㎝程度、幅 110 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。遺物は土師器の細片が出土している。

SK-40（第 15 図）

調査区南東に位置し、SE-50 を切る。円形を呈し、南側に段が付く。長さ 140 ㎝、幅 130 ㎝、深



第 15 図　SK-2・35・40・42・49 実測図（1/40）

さ 50 ㎝を測る。

出土遺物（第 16 図）132 ～ 135 は土師器の小皿である。口径 8.8 ㎝～ 9.4 ㎝、器高 1.1 ㎝～ 1.2 ㎝を測る。132 がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切り。136・137 は土師器の坏でそれぞれ口径 15.6 ㎝、15.4 ㎝を測る。137 の底部は糸切り。138・139 は土師器の高坏。141 ～ 148 は白磁。141 は皿か。他はⅣ類、Ⅴ類の碗。149 ～ 152 は青磁。149 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－3a 類。150・151 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－2c 類。152 は壺。153 は平瓦、154 は丸瓦。

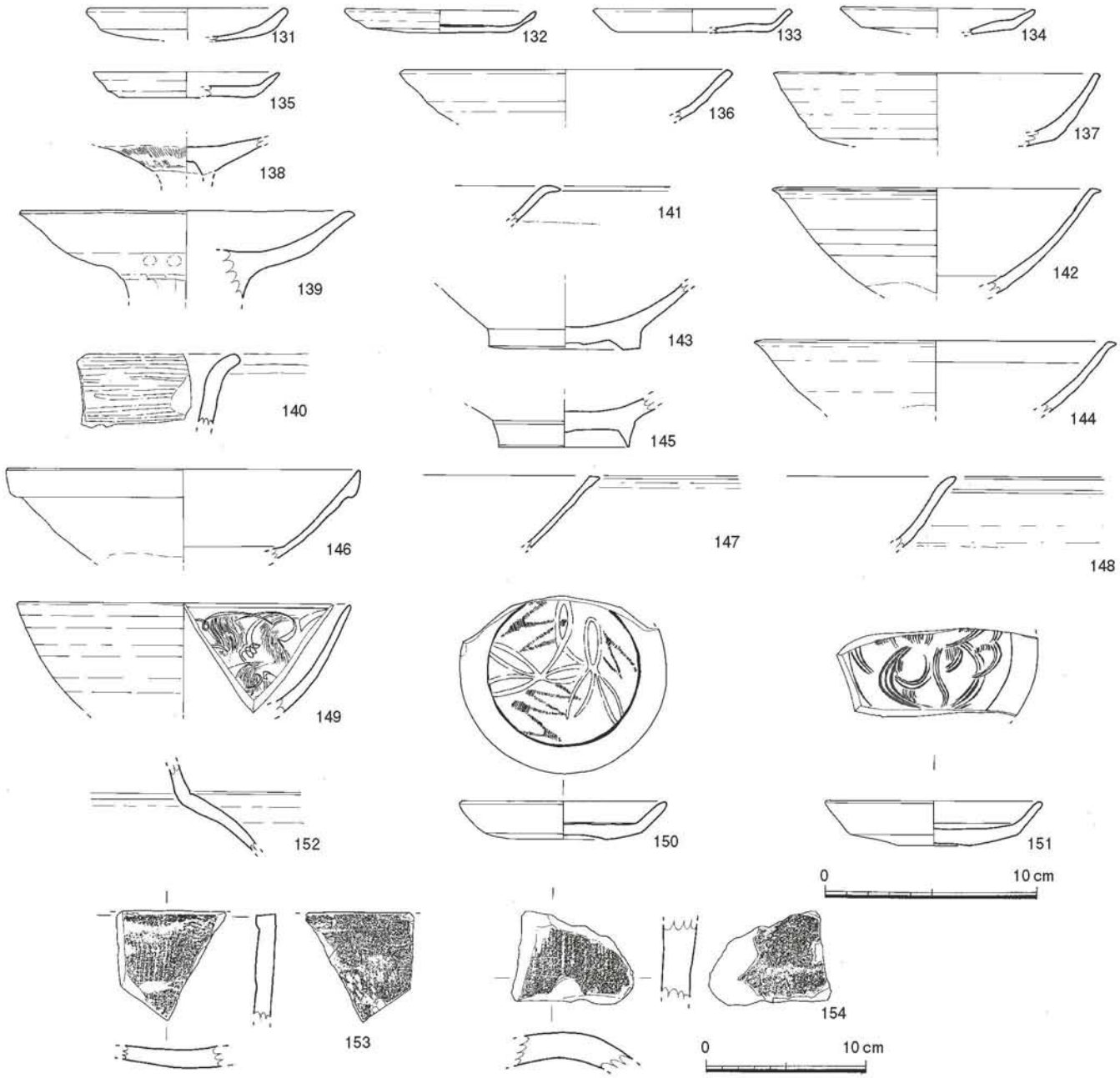
SK-42（第 15 図）

調査区南東に位置し、SK-40 を切る。南側を攪乱に切られる。楕円形を呈するとおもわれる。深さ 17 ㎝を測る。

出土遺物（第 17 図）155 は土師器の小皿である。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。復元口径 9.5 ㎝を測る。156 は土師器の坏で復元口径 17.8 ㎝を測る。調整は内外面ともヨコナデを施す。

SK-49（第 15 図）

調査区南に位置し、南部を埋設管に切られる。楕円形を呈するとおもわれる。長さ 205 ㎝以上、



第 16 図　SK-2・40 出土遺物実測図（1/3・1/4）

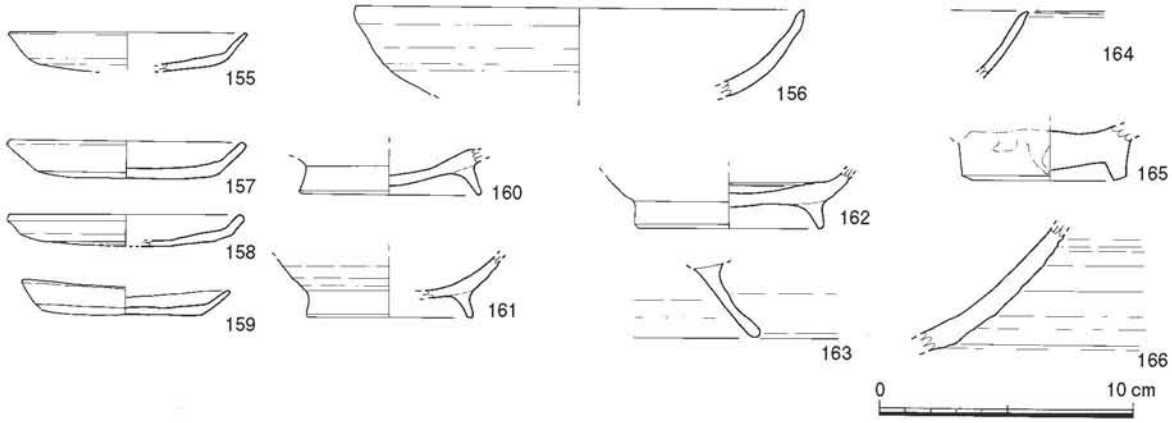
幅 140 ㎝程度、深さ 22 ㎝を測る。

出土遺物（第 17 図）157 ～ 159 は土師器の小皿である。口径 8.6 ㎝～ 9.5 ㎝、器高 1.2 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 157 は板状圧痕を有する。160 ～ 162 は土師器埦。163 は高台部。164・165 は白磁碗。166 は土師器の鉢か。

SK-59（第 18 図）

調査区西端に位置し、西側が調査区外に延びる。楕円形を呈し、長さ 140 ㎝以上、幅 150 ㎝、深さ 80 ㎝を測る。上層からまとまって遺物が出土した。

出土遺物（第 19 図）167・168 は土師器の小皿である。それぞれ口径は 8.5 ㎝、8.9 ㎝、器高 0.9 ㎝、1.0 ㎝を測る。底部はいずれも糸切りで板状圧痕を有する。169 は白磁碗Ⅷ類。170 は白磁の水注、注口部。171・172 は陶器の鉢である。172 は復元口径 21.2 ㎝を測る。釉は灰オリーブ色を呈し、口縁部に



第 17 図　SK-42・49 出土遺物実測図（1/3）

目跡が残る。

SK-62（第 18 図）

調査区北東に位置し、SE-74・SK-76 を切る。円形を呈し、径 81 ㎝～ 91 ㎝、深さ 31 ㎝を測る。

出土遺物（第 19 図）173･174 は土師器の小皿である。それぞれ口径は 10.4 ㎝、9.6 ㎝、器高 1.1 ㎝、1.4 ㎝を測る。底部は 173 が糸切り、174 がヘラ切りで板状圧痕を有する。175 は瓦器の小皿である。復元口径 9.0 ㎝を測る。内外面共にヘラミガキを施す。176・177 は白磁碗。

SK-63（第 18 図）

調査区中央に位置し、SK-102 を切る。円形を呈し、径 80 ㎝、深さ 30 ㎝を測る。

出土遺物（第 19 図）178･179 は土師器の小皿である。それぞれ口径は 8.8 ㎝、9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、1.1 ㎝を測る。底部は糸切りで、178 は板状圧痕を有する。180 は土師器の坏で口径 16.2 ㎝、器高 2.9 ㎝を測る。底部は糸切りで、板状圧痕を有する。181 は瓦器椀である。復元口径 16.2 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。調整は外面上位がヨコナデ、中位がヘラミガキ、下位に指頭圧痕が残る。内面はヘラミガキを施す。182 ～ 186 は白磁。182・183 はⅤ類の碗で 182 は底部に墨書を有する。185・186 はⅢ類の皿。187 は陶器の鉢。復元口径 19.2 ㎝を測る。釉は黄褐色を呈する。口縁部に目跡が残る。

SK-69（第 18 図）

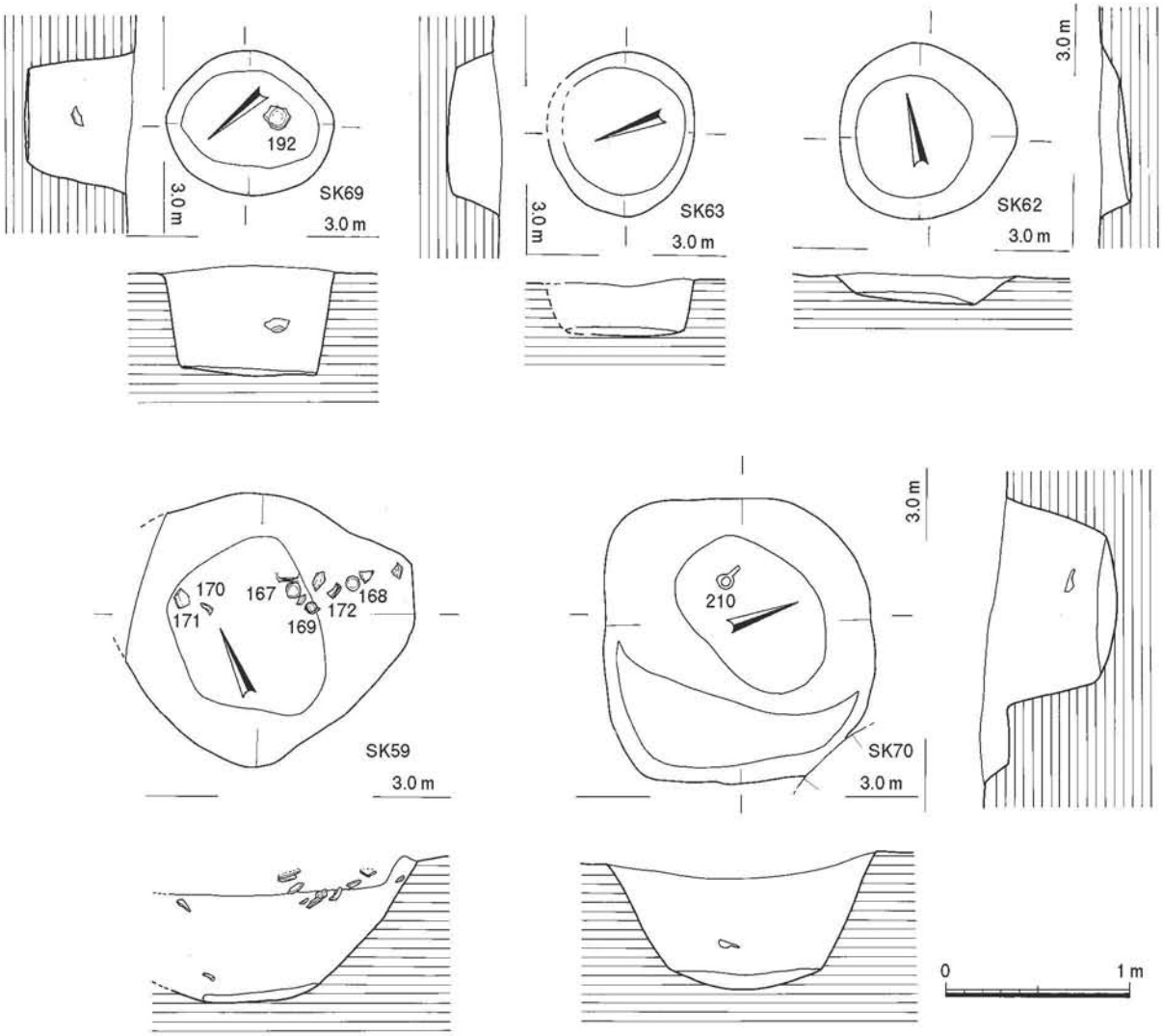
調査区北に位置し、SK-76 を切る。楕円形を呈し、長さ 91 ㎝、幅 79 ㎝、深さ 55 ㎝を測る。

出土遺物（第 19 図）188･189 は土師器の小皿である。それぞれ口径は 9.4 ㎝、9.2 ㎝、器高 1.7 ㎝、1.3 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。190 は瓦器椀。191 は白磁碗Ⅳ類。192 は白磁の鉢。

SK-70（第 18 図）

調査区北西に位置し、SE-92 を切る。楕円形を呈し、東側に段が付く。長さ 157 ㎝、幅 147 ㎝、深さ 75 ㎝を測る。

出土遺物（第 19･20 図）193 ～ 195 は土師器の小皿である。口径 8.6 ㎝～ 9.1 ㎝、器高 1.0 ㎝～ 1.2 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 193・195 は板状圧痕を有する。196 ～ 199 は土師器の坏で復元口径 14.4 ㎝～ 15.4 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 199 は板状圧痕を有する。200 ～ 205 は瓦器椀。復元口径 14.8 ㎝～ 17.6 ㎝を測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。206 は白磁碗。207 は陶器の鉢。208 は土師器の高坏脚部。混入品である。209 は砥石。210 は鉄製の杓子。全長 17.2 ㎝、頭部は径 6.5 ㎝、深さ 1.7 ㎝を測る。211 ～ 214 は平瓦。211 の凸面は叩き後、ナデを施す。212・213 の凸面は粗い格子目叩き、214 は細かい格子目叩きを施す。いずれも凹面には布目が残る。



第 18 図　SK-59・62・63・69・70 実測図（1/40）

SK-73（第 21 図）

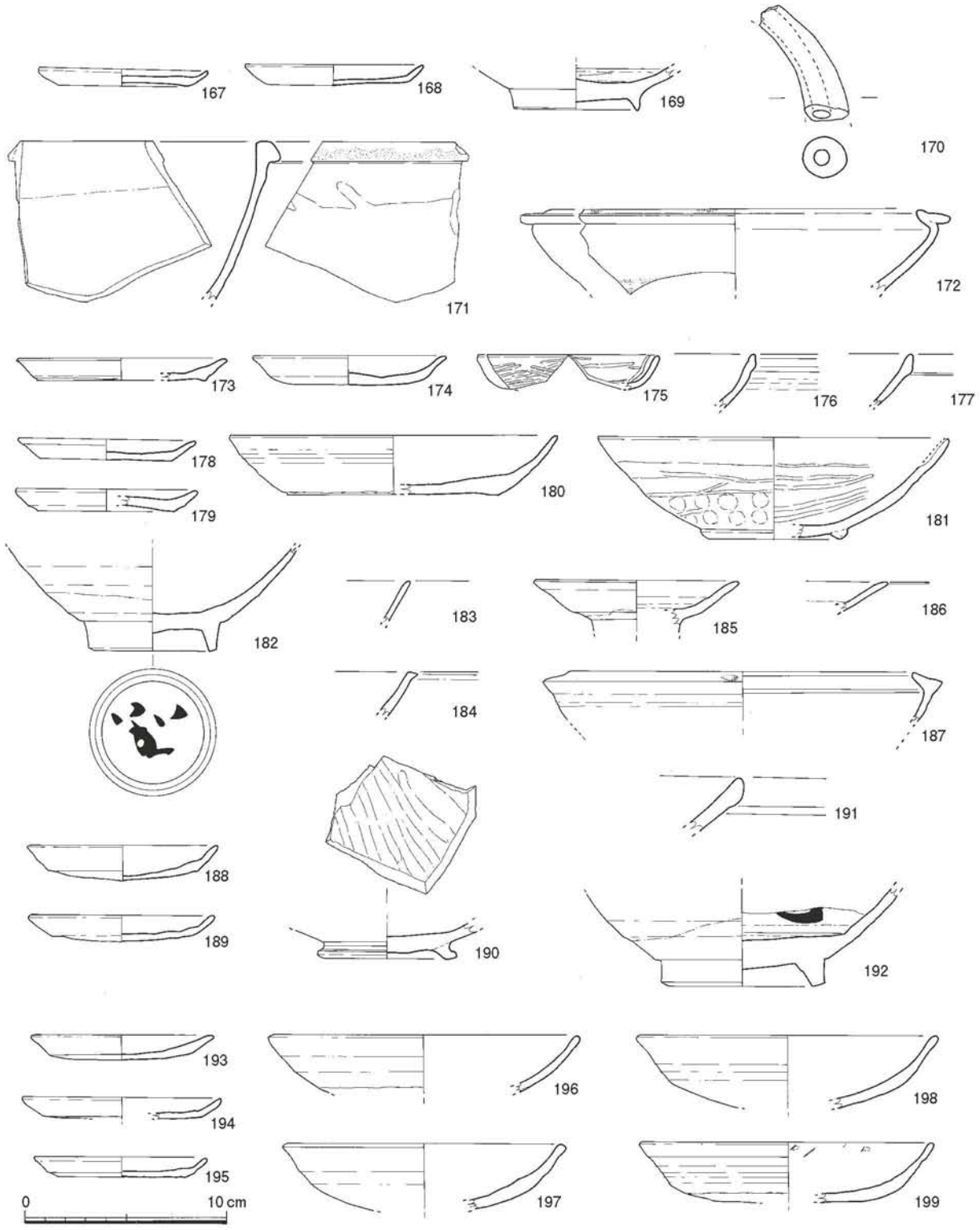
調査区北東に位置し、調査区外に延びる。楕円形を呈し、長さ 190 ㎝、幅 120 ㎝程度、深さ 57 ㎝を測る。

出土遺物（第 22 図）215 ～ 217 は土師器の小皿である。口径 9.2 ㎝～ 9.3 ㎝、器高 1.2 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 215 は板状圧痕を有する。218 は土師器の坏。口径 15.2 ㎝を測る。底部はヘラ切り。219 は黒色土器Ａ類の椀。復元口径 16.2 ㎝、器高 5.1 ㎝を測る。内外面共にヘラミガキを施す。外底部に「×」印のヘラ記号を有する。220・221 は白磁碗Ⅳ類。222 は白磁皿Ⅳ類。

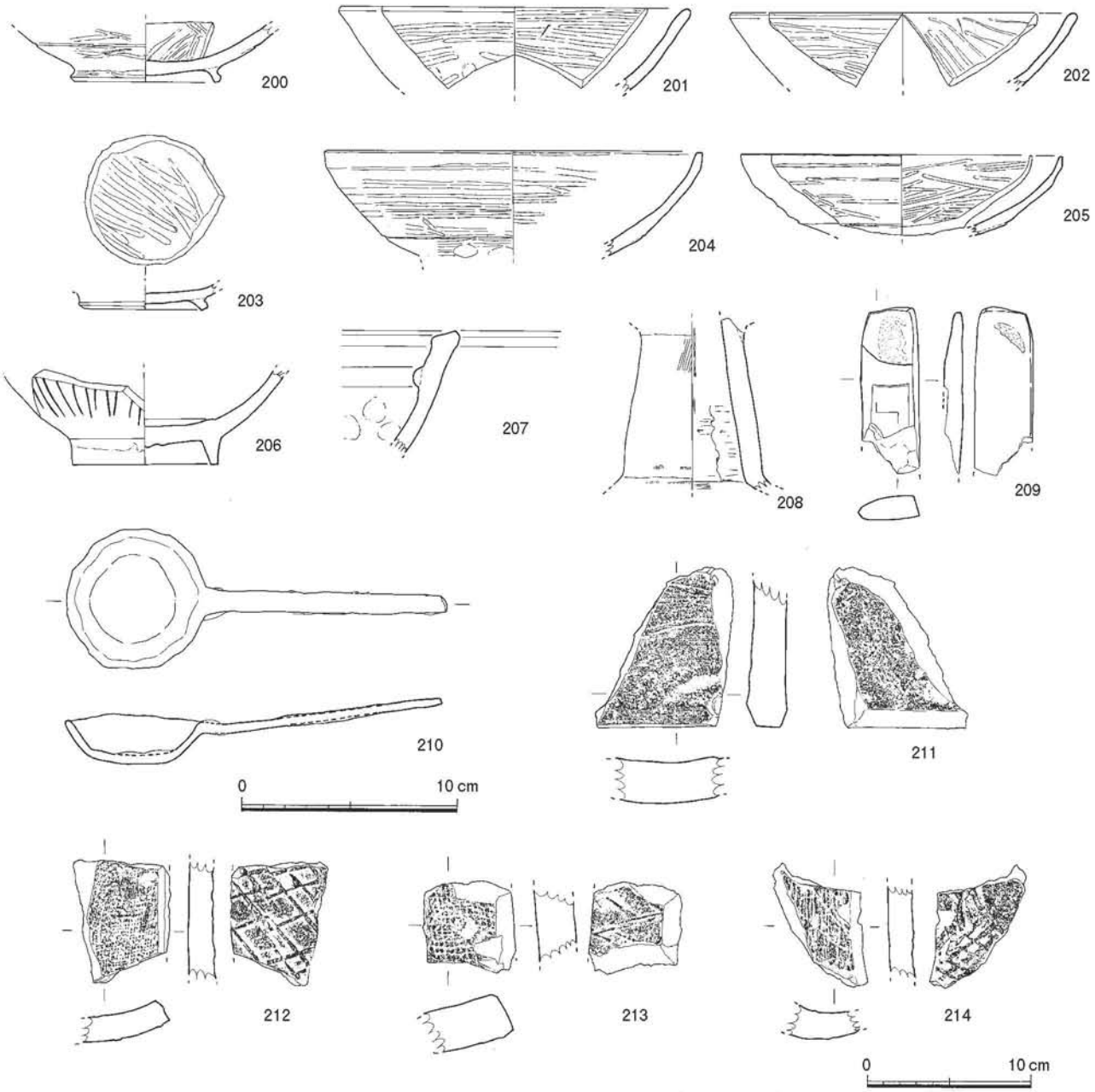
SK-76（第 21 図）

調査区北東に位置し、SK-62・69・SE-74 に切られる。平面形は楕円形か。幅 158 ㎝、深さ 79 ㎝を測る。上層から土師器の小皿や坏等の遺物がまとまって出土した。

出土遺物（第 22 図）223 ～ 240 は土師器の小皿である。口径 8.8 ㎝～ 9.2 ㎝を測る。223 は底部に穿孔する。223 ～ 239 は底部はヘラ切りで 225 ～ 231・233・237 ～ 239 は板状圧痕を有する。240 は糸切りで板状圧痕を有する。241 ～ 247 は土師器の坏である。底部はヘラ切りで 242・244 は板状圧痕を有する。248 は白磁碗。249・250 は白磁皿。251 は青磁の壺。252 は鉄製の紡錘車で



第 19 図　SK-59・62・63・69・70 出土遺物実測図（1/3）



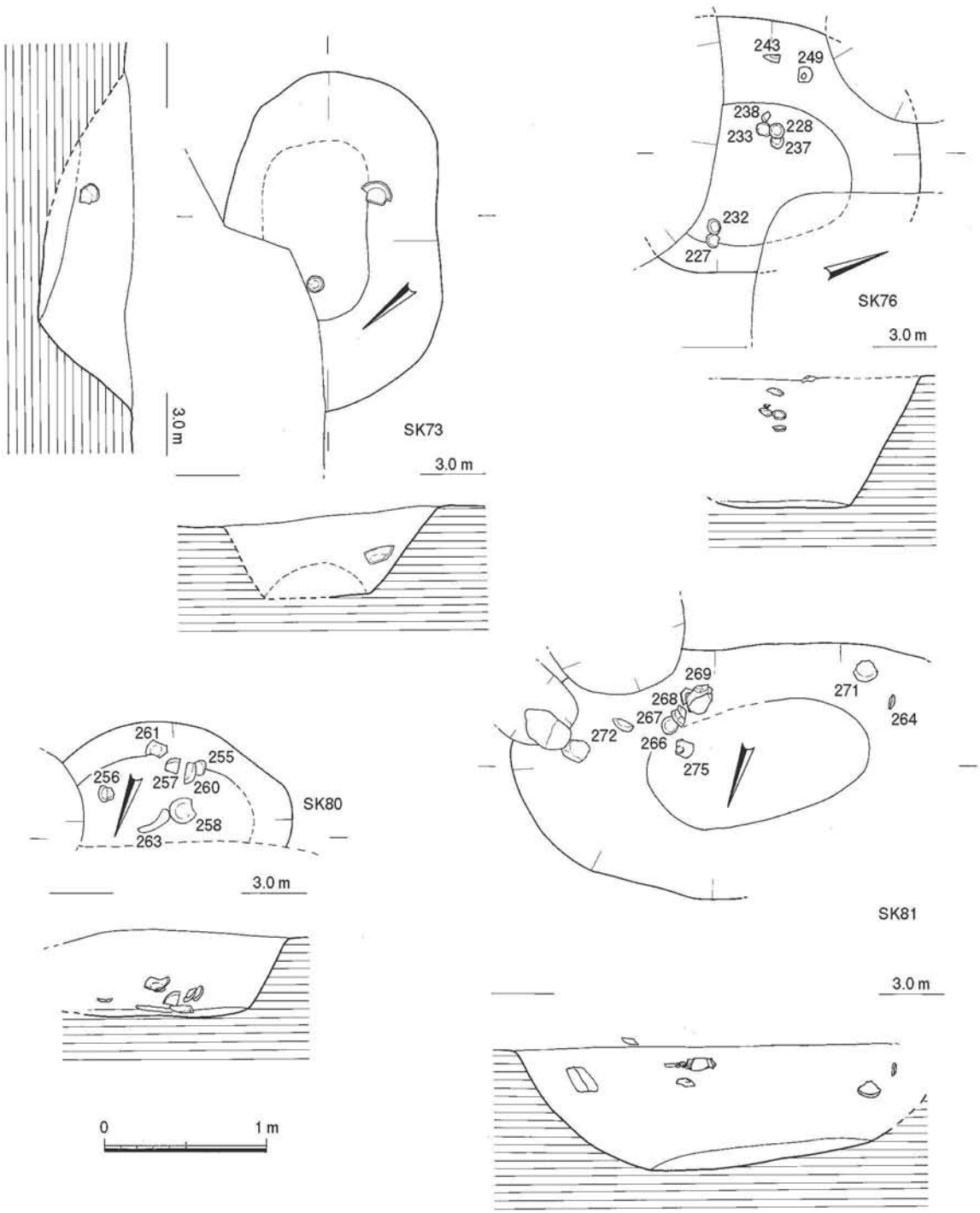
第 20 図　SK-70 出土遺物実測図（1/3・1/4）

ある。253 は平瓦。

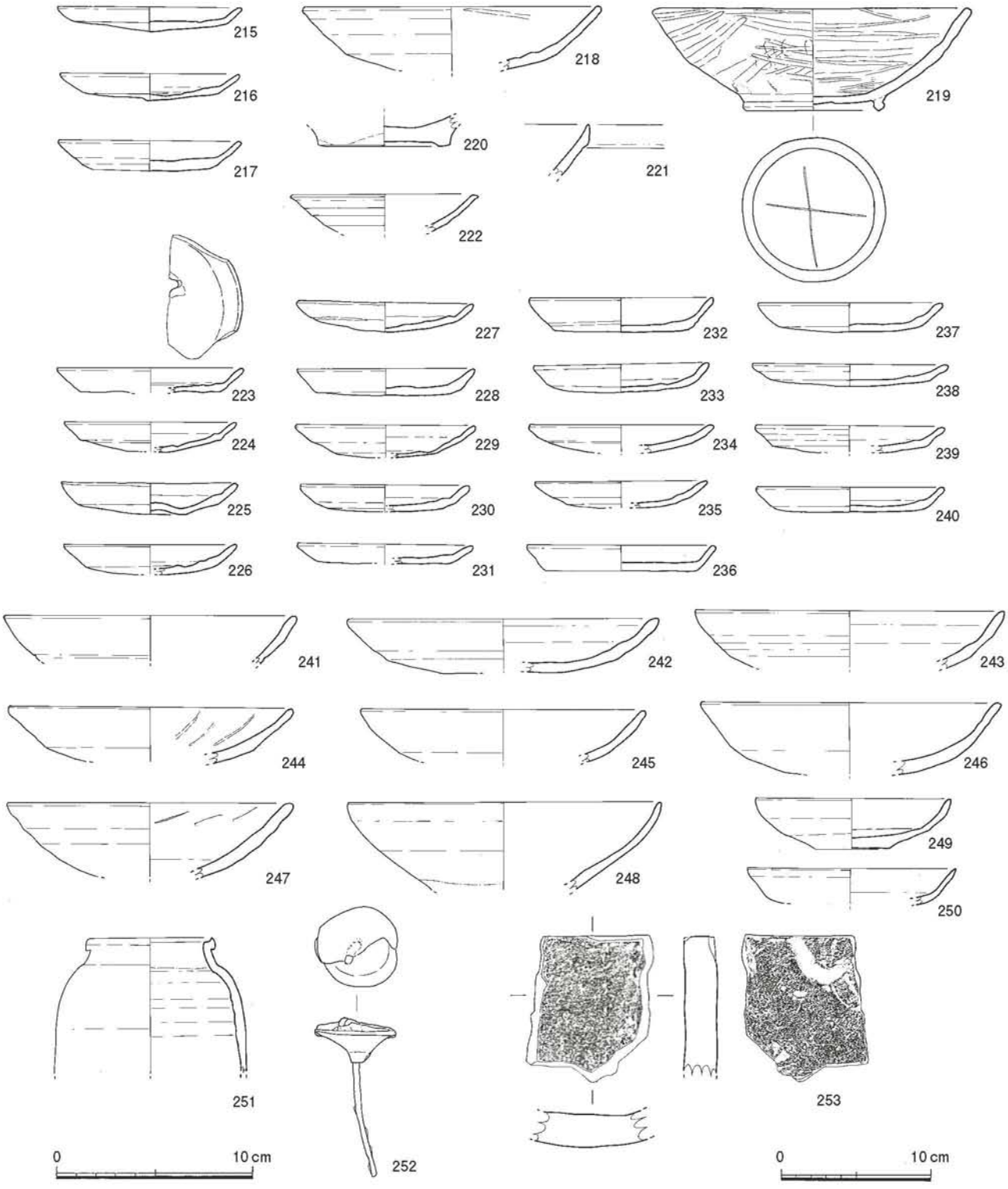
SK-80（第 21 図）

調査区中央に位置し、SK-81 に切られる。当初 SK-81 と区別できず、東側を半裁し、断面で確認した段階で判別した。平面形は楕円形か。深さ 55 ㎝を測る。

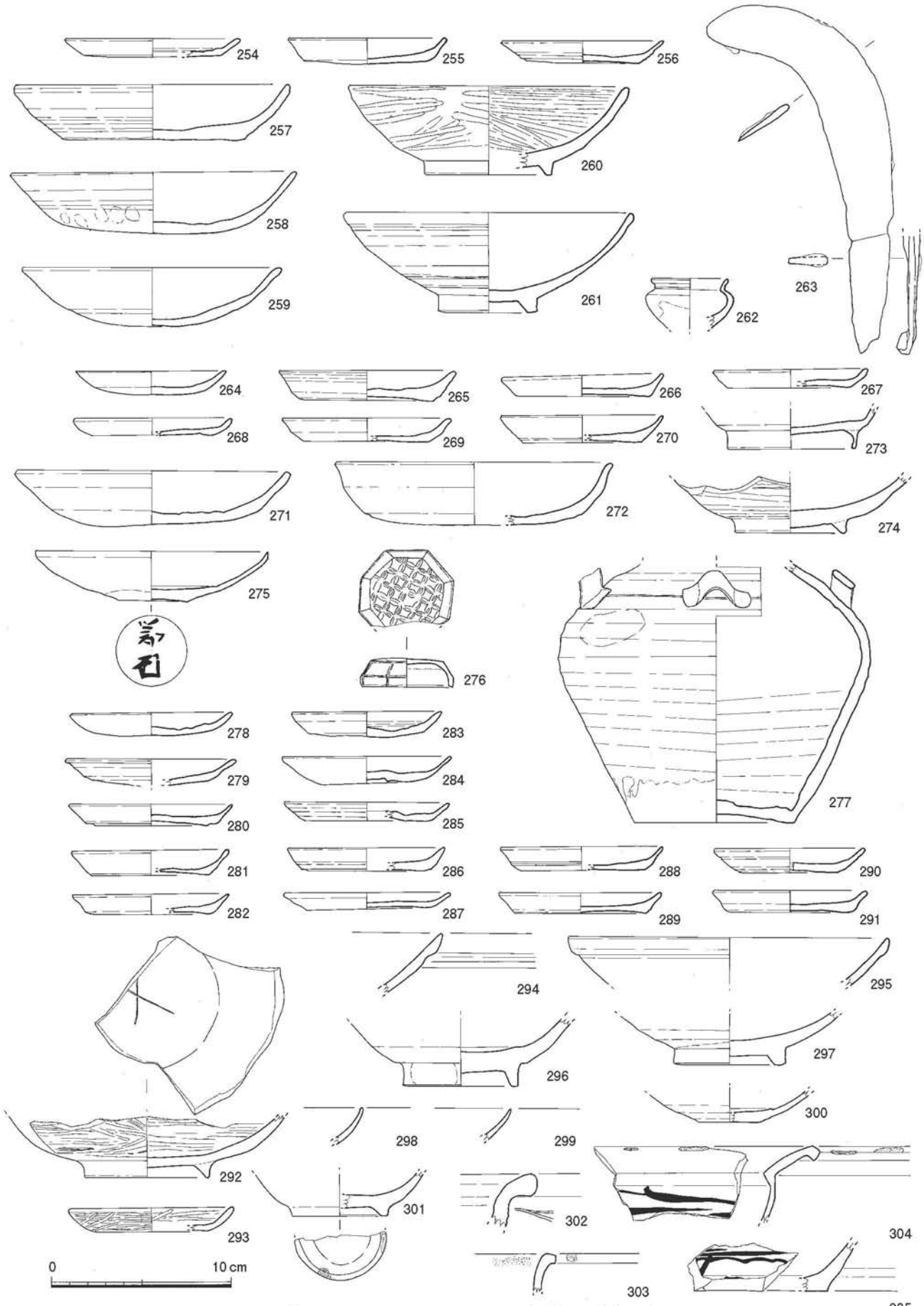
出土遺物（第 23 図）254 ～ 256 は土師器の小皿である。口径 8.8 ㎝～ 9.8 ㎝、器高 1.1 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。底部は 254 がヘラ切りで、255・256 が糸切りで板状圧痕を有する。257 ～ 259 は土師器の坏である。口径 14.4 ㎝～ 15.9 ㎝、器高 3.1 ㎝～ 3.5 ㎝を測る。257 は底部は糸切りで板状圧痕を有する。258・259 はヘラ切りで板状圧痕を有する。260 は土師器の埦。復元口径 15.6 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。261 は白磁碗Ⅱ類。262 は陶器の小壺。263 は鉄製の鎌。全長 19.4 ㎝、身幅 3.4 ㎝を測る。



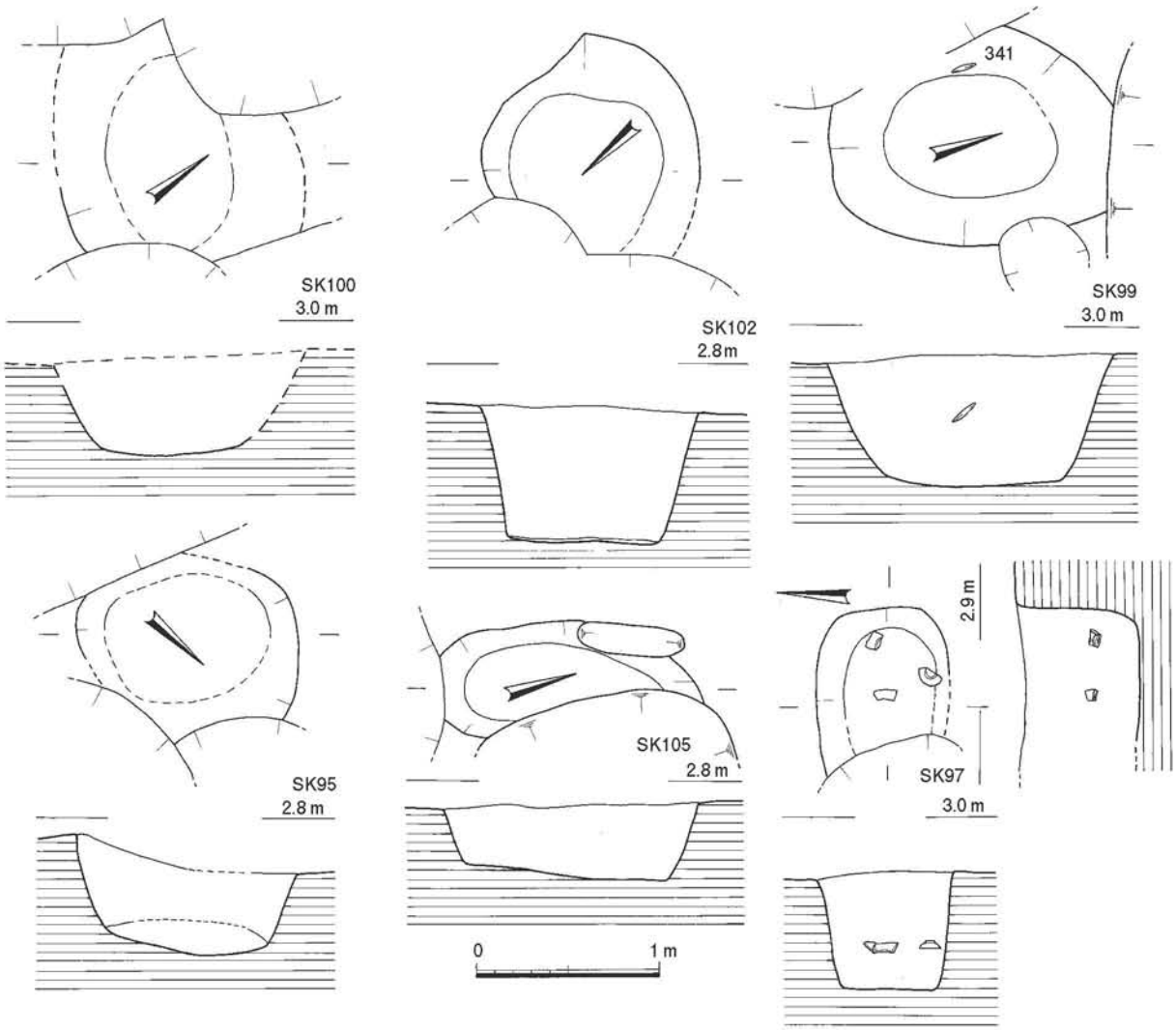
第 21 図　SK-73・76・80・81 実測図（1/40）



第 22 図　SK-73・76 出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 23 図　SK-80・81 出土遺物実測図（1/3）



第 24 図　SK-95・97・99・100・102・105 実測図（1/40）

SK-81（第 21 図）

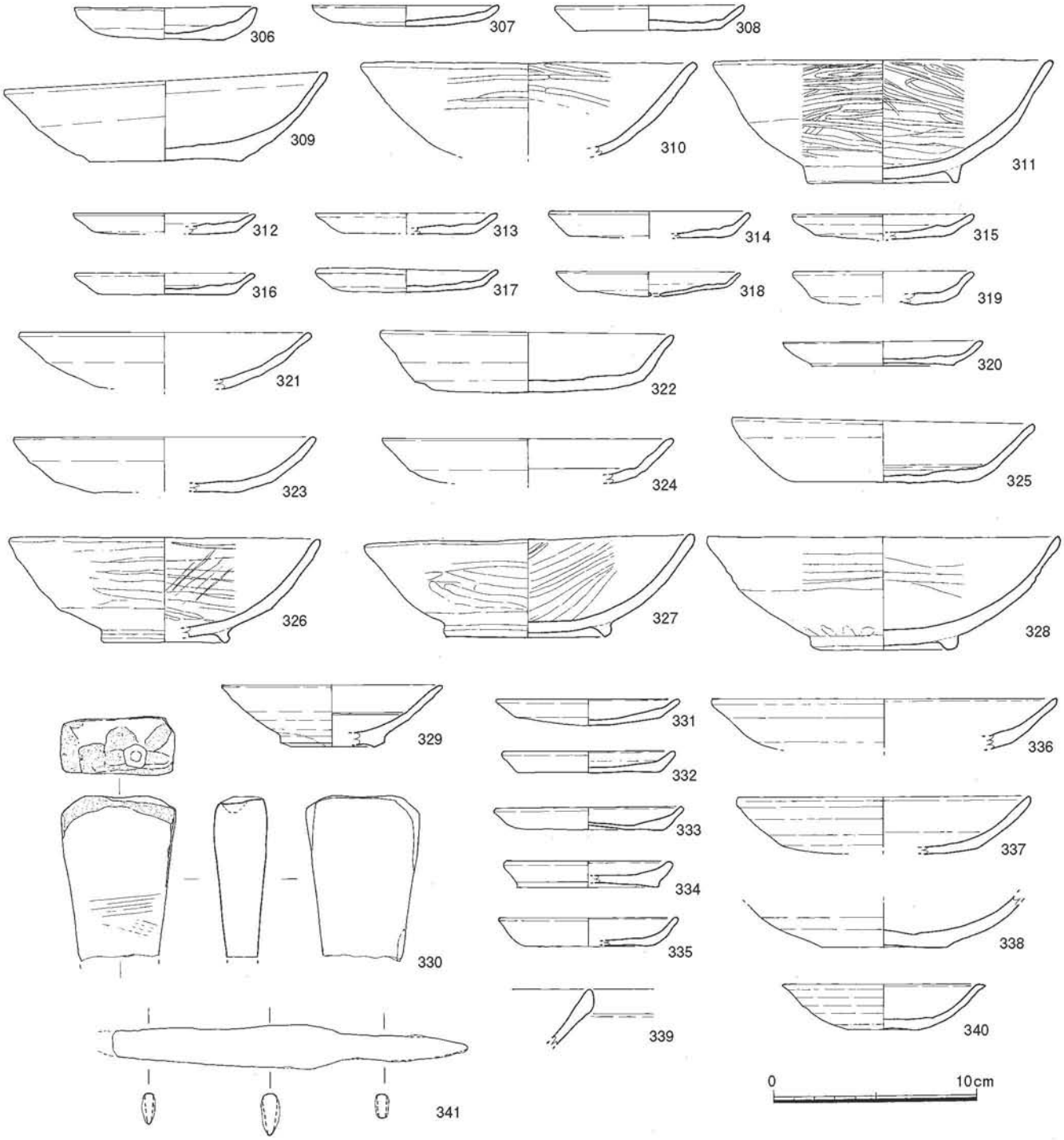
調査区中央に位置し、SK-80 を切る。当初 SK-80 と区別できず、東側を半裁し、断面で確認した段階で判別した。平面形は楕円形を呈する。長さ 280 ㎝、幅 150 ㎝程度、深さ 73 ㎝を測る。

出土遺物（第 23 図）264 ～ 270 は土師器の小皿である。口径 8.4 ㎝～ 10.0 ㎝、器高 1.0 ㎝～ 1.7 ㎝を測る。264 の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切りで 265・266・270 が板状圧痕を有する。271・272 は土師器の坏である。それぞれ口径 15.4 ㎝、15.2 ㎝、器高 3.1 ㎝、3.5 ㎝を測る。271 の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。272 は糸切り。273・274 は土師器埦。275 は白磁皿 Ⅵ－１ｂ類。底部に墨書を有する。276 は合子の蓋。277 は陶器の四耳壺。釉は暗オリーブ色を呈する。278 ～ 305 は SK-80・81 の帰属不明の土器である。278 ～ 291 は土師器の小皿である。292 は瓦器椀で内底部に「×」印のヘラ記号を有する。294 ～ 297 は白磁碗。298 ～ 300 は白磁皿。301 は高麗青磁の皿。302 は陶器壺。304・305 は黄釉鉄絵文盤。同一個体か。

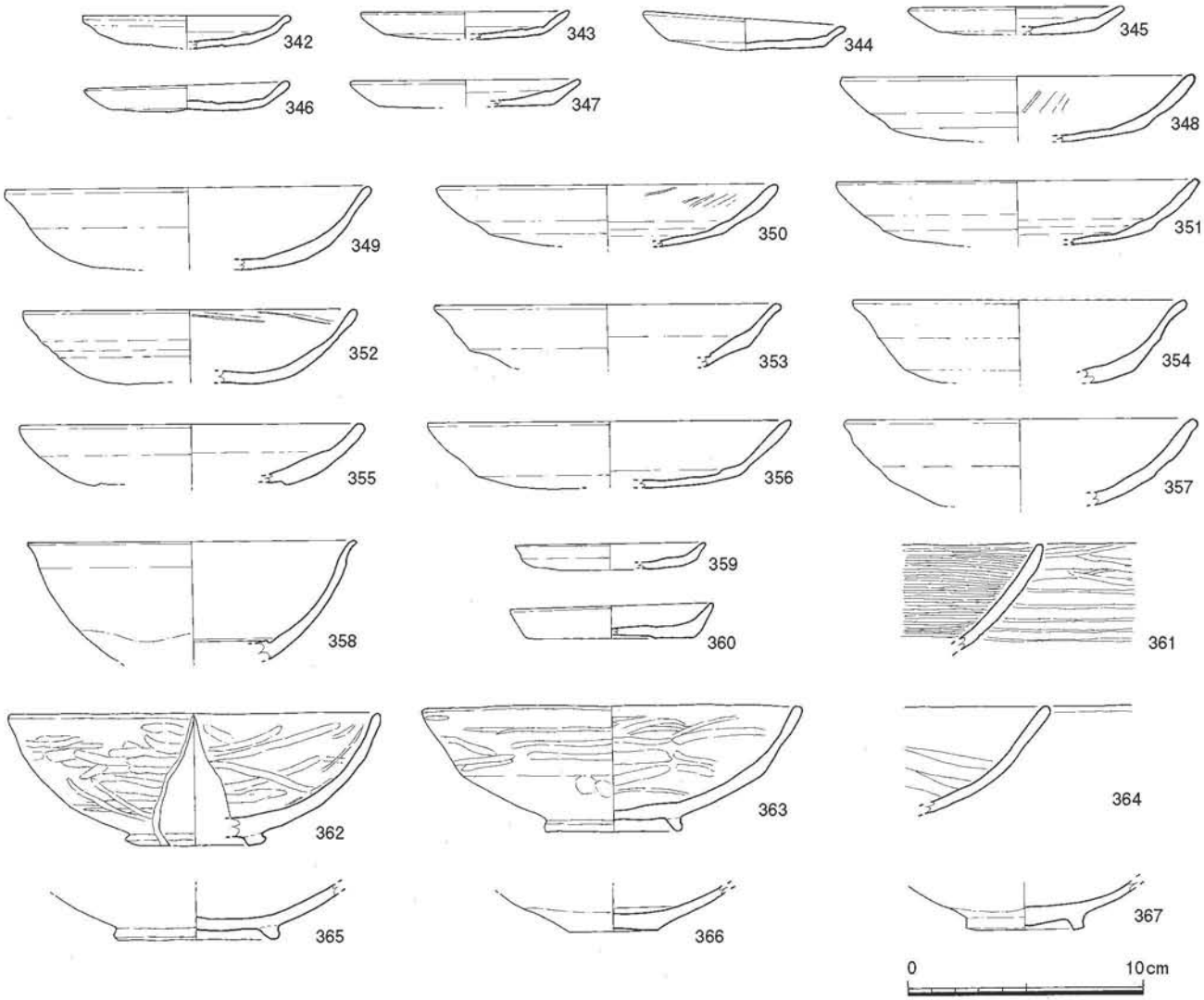
SK-95（第 24 図）

調査区北東に位置し、SK-73 に切られる。楕円形を呈し、長さ 60 ㎝、幅 50 ㎝程度、深さ 40 ㎝を測る。

出土遺物（第 25 図）306 ～ 308 は土師器の小皿である。口径 9.1 ㎝～ 9.4 ㎝、器高 1.2 ㎝～ 1.3 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。309 は土師器の坏である。口径 16.0 ㎝、器高 4.6 ㎝



第 25 図　SK-95・97・99 出土遺物実測図（1/3）



第 26 図　SK-100・102 出土遺物実測図（1/3）

を測る。底部は糸切り。310 は土師器埦。復元口径 16.6 ㎝を測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。311 は瓦器椀。口径 17.0 ㎝、器高 6.1 ㎝を測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。

SK-97（第 24 図）

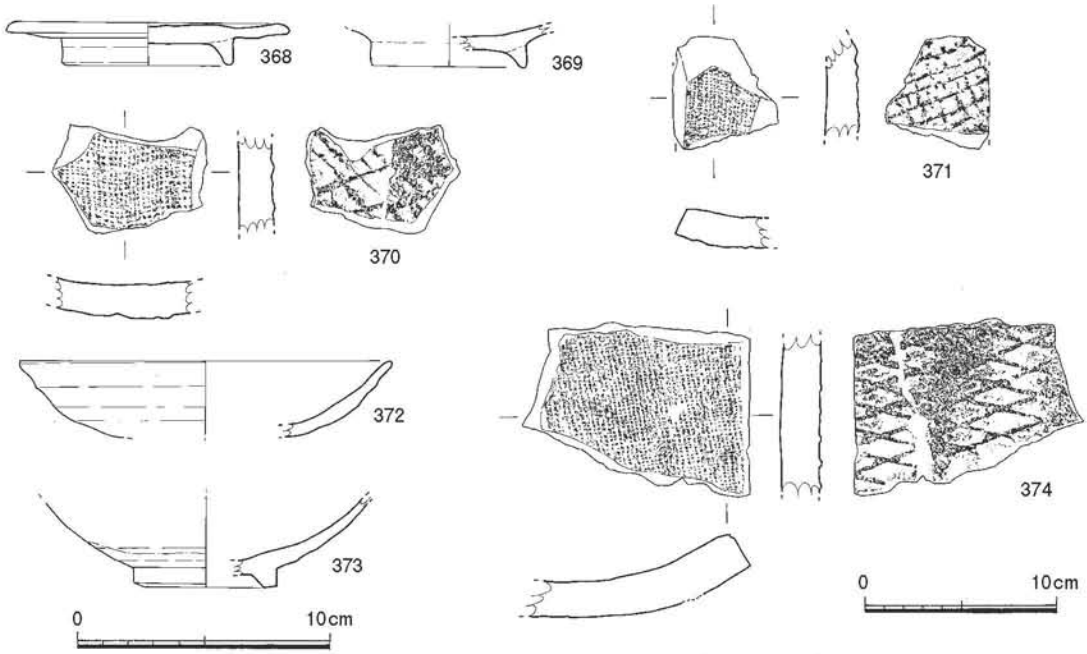
調査区北に位置し、西側を切られる。楕円形を呈し、幅 75 ㎝、深さ 63 ㎝を測る。

出土遺物（第 25 図）312 ～ 320 は土師器の小皿である。口径 9.0 ㎝～ 10.0 ㎝、器高 1.0 ㎝～ 1.7 ㎝を測る。318 は底部に穿孔する。312 ～ 319 は底部はヘラ切りで 314 ～ 317・319 は板状圧痕を有する。320 は糸切り。321 ～ 325 は土師器の坏である。口径 14.4 ㎝～ 15.0 ㎝、器高 2.7 ㎝～ 3.1 ㎝を測る。321 ～ 324 は底部はヘラ切りで 322 は板状圧痕を有する。325 は糸切りで板状圧痕を有する。326 ～ 329 は瓦器椀である。329 は白磁皿Ⅱ－ 1a 類。330 は砥石。

SK-99（第 24 図）

調査区北東に位置し、SE-74 に切られる。楕円形を呈し、長さ 155 ㎝以上、幅 120 ㎝、深さ 67 ㎝を測る。

出土遺物（第 25 図）331 ～ 335 は土師器の小皿である。口径 8.6 ㎝～ 9.4 ㎝、器高 1.1 ㎝～ 1.4 ㎝を測る。331 の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切りで 333・335 が板状圧痕を有する。336 ～ 338 は土師器の坏である。復元口径 14.6 ㎝～ 17.0 ㎝を測る。底部は 337 がヘラ切り、338



第 27 図　SD-51・77 出土遺物実測図（1/3・1/4）

が糸切り。339 は白磁碗Ⅳ類。340 は白磁皿Ⅴ－2a 類。341 は刀子。身幅 2.1 ㎝を測る。

SK-100（第 24 図）

調査区東に位置し、SK-99 に切られる。雨の影響で大半が壊れてしまった。楕円形を呈し、幅 140 ㎝程度、深さ 60 ㎝程度を測る。

出土遺物（第 26 図）342 ～ 347 は土師器の小皿である。口径 8.6 ㎝～ 10.0 ㎝、器高 1.0 ㎝～ 1.7 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 342 ～ 344・346 は板状圧痕を有する。348 ～ 357 は土師器の坏である。復元口径 14.2 ㎝～ 15.8 ㎝を測る。底部はヘラ切りで 349・350・352・356 は板状圧痕を有する。358 は白磁碗。

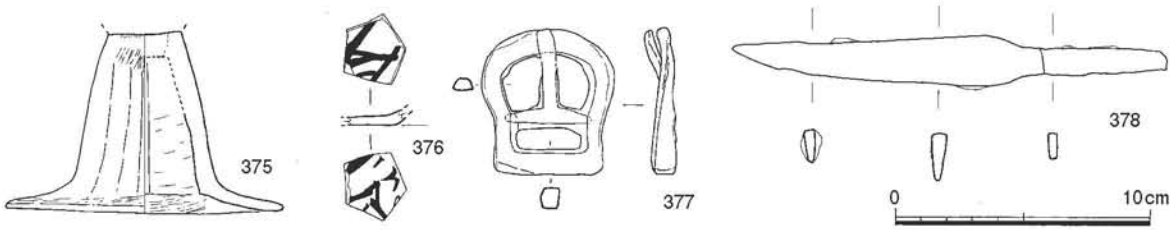
SK-102（第 24 図）

調査区中央に位置し、SK-63 に切られる。楕円形を呈し、幅 120 ㎝、深さ 73 ㎝を測る。

出土遺物（第 26 図）359・360 は土師器の小皿である。それぞれ口径 8.2 ㎝、8.6 ㎝、器高 1.1 ㎝、1.5 ㎝を測る。底部は糸切りで 360 は板状圧痕を有する。361 ～ 364 は瓦器椀。365 は土師器埦。366・367 は白磁皿。

SK-105（第 24 図）

調査区北に位置し、攪乱に東側を切られる。楕円形を呈し、長さ 139 ㎝、幅 60 ㎝程度、深さ 42 ㎝を測る。遺物は土師器、白磁の細片が出土している。



第 28 図　その他の出土遺物実測図（1/3）

3）溝

SD-51（第4図）

調査区南西部に位置し、南北方向に延びる。幅180㎝前後、深さ15㎝を測る。

出土遺物（第27図）368は高台付皿。口径11.4㎝、器高1.8㎝を測る。369は高台部。370・371は平瓦。370は粗い格子目叩き、371は細かい格子目叩きを施す。いずれも凹面には布目が残る。

SD-77（第4図）

調査区北東部に位置し、東西方向に延びる。幅30㎝前後、深さ20㎝を測る。

出土遺物（第27図）372は土師器の坏。復元口径14.8㎝を測る。373は白磁碗。374は平瓦。凸面は斜格子目叩きを施す。凹面には布目が残る。

4）その他の遺物（第28図）

375は高坏の脚部。376は土師器小皿で内外面に墨書がある。底部は糸切り。377は調査区南西端にかかるSK-1出土。鉄製の鉸具。他に底部ヘラ切り、糸切りの土師器が出土している。378は刀子。全長17.1㎝、身幅1.8㎝を測る。

5．小結

今回の調査では井戸、土坑、溝が検出され、集落の一端を確認したと考えられるが、宮崎宮との関連については明らかにできなかった。遺構の時期は11～12世紀代で、この時期は遺跡が宮崎宮の南東側を中心として展開した前時代から、範囲を砂丘の東斜面に拡大していく時期にあたる。本地点は宮崎宮の北東に接するが、宮崎宮創建時の遺構はほとんど見られず、近くに位置する第12次調査に近い時間的傾向を示す。各遺構についてみてみると井戸は5基確認されたが、この内完掘出来た3基は井筒の木質が遺存するものはなく、その上部は土層の堆積状況から廃棄段階で抜かれたものと思われる。また、この段階で土師器の小皿、坏等が廃棄されている。土坑については土師器の小皿、坏等が完形で廃棄されたものが幾つか見られるのが特徴的である。遺物についてはSE-92をはじめ、多くの遺構から瓦が出土した。周辺に瓦屋根の建物が存在する可能性が考えられる。また古墳時代前期の土師器が少量出土したが、当該期の遺構は確認できなかった。最後に焼土、炭化物を含む整地層について触れておきたい。本調査においてもこの層は確認できたが、遺存状況が悪いこともありその時期を確定できなかった。少量ではあるが壁面から出土した土器を見ると土師器の底部は糸切りを主体とするが、ヘラ切りも少量含み、白磁のみで青磁は確認できなかった。この層については従来元寇に起因する可能性が推測されているが、本地点の整地層はそれ以前に形成された可能性も考えられる。

Ⅲ．第41次調査

1．調査に至る経過

平成14年10月1日、三愛建物株式会社より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市東区箱崎3丁目2426他地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年10月29日、試掘調査を行い、その結果、溝等の遺構が検出された。その後計画範囲が変更となり、面積が増大したため平成15年8月15日再度試掘を行った。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。三愛建物株式会社と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成15年9月16日より開始、平成15年12月11日に終了した。

最後になりましたが、三愛建物株式会社をはじめ関係者の方々には調査に際し、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

2．調査体制

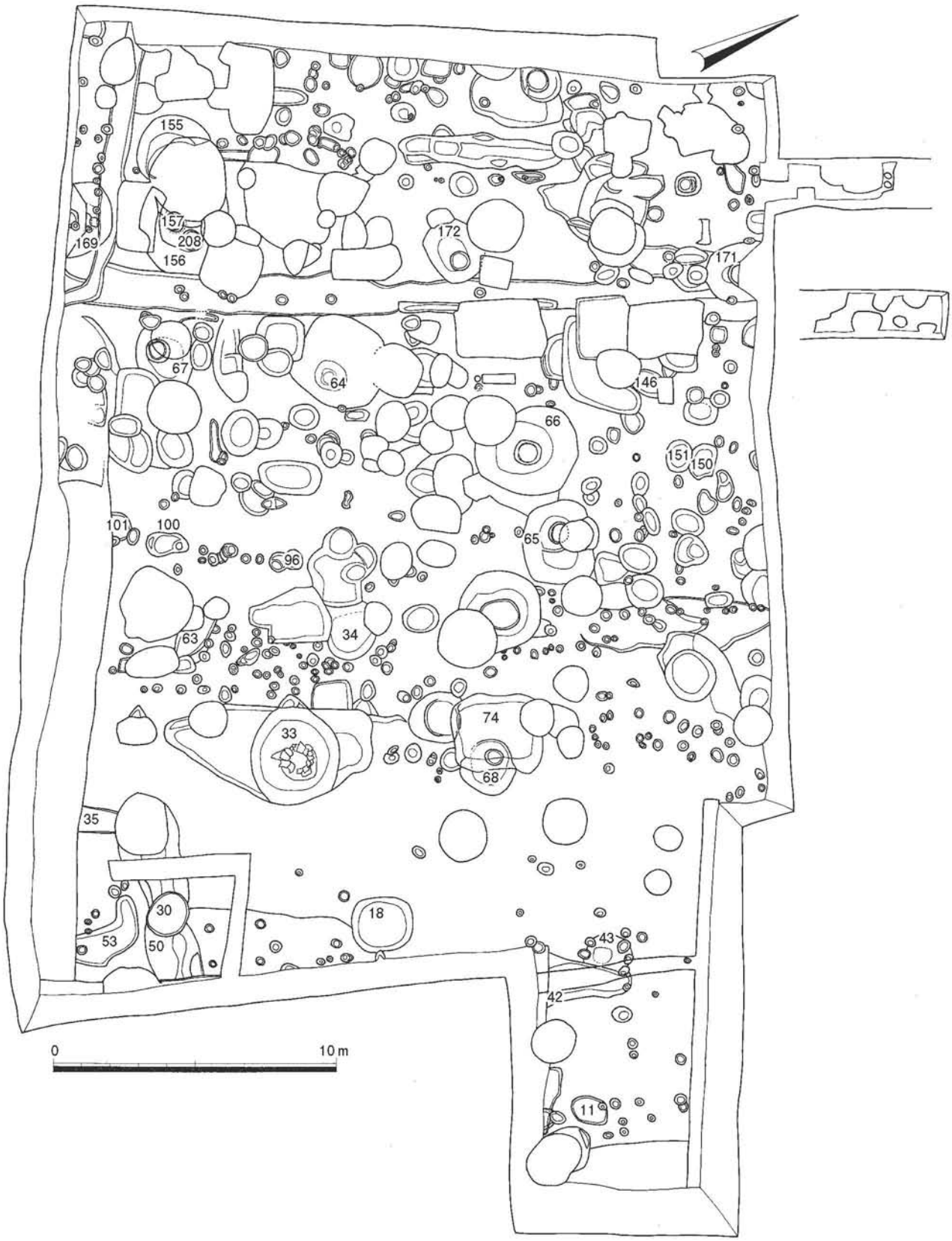
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口譲治　山崎純男（前任）
	調査第2係長	池崎譲二　田中寿夫（前任）
事前審査	事前審査係長	浜石哲也　池崎譲二（前任）
	主任文化財主事	吉留秀敏　米倉秀紀（前任）
	事前審査係	久住猛夫
調査庶務	文化財整備課管理係	御手洗清
調査担当	調査第2係	中村啓太郎
調 査 員	上田龍児	
発掘作業	小川秀雄　徳永栄彦　吹春哲男　宮崎雅秀　竹原吉秋　花田昌代　野田トヨ子	
	井上ヨシ子　田中フキ子　光安晶子　大庭智子　村崎祐子　藤澤義一　園田豊	
	上田龍児　渡辺誠　田端名穂子　中村幸子　花田則子　安藤史郎　阿部純子	
	稲崎龍也　崎村雄介　永松弘恵	
整理作業	林由紀子　下川奈津代　釜崎法子　原陽子　三栗野雅子	

3．調査概要

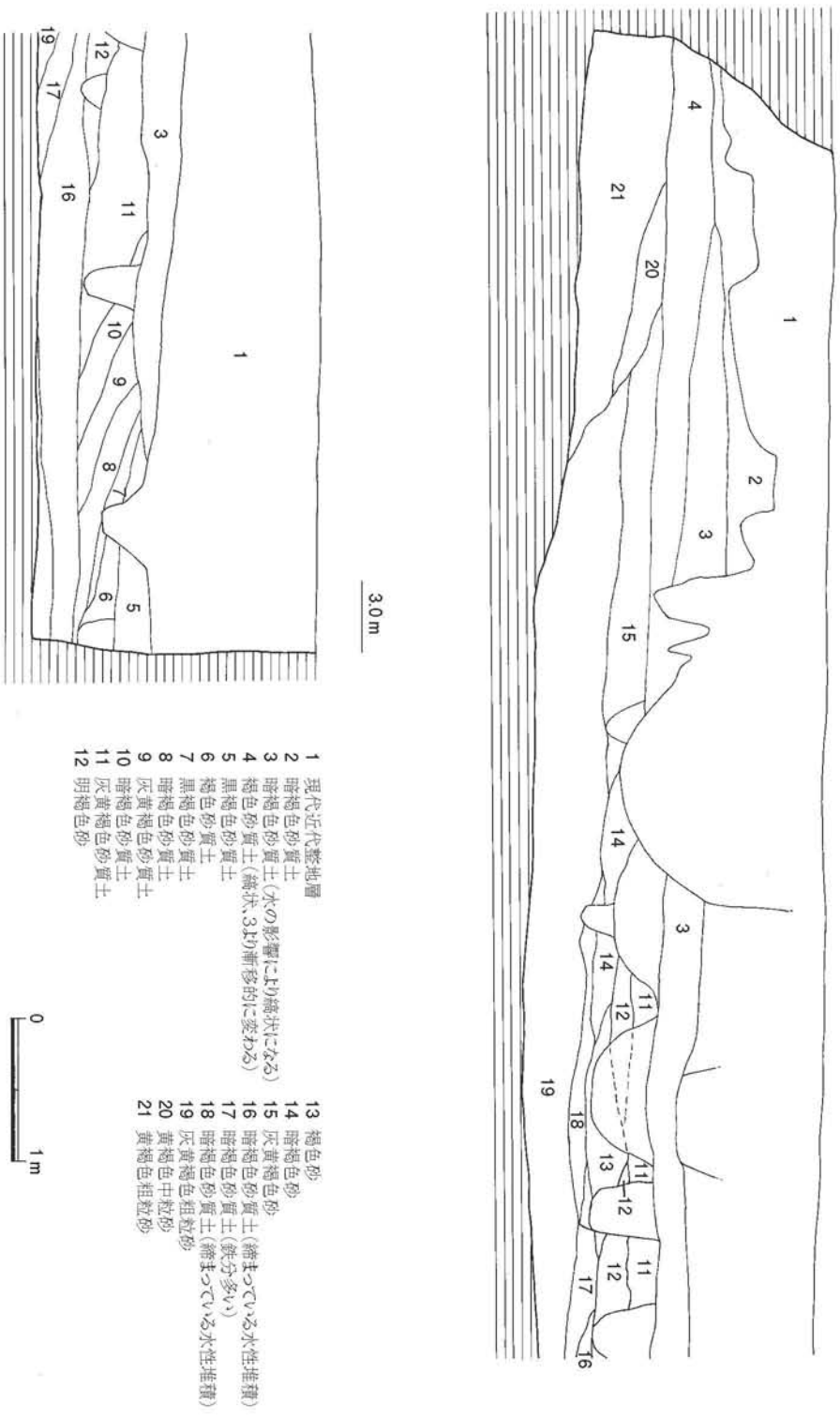
第41次調査区は東区箱崎3丁目2426他地内に所在し、遺跡の北東部に位置する。調査は先行して行われた杭打ち作業後、現物支給の重機による表土掘削から開始した。遺構面である黄褐色砂の上層10㎝～20㎝程から人力による掘削を行った。廃土処理の関係から調査区を東西に2分割し、東側から順に調査を行った。

基本層序は現地表から第1層　現代近代整地層、第2層　暗褐色砂質土、第3層　暗褐色砂質土（縞状）、第4層　灰黄褐色砂、第5層　褐色砂、第6層　黄褐色砂となり、西から東に向かい傾斜する。検出面の標高は西で2.1m、東で1.5mを測る。検出した遺構は井戸、土坑、溝状遺構、土壙墓、木棺墓、柱穴等である。尚、調査区東部は遺構の密度が低くなり遺跡の際に近いものと考えられる。調査面積は1000.8㎡を測る。

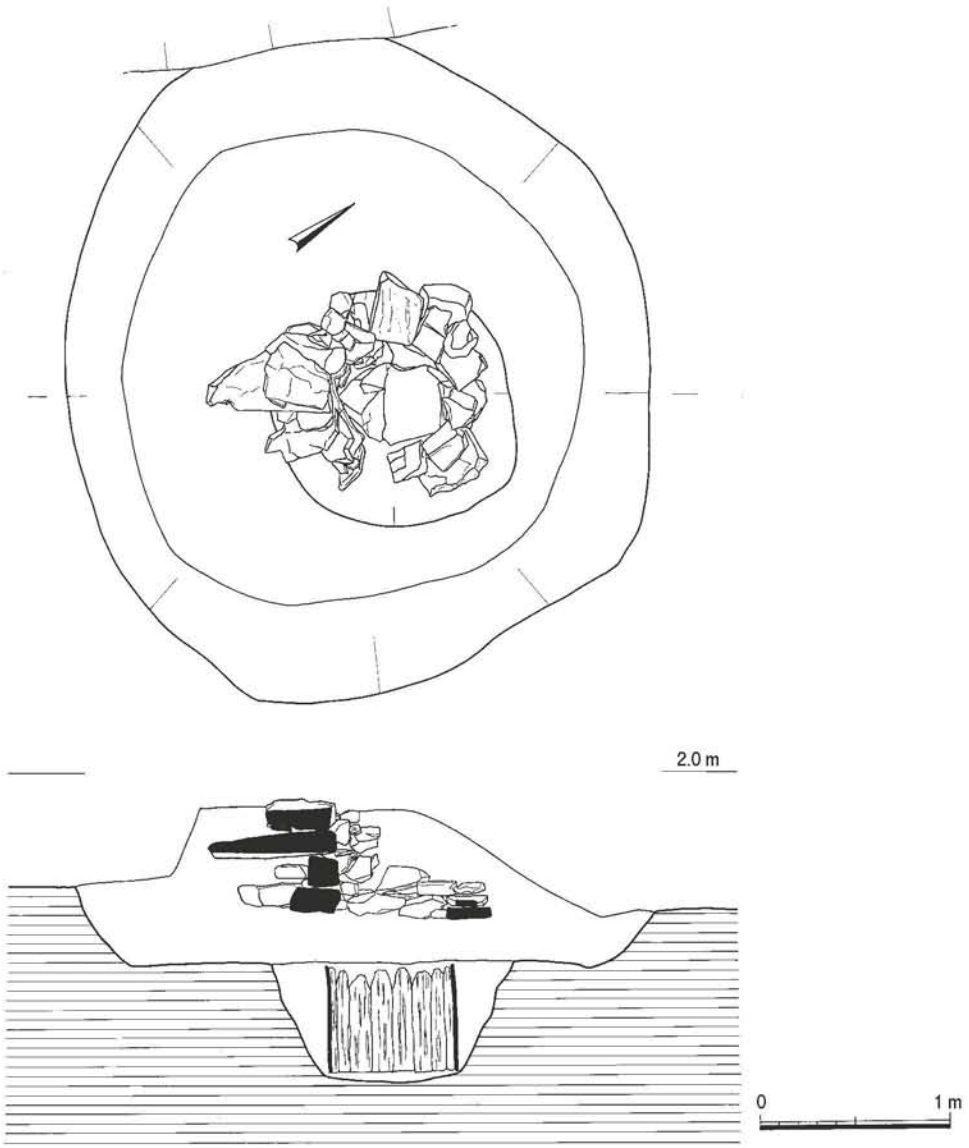
第29図　第41次調査区位置図（1/500）



第 30 図　遺構配置図（1/200）



第 31 図　北壁土層実測図（1/50）



第 32 図　SE-33 実測図（1/40）

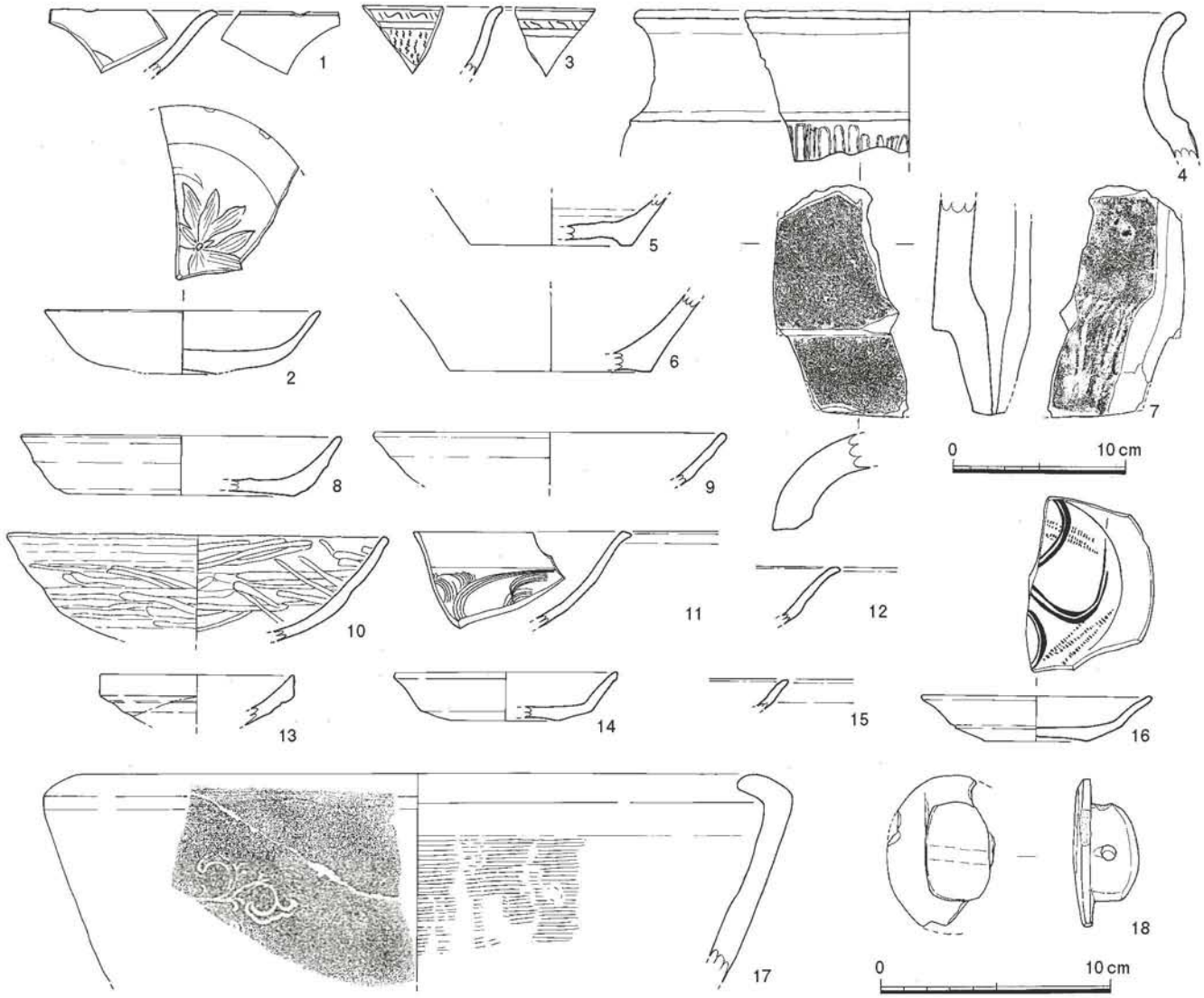
4．調査の記録

1）井戸

SE-33（第 32 図）

調査区東部に位置する。掘り方は円形を呈し、径 300 ㎝～ 350 ㎝、深さ 150 ㎝を測る。中位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に径 120 ㎝、深さ 60 ㎝程掘削する。井筒は石組みで下部には径 70 ㎝の木桶を据える。廃棄時には径 50 ㎝の石が投棄されている。

出土遺物（第 33 図）1 ～ 6 は掘り方出土。1 は白磁碗。2 は白磁Ⅲ類Ⅷ－ 2b 類。3 は高麗青磁。4 は土師器の甕。復元口径 24.2 ㎝を測る。5・6 は陶器。7 は丸瓦。8 ～ 18 は他遺構の混入の可能性があるもの。



第 33 図　SE-33 出土遺物実測図（1/3）

SE-64（第 34 図）

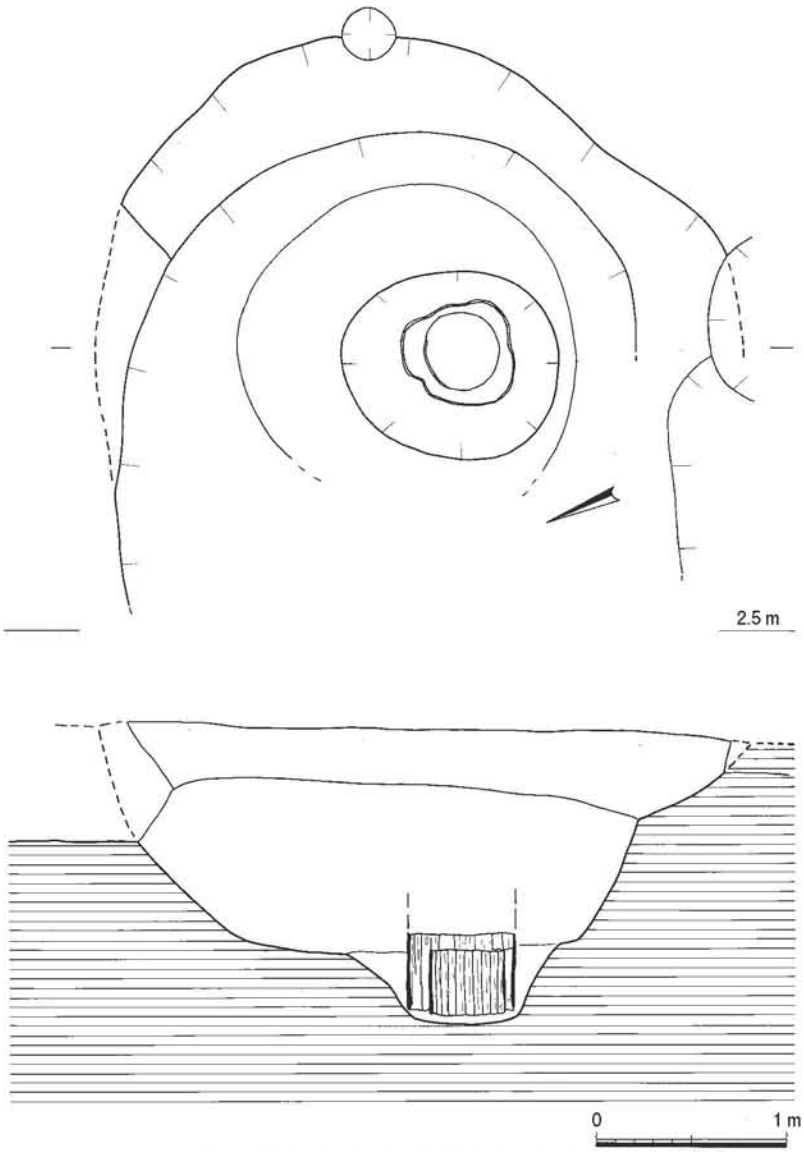
調査区中央やや西に位置する。掘り方は円形を呈し、径 350 ㎝、深さ 160 ㎝を測る。中位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に径 100 ㎝、深さ 40 ㎝程掘削する。井筒下部は木桶で２重確認された。外側が径 60 ㎝、内側が径 40 ㎝を測る。

出土遺物（第 37 図）19･20 は土師器の小皿である。それぞれ復元口径 8.1 ㎝、9.0 ㎝、器高 1.1 ㎝、0.9 ㎝を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。21 は土師器の坏で復元口径 14.2 ㎝を測る。22 は土師器の鍋か。23 は白磁皿。24 は同安窯系青磁碗Ⅰ－1b 類。25 は龍泉窯系青磁皿。

SE-65（第 35 図）

調査区中央に位置する。北側を先行して行われた杭打ちによって切られる。掘り方は不整な円形を呈し、東西方向で 300 ㎝、深さ 160 ㎝を測る。東側にテラスが付き、その下に平坦面をつくる。さらに一段深く円形に径 75 ㎝、深さ 40 ㎝程掘削する。井筒下部は木桶で径 60 ㎝を測る。

出土遺物（第 37 図）26 は土師器の小皿。口径 9.4 ㎝、器高 1.0 ㎝を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。27 は土師器の坏。口径 14.5 ㎝、器高 2.5 ㎝を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。28 は龍泉系青磁碗。29 は龍泉窯系青磁皿。30 は白磁碗。31・32 は陶器。32 は鉢。33 は土師器の



第 34 図　SE-64 実測図（1/40）

小型壺。

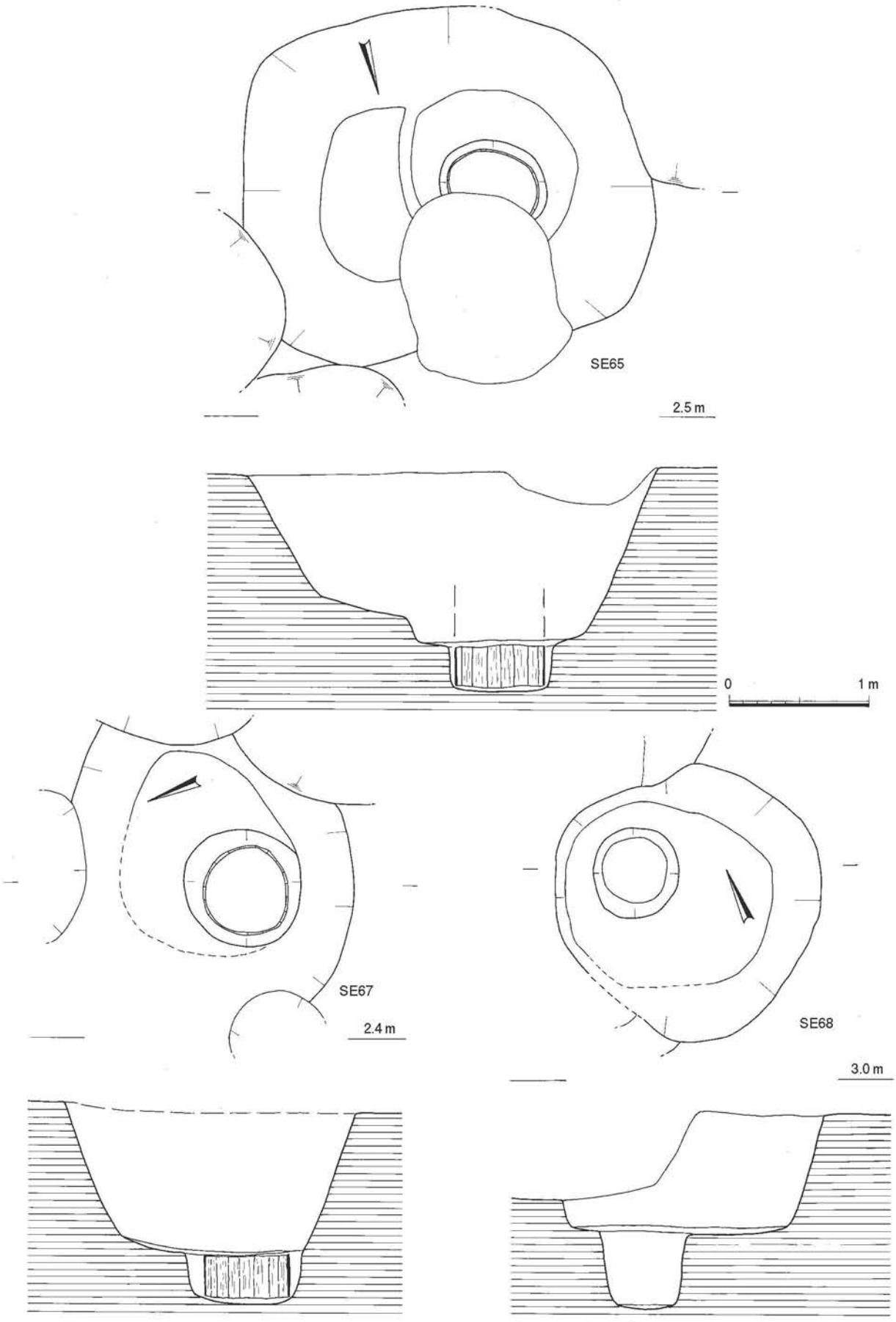
SE-66（第 36 図）

調査区中央、SE-65 の西に位置する。西側を先行して行われた杭打ちによって切られる。掘り方は楕円形を呈し、南北方向で 370 ㎝、東西方向で 310 ㎝、深さ 190 ㎝を測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く中央部に円形に径 90 ㎝、深さ 60 ㎝程掘削する。井筒下部は木桶で径 65 ㎝を測る。出土遺物(第 37 図)34 ～ 36 は白磁碗。35･36 はⅤ類。37 は同安窯系青磁皿。38 は同安窯系青磁碗。39・40 は龍泉窯系青磁碗。41 は蛸壺である。42 は陶器の壺。復元口径 17.2 ㎝を測る。口縁部に目跡が残る。43 は滑石製品。石鍋の再加工か。

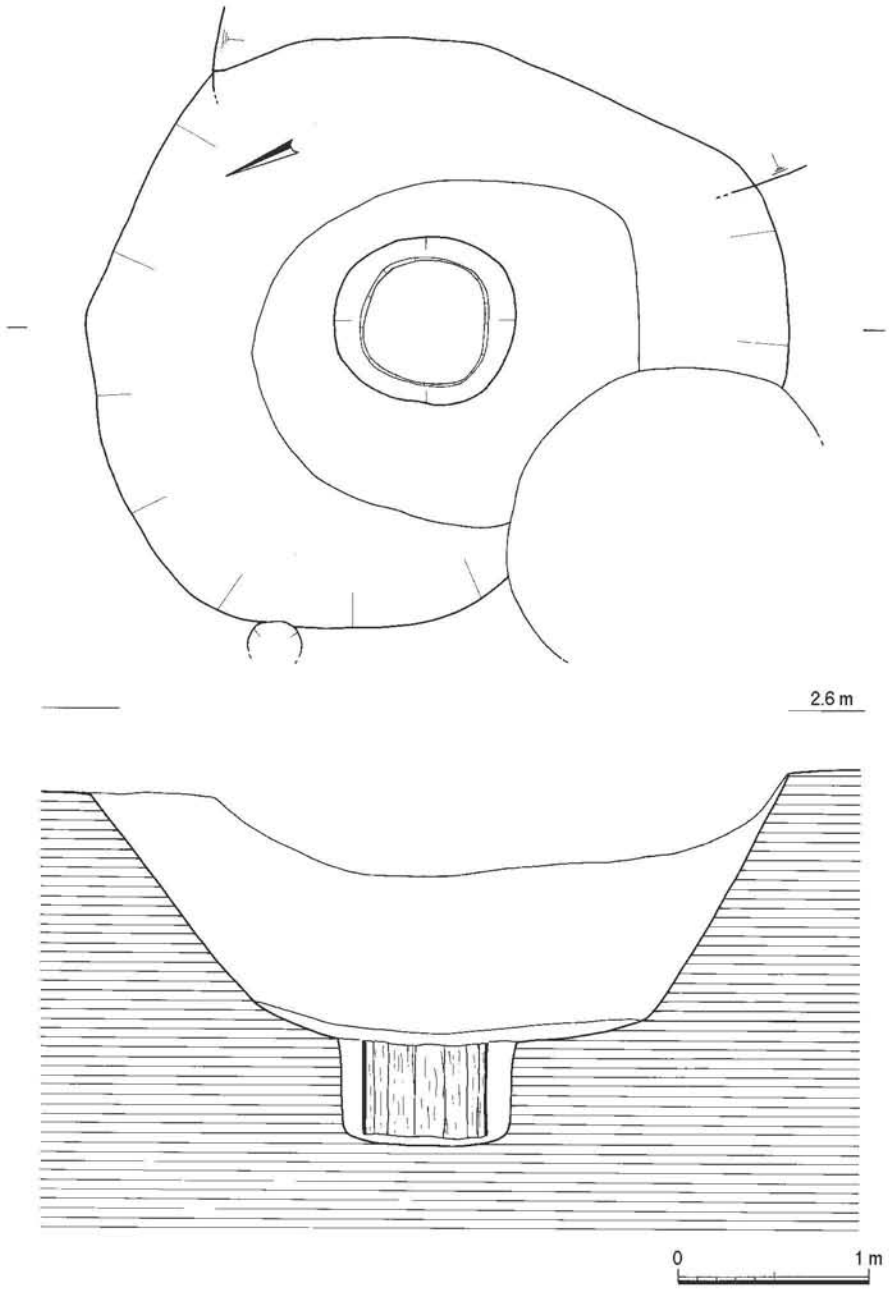
SE-67（第 35 図）

SE-64 の南に位置する。三方を切られる。掘り方は楕円形を呈し、南北方向で 200 ㎝程度、深さ 140 ㎝を測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く西寄りに円形に径 80 ㎝、深さ 35 ㎝程掘削する。井筒下部は木桶で径 60 ㎝を測る。

出土遺物（第 37 図）44 は瓦器椀。内外面共にヘラミガキを施す。45 は白磁碗Ⅴ類。



第 35 図　SE-65・67・68 実測図（1/40）



第 36 図　SE-66 実測図（1/40）

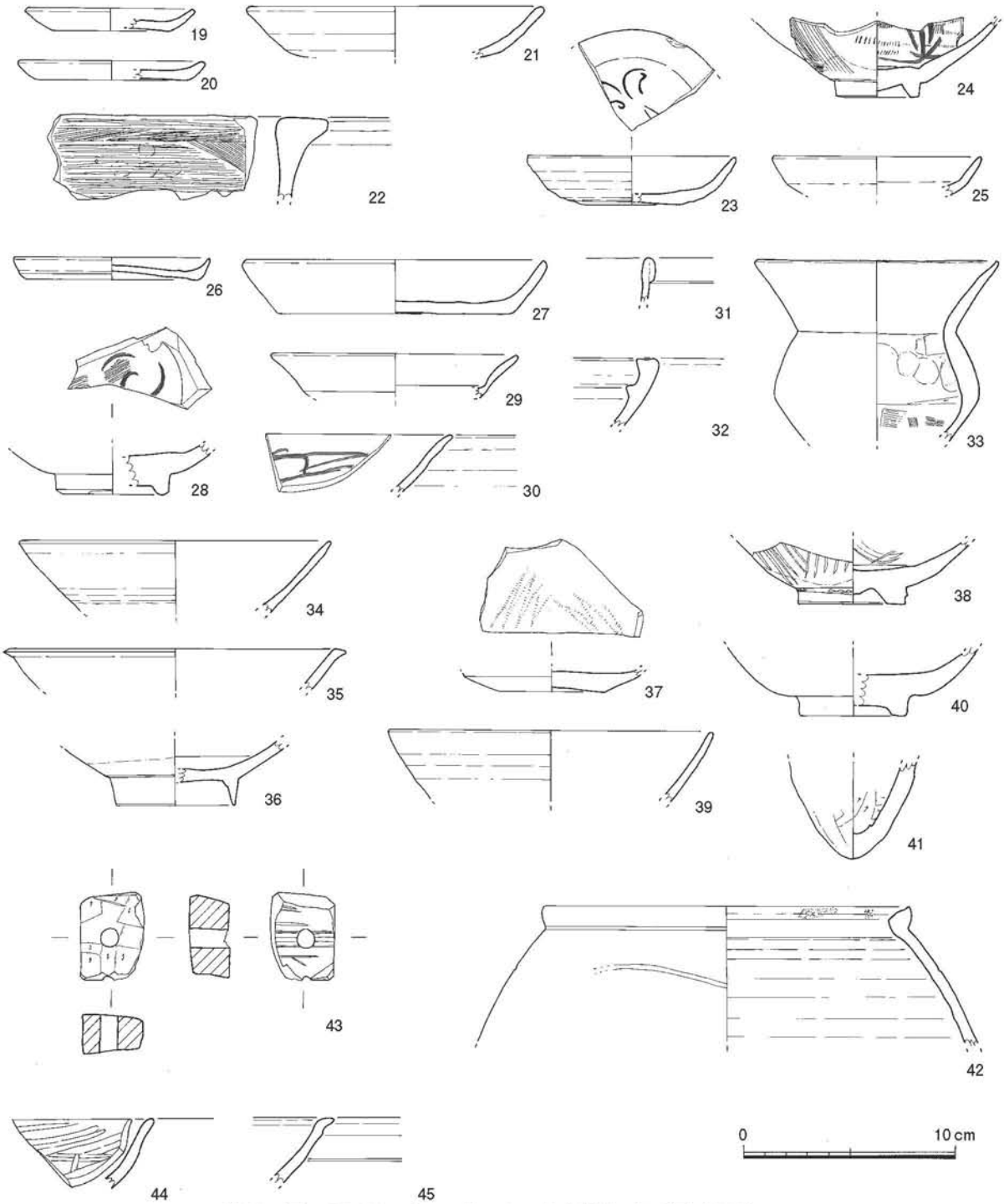
SE-68（第 35 図）

SE-33 の北に位置する。西側を SK-74 に切られる。掘り方は円形を呈し、径 200 ㎝、深さ 140 ㎝を測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く西寄りに円形に径 60 ㎝、深さ 60 ㎝程掘削する。井筒は確認されなかった。遺物は土師器、瓦器、陶器の細片が出土している。

SE-155（第 38 図）

調査区南西に位置する。東側を近世の井戸に切られる。掘り方は円形を呈するとおもわれる。南北方向で長さ 270 ㎝、深さ 170 ㎝を測る。

出土遺物（第 40 図）46･47 は土師器の小皿。それぞれ復元口径 9.1 ㎝、11.2 ㎝、器高 1.0 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。他に瓦器、白磁、瓦の細片が出土している。

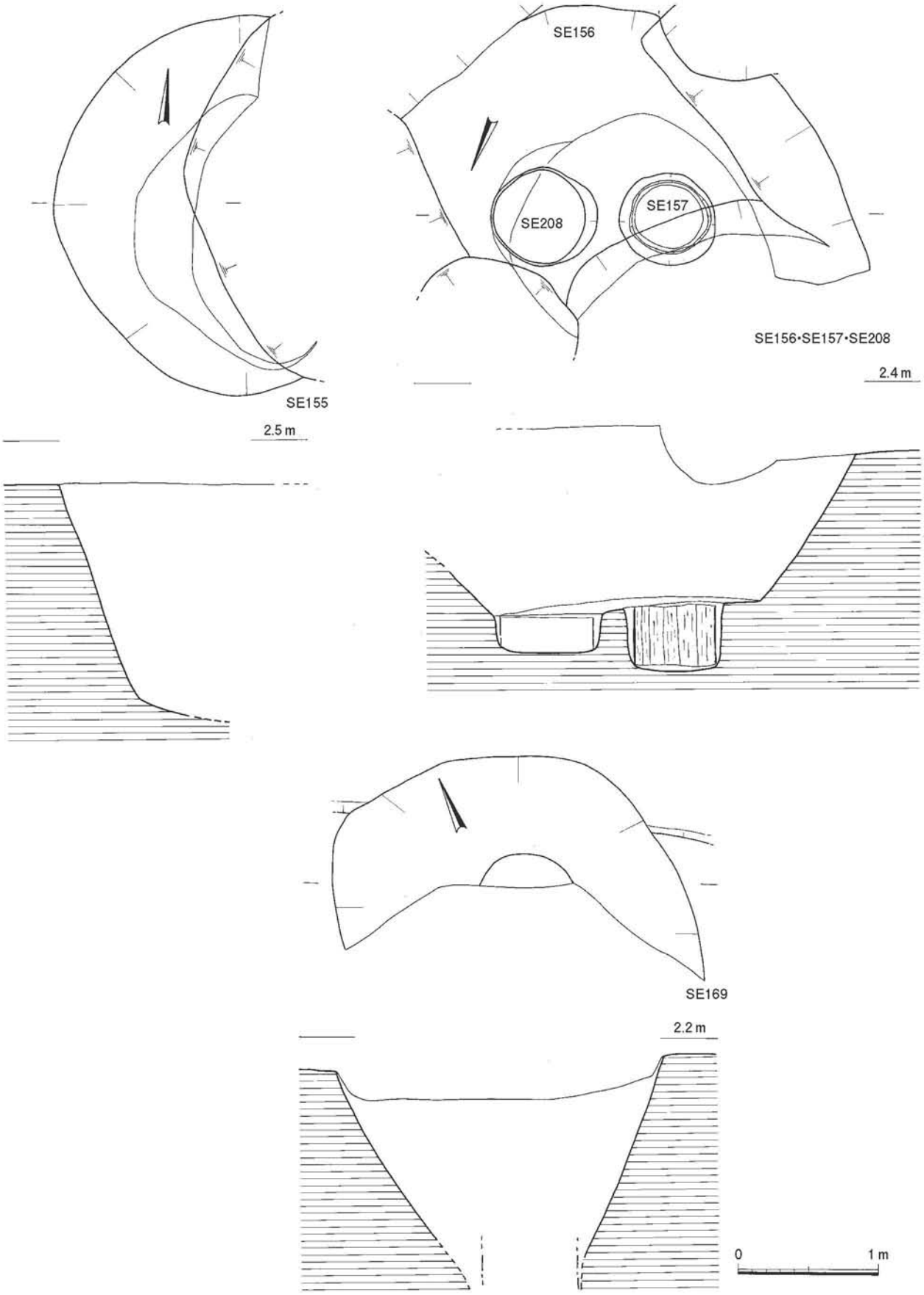


第 37 図　SE-64・65・66・67 出土遺物実測図（1/3）

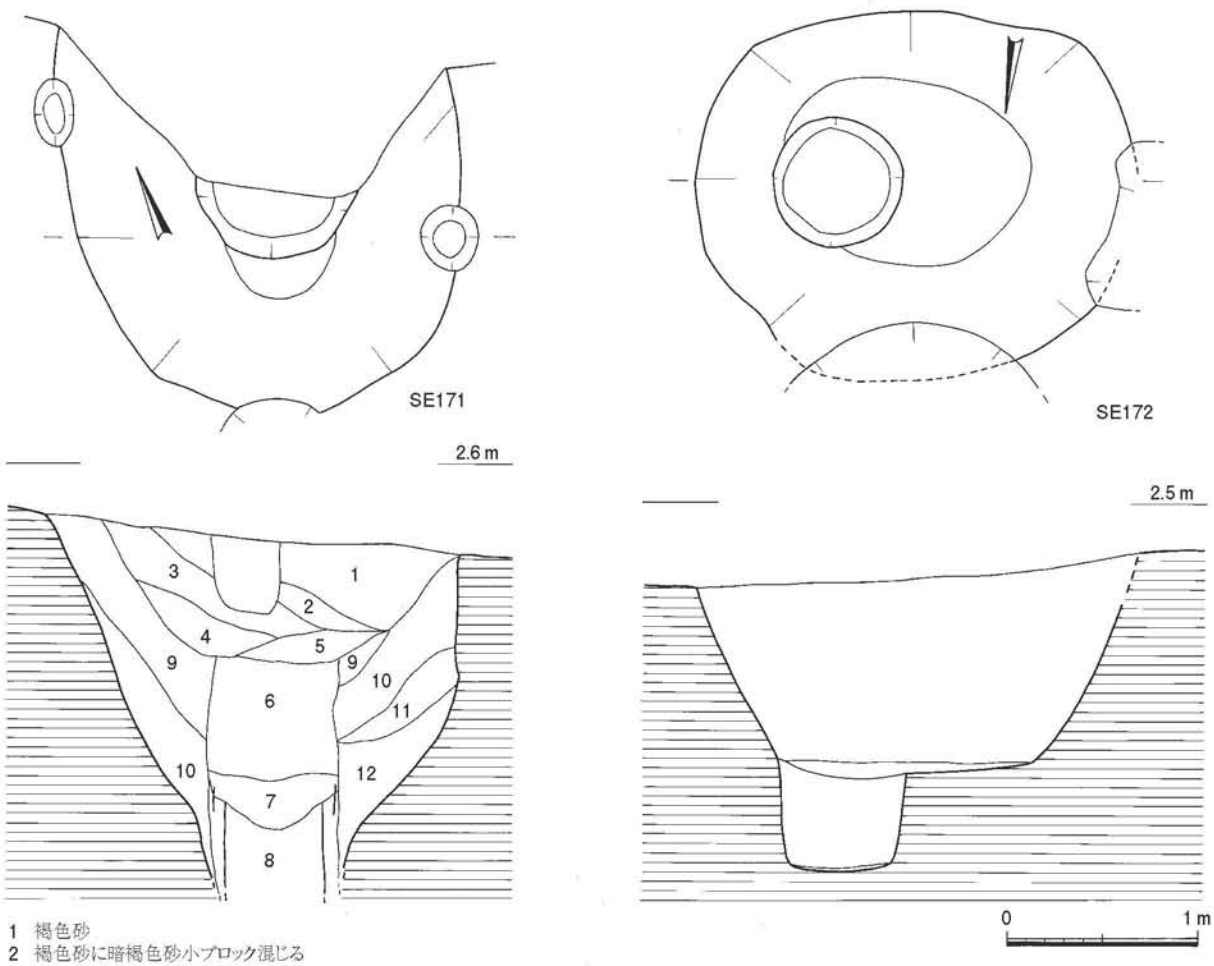
SE-156（第 38 図）

調査区南西に位置する。西側を近世の井戸に切られる。SE-208 を切ると考えられる。掘り方は円形を呈するとおもわれる。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に径 70 ㎝、深さ 50 ㎝程掘削する。井筒下部は木桶で径 60 ㎝を測る。

出土遺物（第 40 図）48 は土師器の小皿。復元口径 8.0 ㎝、器高 0.8 ㎝を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。49 は白磁皿Ⅲ類。50 は越州窯系青磁碗。底部内外に目跡が残る。51 は青磁皿。52 は須恵質の鉢。53 は土錘。



第 38 図　SE-155・156・157・169・208 実測図（1/40）



1 褐色砂
2 褐色砂に暗褐色砂小ブロック混じる
3 暗褐色砂
4 褐色砂
5 暗褐色砂に黒褐色砂小ブロック混じる
6 黒褐色砂
7 黒褐色シルト
8 黄褐色砂
9 暗褐色砂
10 暗黄褐色砂
11 暗褐色砂
12 黄褐色粗粒砂

第 39 図　SE-171・172 実測図（1/40）

SE-157（第 38 図）

調査区南西に位置する。大半を近世の井戸に切られ、SE-156 を切る。掘り方は円形を呈するとおもわれる。

出土遺物（第 40 図）54 は白磁皿。他に底部糸切りの土師器、同安窯系青磁の細片が出土している。

SE-169（第 38 図）

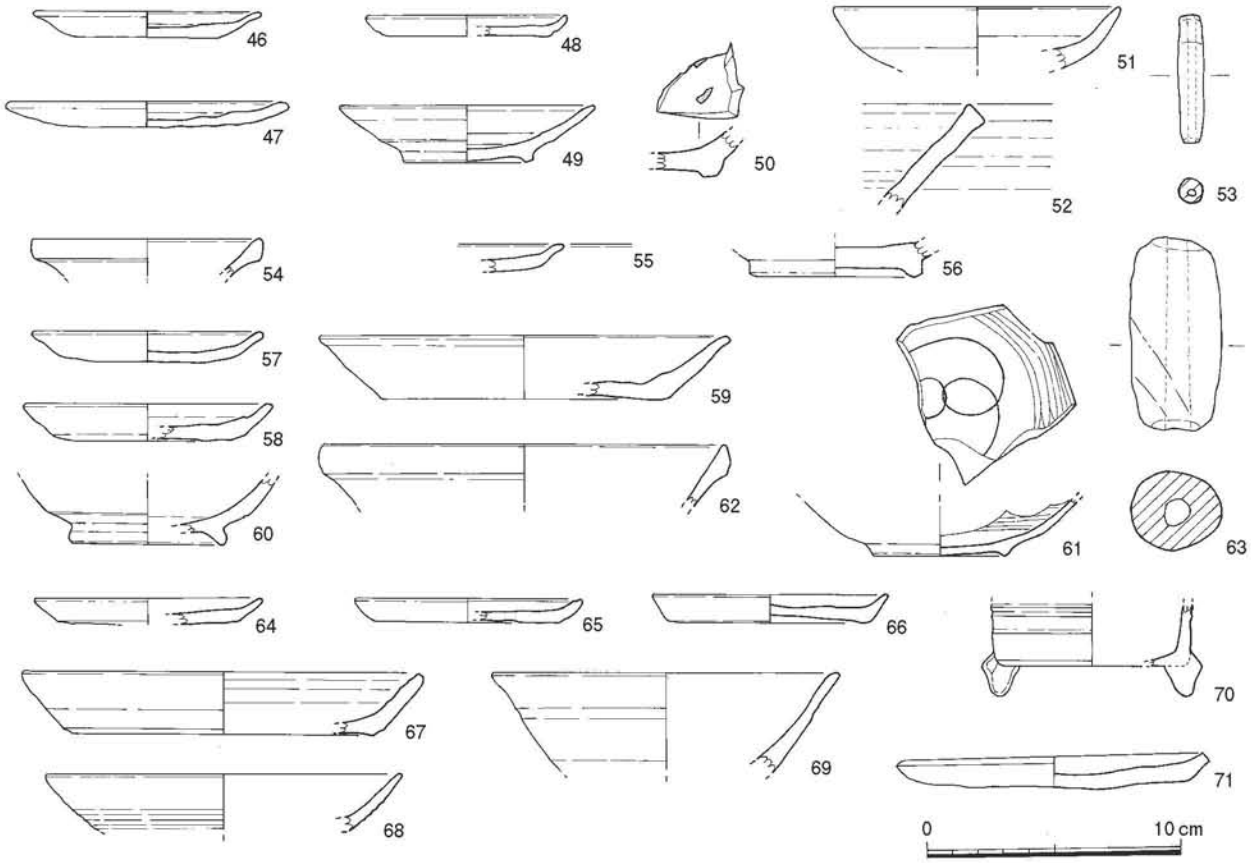
調査区南西に位置する。南側は調査区の壁にかかるため完掘出来なかった。掘り方は円形を呈するとおもわれる。東西方向で長さ 220 ㎝を測る。

出土遺物（第 40 図）55 は底部ヘラ切りの土師器の小皿。56 は白磁碗。

SE-171（第 39 図）

調査区北西に位置する。北側は調査区の壁にかかるため完掘出来なかった。掘り方は円形を呈するとおもわれる。東西方向で長さ 210 ㎝を測る。

出土遺物（第 40 図）57・58 は土師器の小皿。それぞれ復元口径 9.2 ㎝、10.0 ㎝、器高 1.2 ㎝、1.5



第 40 図　SE-155・156・157・169・171・172・208 出土遺物実測図（1/3）

cmを測る。底部は 57 がヘラ切り、58 が糸切りでいずれも板状圧痕を有する。59 は土師器の坏。復元口径 16.4 cm、器高 2.5 cmを測る。底部は糸切り。60 は土師器埦。61 は瓦器椀。見込みに輪状のヘラミガキを施す。62 は白磁の碗。63 は土錘。

SE-172（第 39 図）

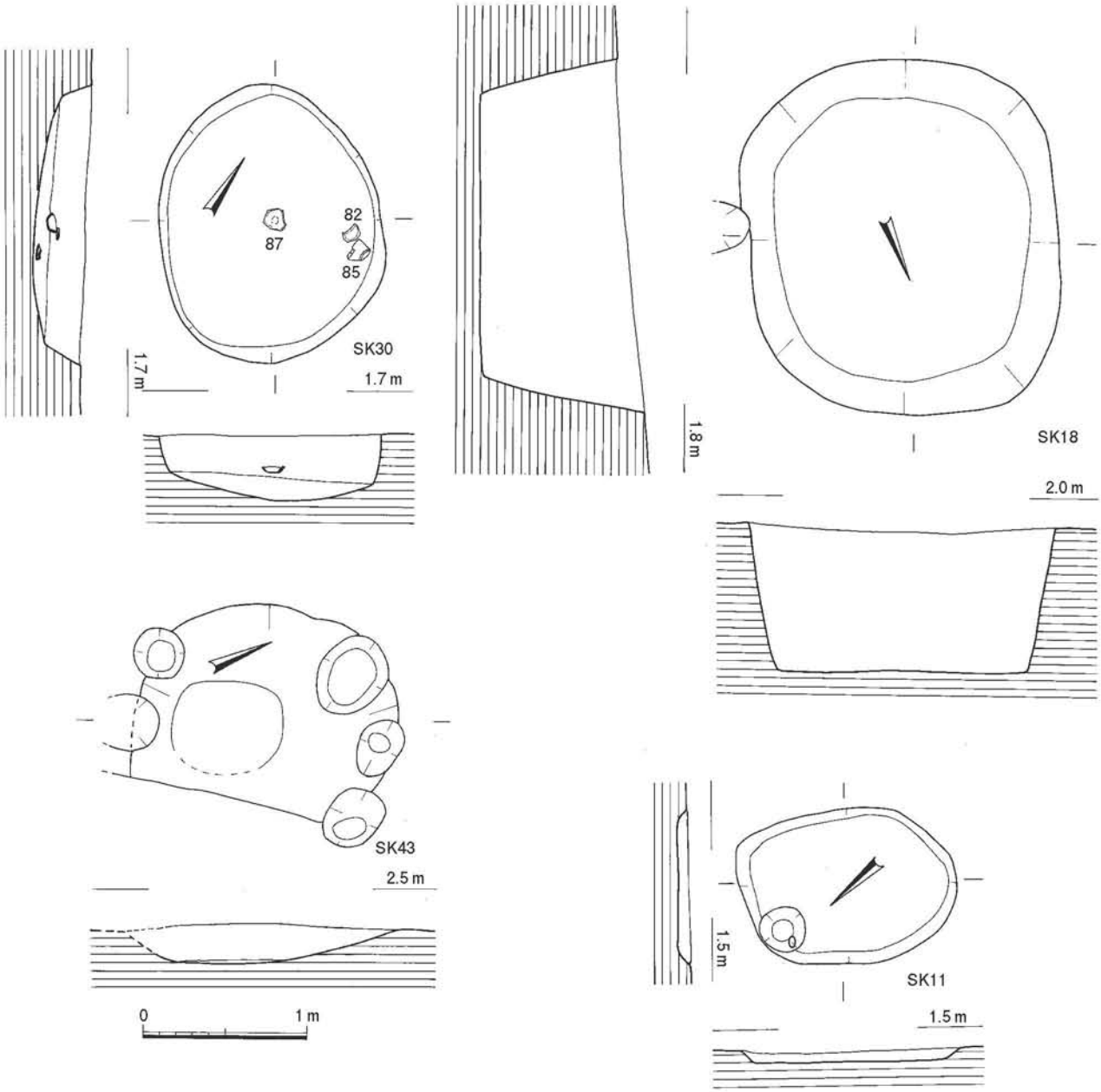
調査区西に位置する。掘り方は楕円形を呈し、東西方向で 230 cm、南北方向で 200 cm程度、深さ 165 cmを測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く東側に円形に径 65 cm、深さ 60 cm程掘削する。井筒は確認されなかった。

出土遺物（第 40 図）64 ～ 66 は土師器の小皿。口径 9.1 cm～ 9.4 cm、器高 1.0 cm～ 1.2 cmを測る。底部は糸切りで 65 は板状圧痕を有する。67・68 は土師器の坏。それぞれ復元口径 15.8 cm、14.2 cm、器高 2.4 cmを測る。67 の底部は糸切り。69 は龍泉窯系青磁碗。70 は土師器の香炉。橙色を呈し、体部はナデを施す。脚は 3 足か。

SE-208（第 38 図）

調査区南西に位置する。西側を近世の井戸に切られる。SE-156 に切られると考えられる。検出段階では SE-156 との区別がついておらず、SE-156 の井筒を検出した段階で SE-208 を確認できた。このため掘り方の遺物はほとんど確認できていない。掘り方は円形を呈するとおもわれる。すり鉢状に掘削し、さらに一段深く円形に径 80 cm、深さ 30 cm程掘削する。井筒の痕跡が確認された。径 65 cmを測る。

出土遺物（第 40 図）71 は土師器の皿。口径 12.3 cm、器高 1.1 cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。



第41図　SK-11・18・30・43実測図（1/40）

2）土坑

SK-11（第41図）

調査区東部端に位置する。不整な楕円形を呈し、長さ130㎝、幅96㎝、深さ7㎝を測る。遺物は底部糸切りの土師器、瓦器、白磁等が出土している。

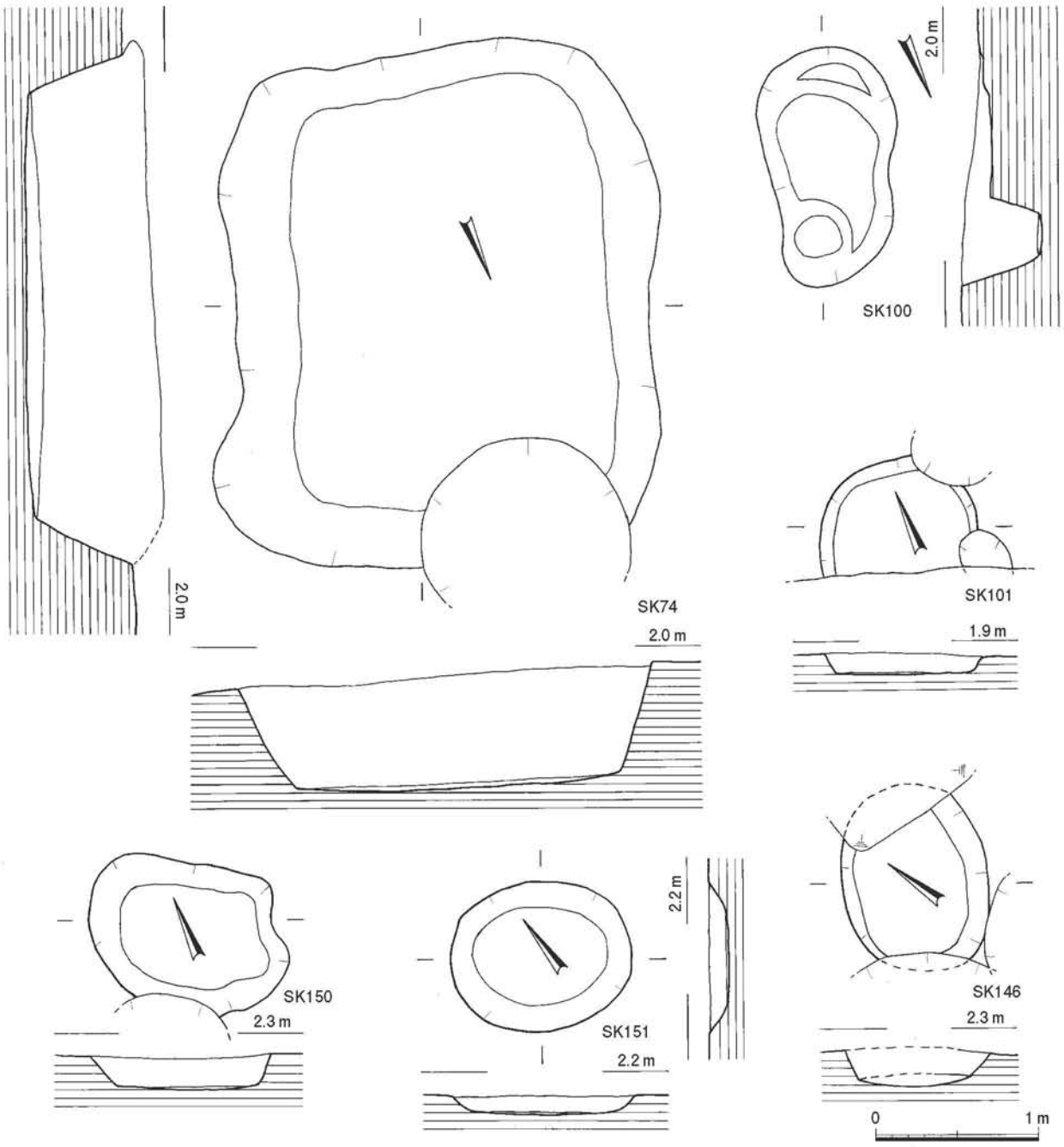
SK-18（第41図）

調査区東部に位置する。楕円形を呈し、長さ220㎝、幅189㎝、深さ55㎝を測る。

出土遺物（第43図）72は瓦器椀。73は白磁碗Ⅴ類。74・75は青磁碗。74は同安窯系Ⅰ類。

SK-30（第41図）

調査区東南端に位置し、SD-50を切る。楕円形を呈し、長さ169㎝、幅135㎝、深さ37㎝を測る。出土遺物(第43図)77～82は土師器の小皿である。口径8.7㎝～10.2㎝、器高0.9㎝～1.8㎝を測る。77・78・80の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切りで板状圧痕を有する。83・84は土



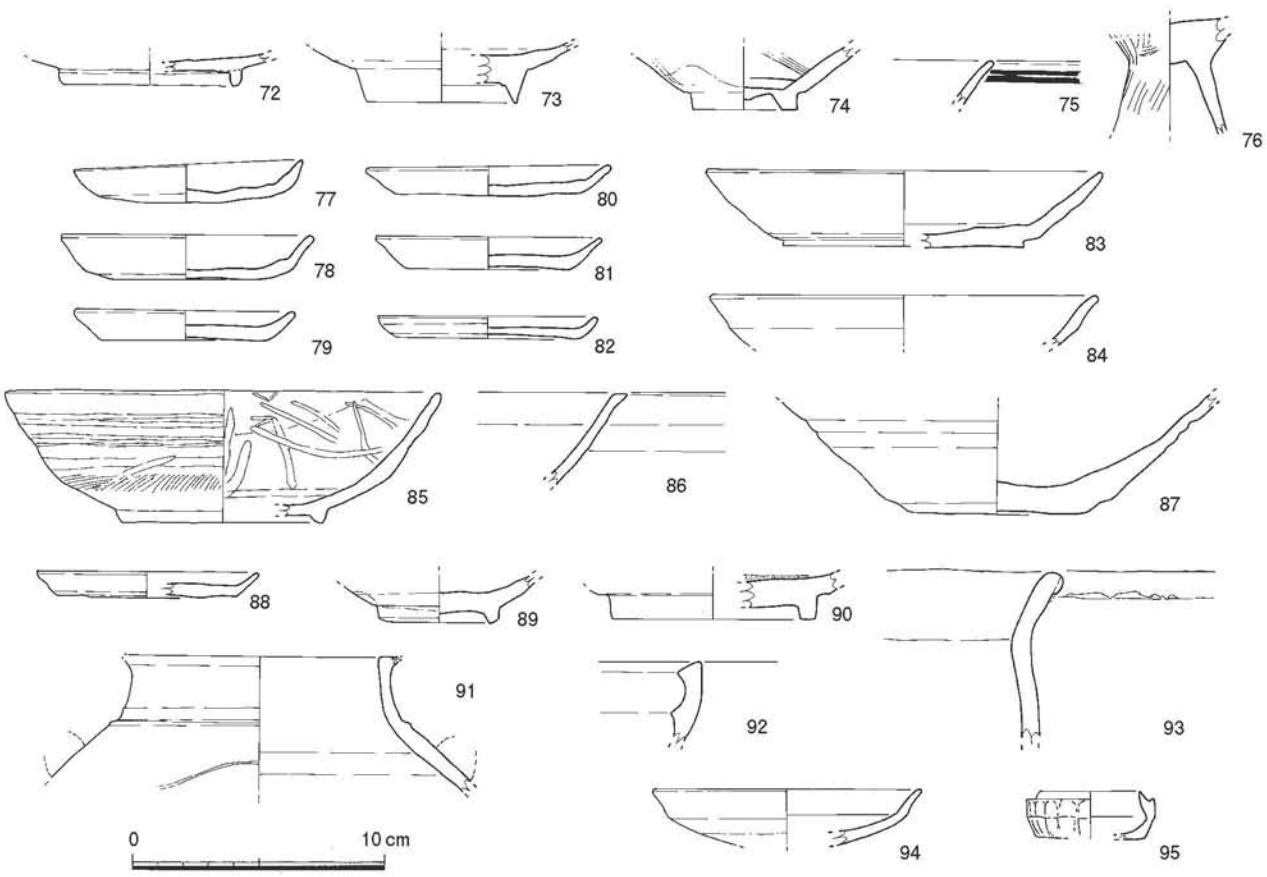
第 42 図　SK- 74・100・101・146・150・151 実測図（1/40）

師器の坏。それぞれ復元口径 15.6 ㎝、15.4 ㎝、器高 3.0 ㎝を測る。84 の底部は糸切り。85 は瓦器椀。復元口径 17.4 ㎝、器高 5.3 ㎝を測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。外面屈曲部にはハケ目が残る。86 は白磁碗Ⅴ類。87 は土師質の鍋。外面に煤が付着する。

SK-43（第 41 図）

調査区東部に位置する。楕円形を呈し、長さ 150 ㎝、幅 120 ㎝以上、深さ 26 ㎝を測る。

出土遺物（第 43 図）88 は土師器の小皿。復元口径 9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。89 は白磁碗Ⅷ類。90 は青磁。見込みに目跡が残る。91 は陶器の耳壺。釉は灰白色を呈する。92 は陶器鉢。93 は土師器甕。



第 43 図　SK-18・30・43 出土遺物実測図（1/3）

SK-74（第 43 図）

調査区東部に位置し、SE-68 を切る。隅丸長方形を呈し、長さ 318 ㎝、幅 260 ㎝、深さ 90 ㎝を測る。出土遺物(第 42 図)94 は龍泉窯系青磁皿。95 は青白磁の合子の身。体部下半から底部は施釉されない。

SK-100（第 42 図）

調査区南部に位置する。楕円形を呈し、長さ 148 ㎝、幅 75 ㎝、深さ 53 ㎝を測る。南側にテラスが付き、北側が 1 段深くなる。遺物は土師器の細片が出土している。

SK-101（第 42 図）

調査区南部に位置し、南側が調査区外に延びる。平面形は円形か。幅 100 ㎝、深さ 13 ㎝を測る。遺物は瓦器の細片が出土している。

SK-146（第 42 図）

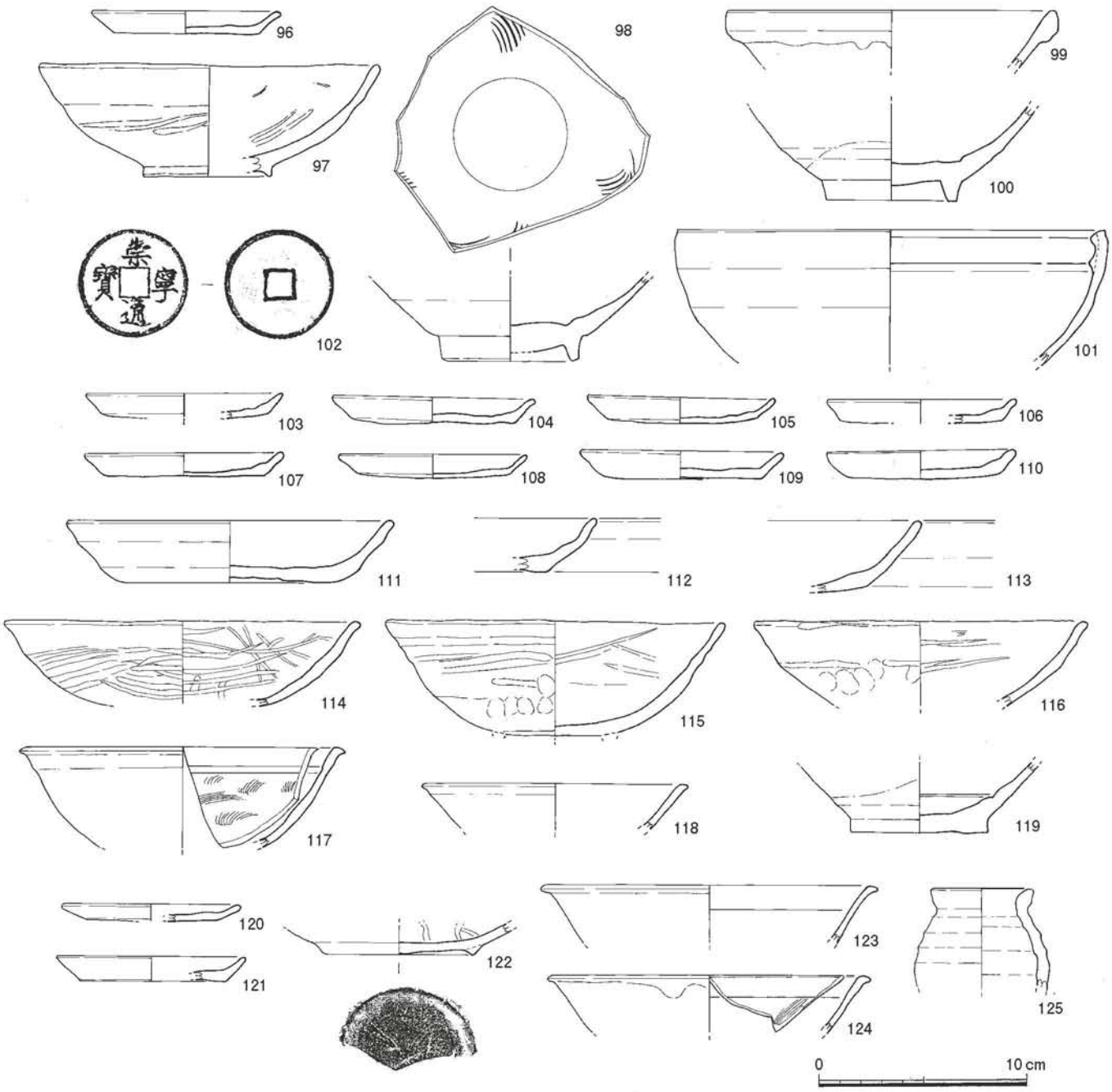
調査区北部に位置する。楕円形を呈し、長さ 100 ㎝以上、幅 90 ㎝、深さ 33 ㎝を測る。遺物は土師器、白磁の細片が出土している。

SK-150（第 42 図）

調査区北部に位置し、SK-151 に切られる。不整な楕円形を呈し、長さ 130 ㎝、幅 87 ㎝、深さ 19 ㎝を測る。遺物は土師器、陶器の細片が出土している。

SK-151（第 42 図）

調査区北部に位置し、SK-150 を切る。楕円形を呈し、長さ 116 ㎝、幅 92 ㎝、深さ 13 ㎝を測る。遺物は土師器、白磁、陶器の細片が出土している。



第 44 図　SD-42・50・53 出土遺物実測図（1/3）

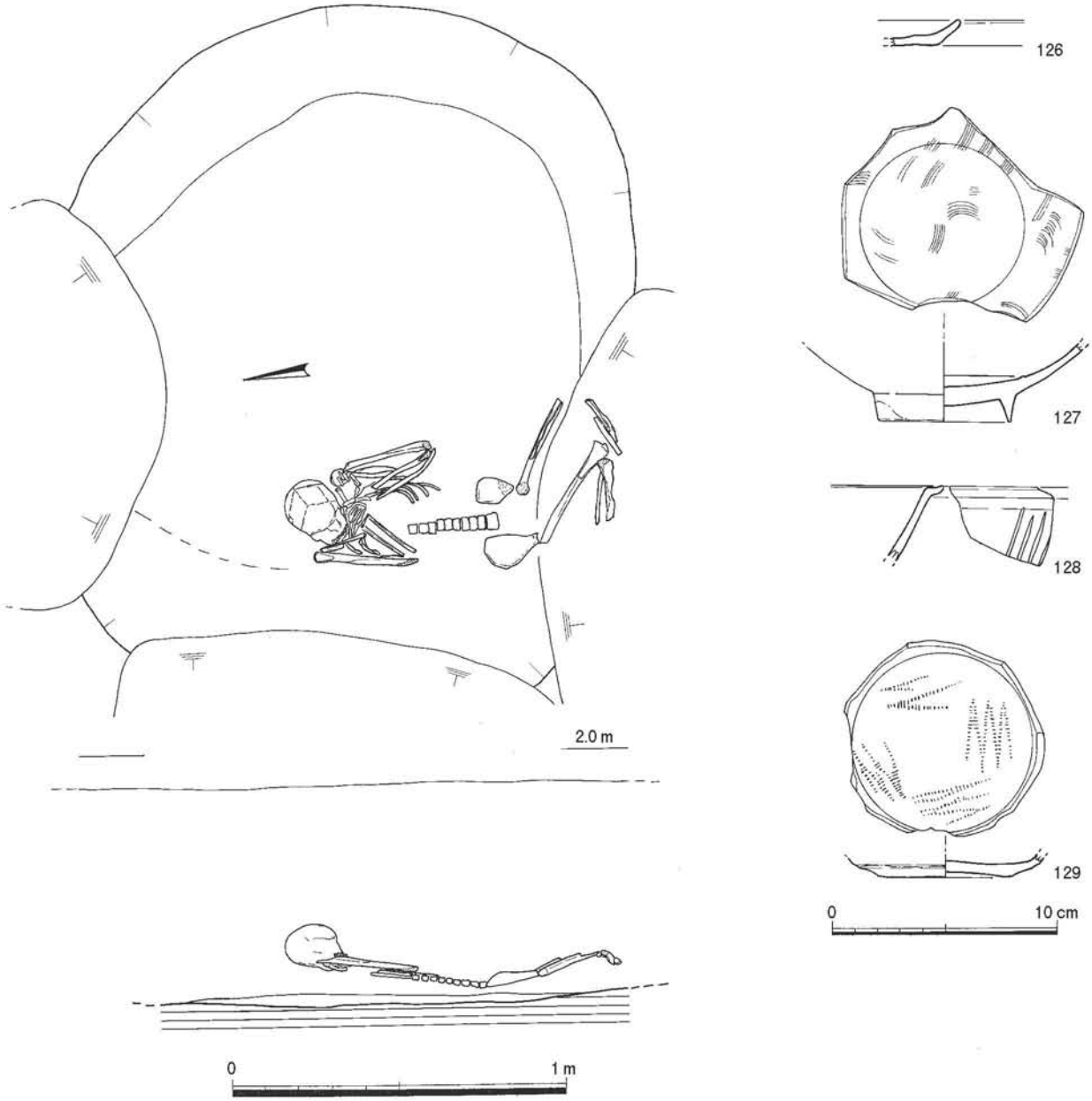
3）溝

大半の溝及び溝状遺構は調査区東部の包含層上層で検出された。

SD-42（第 30 図）

調査区北東に位置し、南北方向に延びる。上部を後世の溝に切られる。幅 190 ㎝前後、深さ 35 ㎝を測る。

出土遺物（第 44 図）96 は土師器の小皿。復元口径 9.3 ㎝、器高 1.1 ㎝を測る。底部は糸切り。97 は瓦器椀。復元口径 16.4 ㎝、器高 5.5 ㎝を測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。下半は未調整。98 ～ 100 は白磁碗。99 がⅣ類、100 がⅧ類。101 は陶器の鉢。復元口径 20.6 ㎝を測る。灰黄褐色



第 45 図　SK-34 実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3）

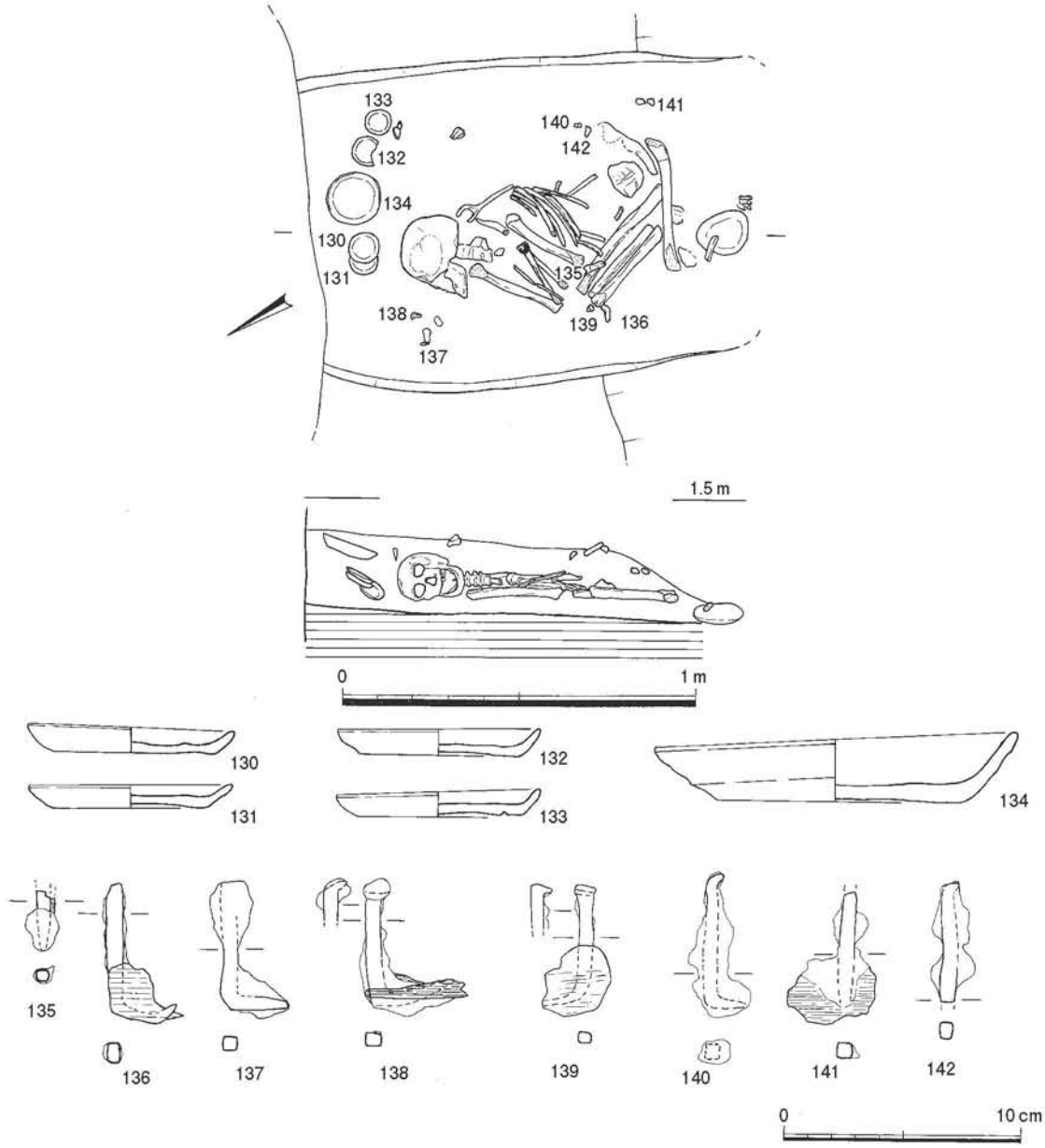
を呈する。102 は銅銭で「崇寧通寶」（初鋳 1102 年）である。

SD-50（第 30 図）

調査区南東に位置し、東西方向に延びる溝状遺構。SK-30 に切られる。幅 210 ㎝、深さ 52 ㎝を測る。出土遺物（第 44 図）103 ～ 110 は土師器の小皿である。口径 9.0 ㎝～ 9.9 ㎝、器高 1.1 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。底部は 103 ～ 105・107 がヘラ切りで板状圧痕を有する。他が糸切りで板状圧痕を有する。111 ～ 113 は土師器の坏。111 は復元口径 15.8 ㎝、器高 3.0 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。113 の底部は糸切り。114 ～ 116 は瓦器椀。復元口径 16.0 ㎝～ 17.2 ㎝を測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。117 ～ 119 は白磁碗。117 がⅤ類、119 がⅣ類。

SD-53（第 30 図）

調査区南東、SD-50 の南に位置する溝状遺構。幅 140 ㎝前後、深さ 28 ㎝を測る。



第 46 図　SK-35 実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3）

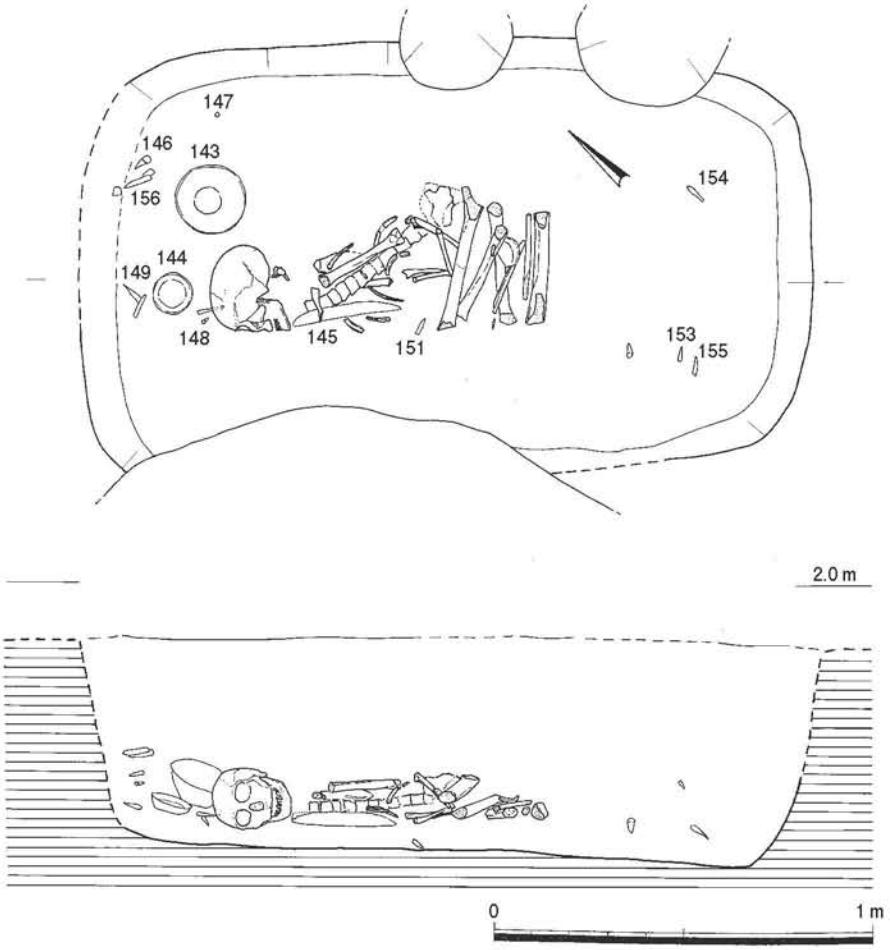
出土遺物（第 44 図）120・121 は土師器の小皿である。それぞれ復元口径 8.6 ㎝、9.2 ㎝、器高 0.8 ㎝、1.2 ㎝を測る。底部は 120 がヘラ切りで板状圧痕を有する。121 が糸切り。122 は瓦器椀。底部にヘラ記号を有する。123・124 は白磁碗Ⅴ類。125 は青磁壺。

4）土壙墓・木棺墓

土壙墓 1 基、木棺墓 2 基を検出した。いずれも東南部に位置し、人骨は全身が確認できる状態で遺存していた。また、東部包含層から人骨片が出土しており、他にも幾つかの墓が存在していたものと考えられる。

SK-34（第 45 図）

調査区南東に位置する土壙墓である。三方及び上部を攪乱坑に切られる。このため検出時には遺構であることが分からず、人骨を検出した時点で遺構であることを確認した。図示している墓壙掘り方



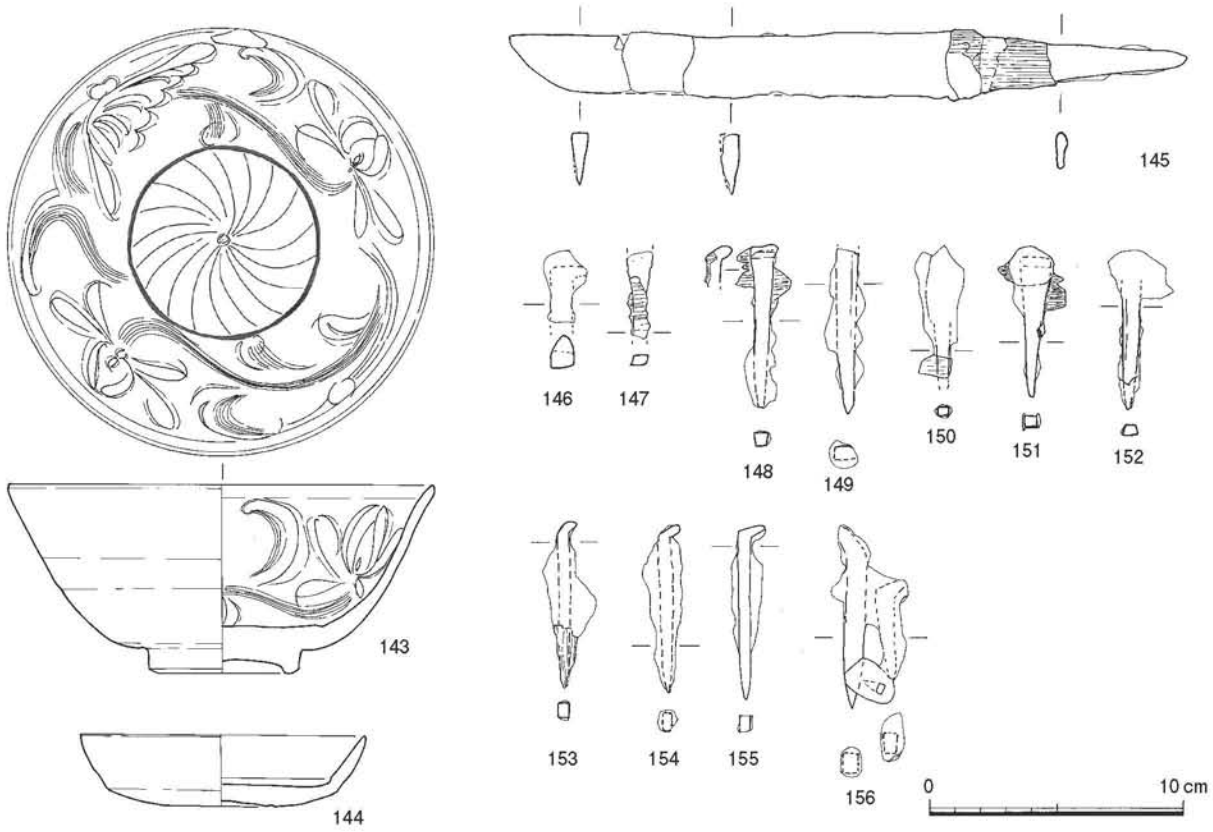
第47図　SK-63実測図（1/20）

東側については別の遺構の可能性がある。墓壙は本来、隅丸長方形を呈するものとおもわれる。現状で深さ68㎝を測る。埋葬された人骨は熟年の女性と推定され、ほぼ全身が遺存する。顔面が土圧により陥没している。頭位方向を北にとり、N－9°－Eを測る。顔は東を向き手を重ね、仰臥屈葬される。出土遺物（第45図）すべて埋土中からの出土で副葬品と認定できるものはない。126は土師器の小皿。底部は糸切りで板状圧痕を有する。127は白磁碗Ⅴ類である。128は同安窯系青磁碗Ⅲ類。129は同安窯系青磁皿。

SK-35（第46図）

調査区南東に位置する木棺墓である。北側を先行して行われた杭打ちによって、南側を溝によって切られる。墓壙は長方形を呈するものとおもわれる。幅94㎝、現状で深さ22㎝を測る。木棺は釘の位置より幅50㎝程度と考えられる。また足下には15㎝程度の扁平な石が配置されていた。木棺の置台であろうか。埋葬された人骨は熟年の男性と推定され、ほぼ全身が遺存する。左側頭部は土圧により陥没している。頭位方向を北にとり、N－30°－Eを測る。西を向き側臥屈葬される。頭部上に土師器の坏、小皿が副葬されていた。

出土遺物（第46図）130～133は土師器の小皿。口径8.6㎝～8.8㎝、器高1.0㎝～1.2㎝を測る。底部はすべて糸切りで板状圧痕を有する。134は土師器の坏。口径15.4㎝、器高3.1㎝を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。135～142は木棺の釘である。断面は方形を呈し、頭部を折り曲げる。長さ7㎝前後を測る。大半に棺の木質が残り、屈曲する。



第 48 図　SK-63 出土遺物実測図（1/3）

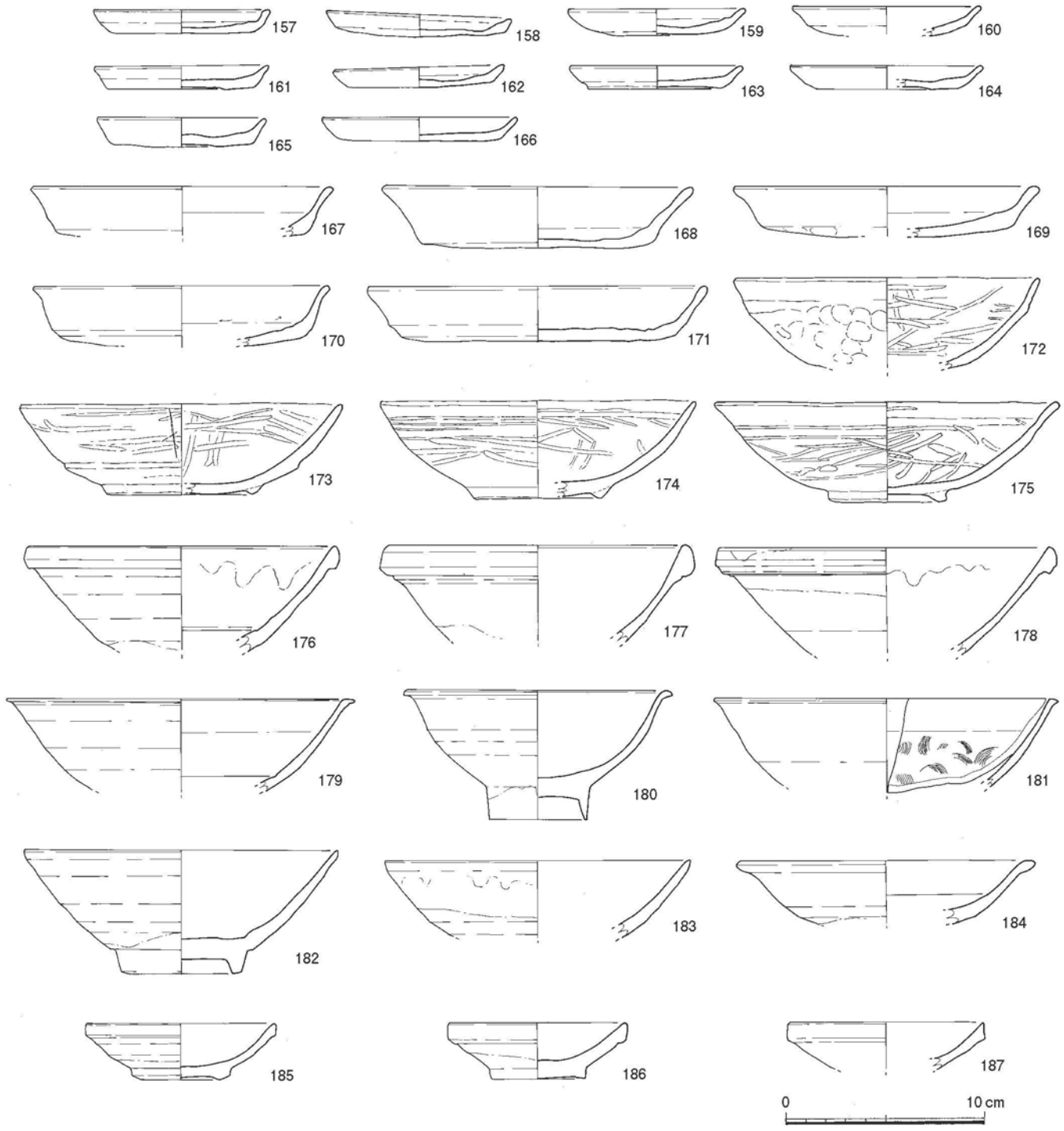
SK-63（第 47 図）

調査区南東、SK-34 の南に位置する木棺墓である。南西側を先行して行われた杭打ちによって、両小口部も攪乱坑によって切られる。墓壙は長方形を呈し、長さ 195 ㎝前後、幅 115 ㎝前後、深さ 55 ㎝を測る。木棺は釘の位置より長さ 150 ㎝、幅 50 ㎝程度と考えられる。埋葬された人骨は熟年の男性と推定され、ほぼ全身が遺存する。頭位方向を北西にとり、N－43°－W を測る。北西を向き側臥屈葬される。頭部上に青磁の碗、皿、胸部に短刀が副葬されていた。12 世紀中頃から後半のものと考えられる。

出土遺物（第 48 図）143 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2 類で 、口径 17.0 ㎝、器高 7.4 ㎝を測る。内面に草花文を有し、釉は灰オリーブ色を呈する。144 は皿。口径 11.7 ㎝、器高 2.8 ㎝を測る。釉はオリーブ黄色を呈する。145 は短刀。全長 26.7 ㎝、身幅 2.4 ㎝を測る。柄部、刀身部に一部木質が残る。146 ～ 156 は木棺の釘である。断面は方形を呈し、頭部を折り曲げる。長さ 6 ～ 7 ㎝を測る。一部に棺の木質が残る。

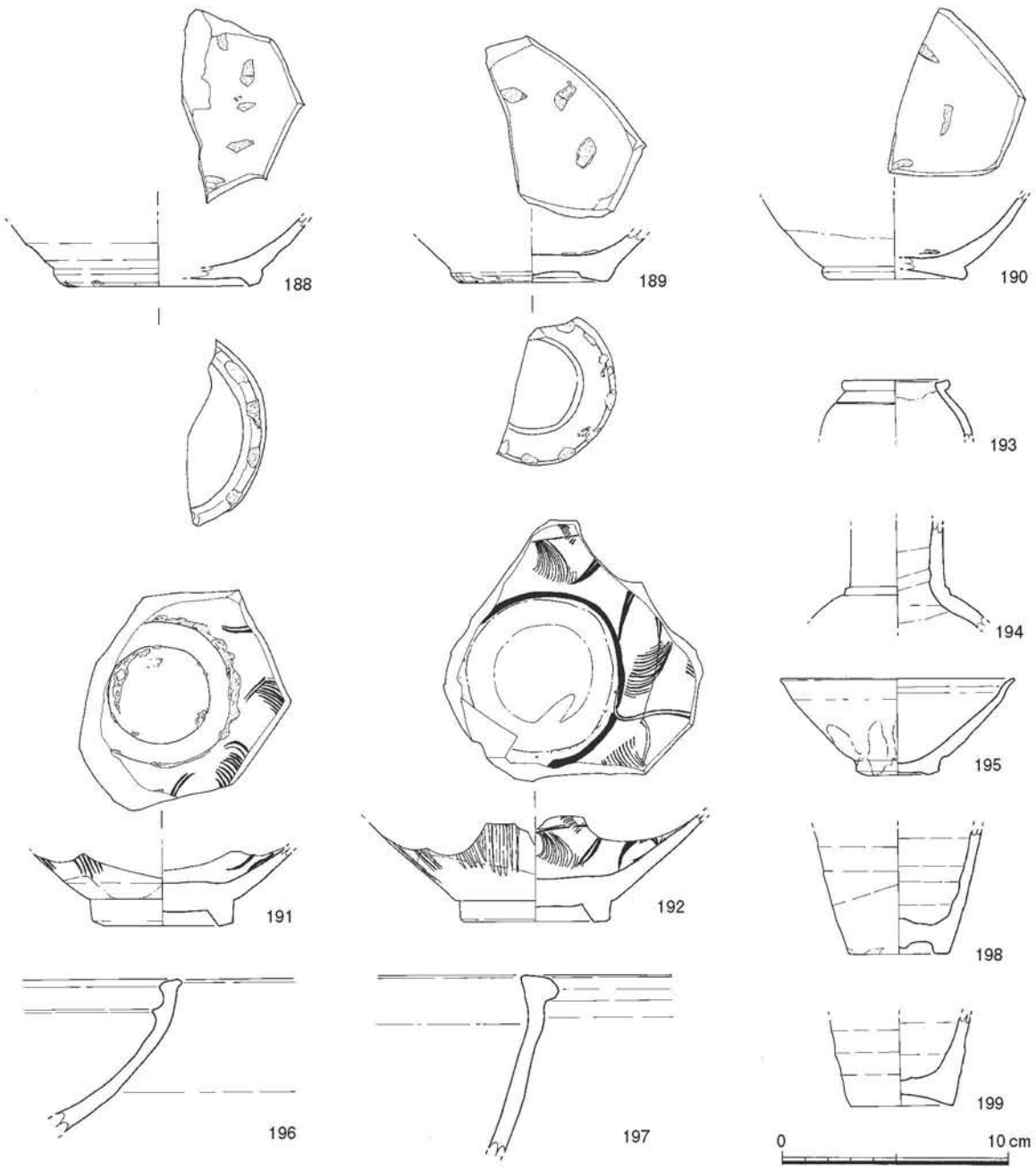
5）その他の出土遺物

東部包含層出土遺物（第 49・50 図）北東部の砂丘際を覆う包含層の出土遺物である。掲載した土器類の他に獣骨の出土が目立つ。これについては付論として屋山氏の調査報告を掲載している。157 ～ 166 は土師器の小皿。口径 8.6 ㎝～ 9.8 ㎝、器高 1.2 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。底部は 157 ～ 160 がヘラ切りで板状圧痕を有する。他が糸切りで 161・165 以外は板状圧痕を有する。167 ～ 171 は土師器の坏。口径 15.2 ㎝～ 17.2 ㎝、器高 2.8 ㎝～ 3.3 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有す



第 49 図　東側包含層出土遺物実測図（1/3）

る。172 は黒色土器Ｂ類の碗。復元口径 15.4 ㎝を測る。調整は外面に指頭圧痕が残り、内面はヘラミガキを施す。173 ～ 175 は瓦器椀。復元口径 16.0 ㎝～ 17.2 ㎝、器高 4.6 ㎝～ 5.1 ㎝を測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。176 ～ 184 は白磁碗。185 ～ 187 は白磁Ⅲ Ⅱ－ 1b 類。188 ～



第 50 図　東側包含層出土遺物実測図（1/3）

190 は越州窯系青磁碗。188・189 は全面に施釉し、灰オリーブ色を呈する。底部内外に目跡が残る。190 は釉はオリーブ黄色を呈し、体部下半から高台部は施釉されない。見込みに目跡が残る。191・192 は同安窯系青磁碗Ⅲ－２類。外面に粗い櫛目文、内面に花文を有し、見込みの釉を輪状に掻き取る。目跡が残る。193 は青磁壺。194 は青磁の水注。釉はオリーブ黄色を呈する。195 は天目碗。厚く施釉され褐色を呈する。196・197 は陶器鉢。196 は内面に施釉され、オリーブ黄色を呈する。197 は外面に薄く施釉され灰褐色を呈する。198・199 は陶器壺。

5．小結

本調査区は遺跡の北東限に近く、砂丘の東部際に位置する。このため全体的に遺構は少なく、特に東側の密度は低い。

検出した遺構は井戸、土坑、溝、埋葬遺構（土壙墓、木棺墓）等である。また東部の砂丘際を確認した。この砂丘際の東斜面を覆う包含層から土器類に加え、牛、馬、イノシシ等の獣骨が出土した。これらの中には解体痕を有すものがあり、本地点が斜面を利用した廃棄場所であったと考えられる。この斜面が最終的に埋没するのが概ね12世紀中頃から後半頃で、これとほぼ同時期に木棺墓等の埋葬遺構、井戸、土坑等の生活遺構が出現する。この時期は箱崎遺跡が本格的に範囲を拡大していく時期にあたり、本調査区はその最先端部であろう。埋葬遺構は3基確認した。いずれも東部の近接した地点に位置する。頭位方向、埋葬姿勢に統一性は見られず、これまでの調査事例や博多遺跡群と同様の傾向を示す。また東部包含層より獣骨に混じり、少量の人骨が確認された。本調査区の北部に位置する第10次調査においても東斜面において3体以上の人骨片を確認している。埋葬施設から流入したものか、あるいは土坑や木棺等の施設を持たず、斜面に埋葬されたものであろうか。遺構の数は少ないが墓域を形成していた可能性が考えられる。

13世紀以降、遺構は極端に減少し、中世後期と考えられるSE-33が存在する他はほとんど見られない。また西側で見られる元寇に起因すると推測されている焼土層・炭化物を多量に含む整地層は確認されず、13世紀後半には集落としての機能は失われていたと考えられる。これ以降、再び遺構が増加するのは近世後半からである。こうした状況は第10次調査と同様である。13～14世紀にかけては前代と同様、ほぼ遺跡の全域に遺構が分布するが、主体は西側に移ることが推定されている。（注1）本地点はその先駆け的傾向を示すものであろうか。

尚、遺物としては古墳時代前期の土師器が出土したが、当該期の遺構は確認されなかった。

注1　榎本義嗣　「福岡市所在の箱崎遺跡について」中世都市研究会2003九州大会資料集

付論 1

箱崎遺跡第 41 次調査出土の中世人骨

岡崎健治・中橋孝博
九州大学大学院比較社会文化学府

はじめに

博多を中心とした玄界灘沿岸地域は、古くは弥生時代から現代に至るまで、国の内外をつなぐ港町としての歴史をもっており、そこに生活した人々がどのような形質変化を遂げてきたかを明らかにすることは、人類学的にも興味ある課題である。今回、2003 年秋に福岡市教育委員会によって実施された箱崎遺跡 41 次調査出土の中世人骨を精査する機会に恵まれたので、以下に明らかになった諸点を述べていきたい。

資料・方法

箱崎遺跡は福岡市東区、多々良川河口左岸の博多湾に面した南北に延びる砂丘上に所在し、本調査区はその北東端に位置する。12 世紀後半から人骨を伴う 3 基の墓が出土し、中でも SK-63 木棺墓は龍泉窯系青磁碗、皿、刀子を副葬していた。本遺跡から出土した人骨は、全身の大部分の部位が確認されたものの骨の保存状態は不良であり、四肢骨については、一部をのぞいてほとんどの部位は計測、観察に耐えられなかった。計測は Martin – Saller（1957）に従い、性判定には中橋（1988）の方法を援用した。

1. SK-34 人骨

出土状態：頭位を北にした、仰臥屈肢の埋葬位で検出された。頭蓋骨は頭頂を上に、顔面を南西に向け下顎骨と関節した状態である。左手部は右前腕骨遠位端の上から、右手部は左肩部から出土しており、仰臥した胸の上で右手を下にして両前腕を交差させていたものと考えられる。下肢は膝で強屈して左に倒している。

保存状態：ほぼ全身の骨が揃っているものの、人骨自体の保存状態は悪く、躯幹骨に関してはそのほとんどが破片である。頭蓋では特に顔面の保存が悪く、鼻根部と眼窩上部、そして右顔面全体を欠いている。残存歯牙は以下の通りである。

M^3	M^2	×	×	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	○	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

（○歯槽開放 ×歯槽閉鎖）

性別・年齢：外後頭隆起、眉弓、乳様突起の発達は共に弱い。また、前頭結節の発達が良く、側面観での屈曲が目立つ。肩甲骨の関節窩（関節窩長 33 ㎜、関節窩幅 24 ㎜）が比較的小さく、上腕骨（骨体最小周 56 ㎜）と大腿骨（骨体中央周 84 ㎜）の骨体はやや細い。以上の所見から、本人骨は女性と見なされる。また、上・下顎の中、側切歯と犬歯の咬耗度は栃原（1957）の 1b ～ 2a、第 1、2 小臼歯は 1c ～ 2a、第 1、2 大臼歯は 2a ～ 2b、第 3 大臼歯は 1b ～ 1c である。前頭・矢状・ラムダ縫合の外板はすべて残存しているが、内板は観察することができなかった。以上の所見から熟年と推定される。

2. SK-35 人骨

出土状態：体軸をほぼ北に向けた、右側臥屈葬の状態で検出された。頭蓋骨は左側面を上に、顔面を北西に向けている。左右上腕骨はほぼ体測に沿っており、右上肢は肘関節で強屈して手を胸に引き寄せているが、左前腕の状態は不明である。右下肢は強屈した膝を胸に引き寄せているが、左下肢は足骨が左大腿骨の骨体中央部より南西へおよそ 20 ㎝から出土していることから、股関節、膝関節ともにやや緩やかに屈曲していたものと考えられる。

保存状態：頭蓋冠は比較的保存良好だが、顔面では特に左顔面骨の大部分を欠いている。四肢骨は、右上腕骨、右大腿骨、右脛骨などの骨体部はほぼ遺存しているが、その他の四肢骨と躯幹骨は大部分が破片である。残存歯牙は以下の通りである。

／	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	／	／	／	M^1	M^2	／
／	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	／	／	I_2	C	P_1	／	M_1	M_2	／

（／欠損、・遊離歯）

性別・年齢：眉弓、特に眉間部が強く膨隆し、外後頭隆起の発達も良好である。乳様突起は大きい。大腿骨は粗腺の発達が弱く骨体もそれほど太くはないが（骨体中央周 85 ㎜）、上腕骨（最小周 63 ㎜）と脛骨（栄養孔位周 93 ㎜）はかなり太い。以上の所見から、本人骨は男性の可能性が高いと考えられる。また、咬耗度は、上顎の第 1 切歯は栃原の 2a、下顎犬歯は 2b、上・下顎の第 1・2 大臼歯は 1c ～ 2b である。冠状縫合の外板は消失しており、矢状縫合、ラムダ縫合はともにその半分ほどが消失している。内板については観察できなかった。以上の所見から、年齢は熟年と推定される。

3. SK-63 人骨

出土状況：頭位を北西に向けた右側臥屈葬位で検出された。頭蓋骨は左側頭部を上に顔面を南西に向け、下顎骨と関節した状態である。上肢は左右ともほぼ体側に沿わせて伸ばし、その手を左大腿骨の下に潜り込ませている。下肢は股関節、膝関節とも強屈している。

保存状態：頭蓋骨は比較的保存状態が良好だが、顔面下部、頭蓋底を欠いている。下顎骨は、右下顎角や切歯付近の歯槽弓などを欠いている。四肢骨はほぼすべての骨体が残されているが、躯幹骨のほとんどは破片である。残存歯牙は以下の通りである。

／	／	M^1	／	／	C	／	／	○	△	○	○	／	／	／	／
M_3	○	×	○	P_1	○	／	／	I_1	／	○	P_1	△	M_1	M_2	M_3

（△歯根のみ）

性別・年齢：眉弓が発達しており、乳様突起は大きく、外後頭隆起も比較的大きい。前頭結節の発達は弱く、前頭骨の側面観はなだらかに傾斜している。三角筋粗面、粗線、殿筋粗面、ヒラメ筋線の発達が良く、上腕骨（骨体最小周 62 ㎜）、大腿骨（骨体中央周 88 ㎜）、脛骨（栄養孔位周 93 ㎜）の骨体がかなり太い。以上の所見から、本人骨は男性と判定される。また、歯の咬耗度は、下顎切歯は栃原の 2b、上顎犬歯は 3、下顎第 1 小臼歯は 2b ～ 3、第 1、2、3 大臼歯は 2b ～ 3 である。前頭縫

合の外板は残存し、矢状縫合の外板は中央部のみ消失、ラムダ縫合の外板はラムダから左へ5㎝ほどのみが消失している。内板については観察できなかった。以上の所見から、年齢は熟年と推定される。

形質

冒頭において中世人的形質として強い長頭性・低顔傾向・歯槽性突顎を挙げたが、本人骨にもこのような特徴が強く表れている（表1、2）。長頭性については、SK-34（熟年女性）は長頭に近い中頭SK-63（熟年男性）は過長頭に分類され、SK-35（熟年男性）も、土圧による変形によって頭蓋最大幅は計測できなかったものの、頭蓋最大長は195㎜と長い。低顔傾向についてはSK-34の顔面は計測できなかったが、SK-63は上顔高が69㎜と比較群中で最も低く、眼窩は低眼窩、鼻型は過広鼻に属す。しかし、SK-35は上顔高が73㎜で、特に高顔傾向が強い北部九州弥生人には及ばないものの、それほど低くはなく、眼窩は低眼窩に近い中眼窩、鼻型は中鼻に近い狭鼻に属する。歯槽性突顎については、唯一計測可能であったSK-35の歯槽側面角は過突顎に近い突顎に属する。

総括

2003年度に博多近郊の箱崎第41次調査によって3体の12世紀後半の人骨が出土した。埋葬姿勢は、頭位を北にした仰臥屈肢（SK-34）、頭位を北にした右側臥屈葬（SK-35）、頭位を北西にした右側臥屈葬（SK-63）が確認された。博多から出土している古代～中世人骨の埋葬姿勢は、頭位、姿勢共に多種に渡るが、この時代より後世のものには側臥位が多い傾向も見られ（中橋、1995）、今回の出土例もそれを追認させるものであった。当地における葬送儀礼の時代変化の一端を窺わせるものとして、今後とも注目していきたい。

また、中世人骨は強度の長頭性や低顔傾向、あるいは強い歯槽性突顎という、一種独特の形態的特徴をもつことが、関東地方の材木座遺跡や山口地方の吉母浜遺跡など、各地の資料によって明らかにされている。ただその一方で、そうした時代性には多少の地域差がある可能性も示されており（中橋、永井、1985）、今後は各地の中世人資料を充実させる中でその具体的な描出、要因の解明が課題になろう。これまで博多旧街区から出土した幾例かの中世人骨にも概ね類似の時代性が指摘されてきたが、今回出土した当遺跡の中世人もまたそうした傾向を確認させるものであり、少なくとも博多を中心とした玄界灘沿岸地域の人々もまた、他地域と共通した特徴を持つ可能性が強まったと言えよう。ただ、その地域性の有無、差異の内容を明らかにするには一層の資料充実を図る必要があり、今後とも、こうした各地域の中世人骨を追加していくことによって、その特異とでも言うべき時代性が生み出された要因を明らかにする道が開けるものと期待する。

文献

原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類研究1。

Martin-Saller（1957）:Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag.Stuttgart.

中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。

中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。

中橋孝博（1995）：「博多遺跡群第62次調査出土の古代・中世人骨」、博多48、福岡市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1989）：「1.形質」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。

栃原博（1957）：「日本人歯牙咬耗に関する研究」、熊本医学会雑誌31（補冊4）。

表 1．頭蓋計測値の比較（男性）

	箱崎41次(中世)		吉母浜[1](中世)		北部九州[2](弥生)		天福寺[3](近世)		西南日本[4](現代)	
Martin No.	SK-35	SK-63	n	M	n	M	n	M	n	M
1 頭蓋最大長	195	196	16	181.8	118	183.7	38	182.6	108	181.4
8 頭蓋最大幅	–	130	17	136.2	117	142.4	38	138.6	108	139.3
17 Ba－Br高	–	137	17	139.4	101	137.7	33	139.2	108	139.3
8:1 頭蓋長幅示数	–	66.3	16	74.9	104	77.7	37	76.0	108	76.6
17:1 頭長高示数	–	69.9	16	76.8	91	75.3	33	76.2	108	76.9
17:8 頭幅高示数	–	105.4	17	102.5	91	97.0	33	100.8	108	100.1
48 上顔高	73	69	15	69.9	114	74.8	18	74.5	92	71.8
51 眼窩幅(左)	42＊	43＊	18	42.0	89	43.2	24	42.6	108	43.0
52 眼窩高(左)	32＊	31＊	18	34.4	93	34.5	24	34.1	103	34.4
52:51 眼窩示数(左)	76.2＊	72.1＊	18	82.1	86	79.9	23	80.9	108	80.2
54 鼻幅	24	29	17	26.0	117	27.1	24	26.5	108	25.9
55 鼻高	52	50	16	51.4	116	52.8	24	52.9	108	52.2
54:55 鼻示数	46.2	58.0	16	50.5	113	51.4	24	50.1	108	49.8
72 全側面角	83	–	15	82.5	85	84.5	16	83.2	92	83.8
74 歯槽側面角	70	–	14	65.2	83	69.8	16	67.0	107	70.7

1) 中橋・永井(1985)、2) 中橋(1989)、3) 中橋(1987)、4) 原田(1954)、＊右を使用

表 2．頭蓋計測値の比較（女性）

	箱崎41次(中世)	吉母浜(中世)		北部九州(弥生)		天福寺(近世)		西南日本(現代)	
Martin No.	SK-34	n	M	n	M	n	M	n	M
1 頭蓋最大長	180	26	176.4	86	177.0	38	174.7	57	172.8
8 頭蓋最大幅	137	26	132.0	84	138.4	38	133.5	57	134.0
17 Ba－Br高	121	25	133.0	66	130.7	35	132.7	57	131.3
8:1 頭蓋長幅示数	76.1	26	74.9	72	78.1	38	76.5	57	77.6
17:1 頭長高示数	67.2	25	75.4	62	74.1	35	76.1	57	76.0
17:8 頭幅高示数	88.3	25	100.7	56	94.9	35	99.4	57	98.0
65 下顎関節突起幅	122	28	118.0	34	126.8	–	–	–	–
66 下顎角幅	104	28	95.9	26	100.4	–	–	36	88.8
68 下顎骨長	73	28	71.9	26	72.5	–	–	–	–
68 (1)下顎骨長	108	28	100.1	–	–	–	–	–	–
69 (3)下顎体厚(左)	13	27	12.2	–	–	–	–	–	–
70 下顎枝高(左)	58	23	56.1	20	59.2	–	–	36	57.7
70a 下顎頭高(左)	54	25	51.0	–	–	–	–	–	–
71 下顎枝幅(左)	38	28	34.7	34	35.3	–	–	36	31.4
71:70 下顎枝示数(左)	65.5	23	62.1	20	61.0	–	–	36	54.7
79 下顎枝角	125	26	121.5	34	125.2	–	–	–	–

付論2

箱崎41次調査出土動物遺存体について

大規模事業等担当　　屋山　洋

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘状に位置する遺跡で中近世には箱崎宮を中心として栄えた遺跡である。41次調査区は遺跡の東端に位置し、調査区東側の段落ちに堆積した包含層から動物遺存体が出土した。包含層中の遺物は12世紀中頃～後半までを含んでおり、包含層の上から12世紀後半の墓が掘込むため時期は12世紀後半を下限とする。骨は哺乳類の四肢骨を主とするがイヌやネズミの咬痕が多くみられ、廃棄後すぐに埋まらなかったためか骨の遺存状態は悪い。ヒトの骨が数点出土しているが中世墓から遊離したものと思われる。調査時に土壌の水洗選別等は行っていない。

イヌ　5点出土した。このうち頸椎は椎体の後側が刃物により切断されており、解体時に首を切断した痕跡と考えられる。その他の骨に解体痕は確認できなかった。

イノシシ　断定できたのは頭蓋骨と下顎、上顎歯の3点のみである。上顎歯は左側第3後臼歯で摩滅が始まっているが、下顎は第4前臼歯に乳歯が残った幼獣で別個体であり、最小個体数は2匹である。

イルカ類　頭蓋骨と下顎が出土した。出土時の観察では頭蓋骨・下顎ともまとまっていたと考えられるが、遺存状態は悪く取り上げ後細片化している。頭蓋骨嘴部上面に薄く削るような刃物痕が観察できる。皮を剥ぐ時についた痕跡か。歯は顎から分離して一本のみ出土しており、長さ1.99㎝、径6.8㎝を測る。頭蓋骨は全長60㎝で上下顎とも歯が密に並ぶ、小型のイルカである。箱崎遺跡の南西側に位置する博多遺跡で出土するイルカ・クジラ類の骨のほとんどは解体痕を持つ椎骨であるが、その他に少数の頭蓋骨が土壙の底部から出土する。今回も完形で下顎を伴うことや椎骨が出土していないことからこの調査区近辺で解体・廃棄されたのではなく、よそから持ち込んで土坑に埋置した可能性が考えられる。

クジラ類　椎骨の棘突起先端部分のみが出土した。大型のクジラ類と思われる。椎体部との切断はナタ状の刃物を使用せず、椎体との境を削って薄くした後へし折っている。

ウシ　断定できるものは19点で頭蓋骨片と下顎の他、中手・中足骨と指骨など四肢先端部である。椎骨、肋骨片も出土しているがウマと区別することができなかった。下顎骨は3点出土したうち2点は右側でこれらは乳歯が残っていることなどから幼獣～若獣であるが上顎歯は咬耗著しく歯冠も2～3㎝しか残っていないため老獣と考えられ最小個体数は若獣2頭、老獣が1頭を数える。

ウマ　同定できた分は39点で頭蓋骨、下顎の他肩胛骨以下の四肢骨であるが、四肢骨では指骨や距骨など骨格器として利用しにくい先端部分が多く出土する。大腿骨、指骨に解体時についたと思われるカットマークがみられるが、指骨まで解体痕が付くのは偽鼈甲などとして足の蹄を利用した可能性が考えられる。ウシと出土部位が似ているのは、利用法が同じであったためか。

シカ　10点出土した。頭蓋骨と四肢骨で上腕骨遠位端と大腿骨にこまかなカットマーク、踵骨前面内側にナタ状の解体痕があり、肉が少ない先端はナタ状の大きな刃物で切断し、肉が多く付く上腕骨や大腿骨は丁寧に解体したことが判る。頭蓋骨はオスの左右前頭骨で同一個体の可能性があり角座下に角を切り離した時のナタ状痕跡がみられる。

まとめ　出土した動物の割合はイヌ4％、イノシシ3％、シカ8.5％、ウシ16％、ウマ33％、イルカ・クジラ類2.5％となり、イノシシ・シカ・イルカ類が多い博多遺跡群とは異なる。またウシ・ウマの区別が付かなかった骨を加えるとイノシシ・シカの中型哺乳類が16％、ウシ・ウマの大型哺乳類が60％と大型哺乳類の割合が多い。これは土壌洗浄を行っていないため目に付きやすい大型の骨が多いこともあると思われ、他に時期差や集落端である本調査区が日常にでる魚等の塵とは異なる物の廃棄場所であった可能性なども考えられる。解体痕はイノシシ・シカの椎骨でカットマークを確認できた他、ウシ・ウマでも数は少ないがカットマークが観察でき、食料・骨格器材料として利用されていたことが判る。イルカ・クジラ類の椎骨はほとんどがナタ状の刃物で叩き折られるが今回出土したクジラの棘突起は骨を薄く削ってからへし折っており、何らか別の利用法があるものと考えられる。

箱崎第41次調査出土動物遺存体一覧

骨の測定に関しては A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES を使用した。

	層位	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考
1	82	ウマ	大腿骨	左	両端部欠損		不明	幹部全面にあり	なし	
2	66全体	シカ	上腕骨	右	近部欠損(イヌによる噛み痕)	遠端関節前面欠損	骨化済み	遠位関節周辺にこかまなカットマーク	なし	
3	トレンチ①		長幹骨							大きさはイタチ程度か
4	トレンチ②	イノシシ	上顎歯	左	M3	根無し				
5	トレンチ②	ウシ	中手・中足骨	左	遠位端	外側関節面後側部分のみ		なし	なし	わずかにイヌの咬痕
6	トレンチ③	ウシ	中足骨	左		縦片	骨化済み	なし	なし	
7	①-A	ウマ	尺骨	左	関節部より近位側	近位端欠損	骨化済み	なし	不明	遺存不良
8	①-A	ウマ	橈骨	左	遠位部		骨化済み	なし	なし	大咬痕あり Bd6.07cm
9	①-A	ウマ	橈骨	左	近位端		骨化済み	なし	なし	Bp7.14cm
10	①-B	ウマ	指骨(基節骨)	左?	遠位部破損		骨化済み	なし	なし	047とあう GL7.98cm
11	①-B	ウマ	指骨(中節骨)	左?	外側後面部欠損		骨化済み	なし	なし	
12	①-C		不明							
13	①-C	イノシシ・シカ	肋骨片		小片のみ					
14	①-C	シカ	肩甲骨	右	遠位端のみ		成獣	なし	なし	
15	①-C	シカ	大腿骨	右	近位部	近位端欠損	骨化済み	内側に細かなカットマーク	なし	スパイラル
16	①-D	イヌ	上顎	左	P4～M2周辺のみ			不明	不明	P4は L1.74cm
17	①-D	イヌ	頭蓋		椎体下半切断		椎頭骨化済み		不明	
18	①-E		長幹骨		径2cm					ネズミ咬痕
19	①-F	イノシシ・シカ	腓骨	左	近位部	近端欠損	骨化済み	なし	不明	破面スパイラル
20	①-F	ウシ	距骨	右	遠位側は刃物による切断		成獣	前方中央部挿れ部にナタ痕	なし	
21	①-G		頭蓋骨		眼窩周辺					
22	①-G	イヌ	腓骨	右	遠位部		骨化済み	なし	なし	
23	①-G	イノシシ・シカ	椎骨(胸椎)		棘突起中央から欠損	椎頭を刃物で切断	骨化済み	こまかなカットマークあり	なし	
24	①-G	ウシ	指骨(基節骨)	右	近位端内側の一部を欠損		骨化済み	なし	なし	
25	①-G	ウシ・ウマ	肋骨		中央部		不明	なし	なし	
26	①-G	ウシ・ウマ	肋骨	右?	近位部	近位端欠損	不明	なし	なし	
27	①-G	クジラ類	椎骨		棘突起のみ		不明	あり	なし	椎体との間を外側から削り薄くしてから折る
28	①-G	ヒト	頭蓋骨		左側頭骨		不明	なし	なし	遺存不良
29	①-H	イノシシ・シカ	長幹骨	不明	幹部のみ	側面欠損	不明	不明	不明	風化著しい
30	①-H	ウマ?	尺骨	右	両端欠損	外側鉤状突起欠損	成獣	なし	なし	遺存不良
31	①-H	ウマ?	橈骨	左	近位端のみ	外側半分切断	成獣	なし	なし	切断面新しい調査時か
32	②		長幹骨多数							数種あり
33	②		橈骨		遠位部	遠位端欠損	骨化済み	なし	なし	
34	②		腓骨		幹部のみ			なし	不明	
35	②	イノシシ	下顎	右	下顎枝欠損	咬筋欠損	P4は乳歯	なし	なし	
36	②	イノシシ	頭蓋骨		後頭骨		不明	なし	なし	イヌの咬痕あり
37	②	イノシシ・シカ	肋骨		遠位側	遠位端欠損				
38	②	イノシシ・シカ	肋骨		遠位側より					遺存不良 ネズミ咬痕あり
39	②	ウシ	上顎歯				咬耗激しい			歯冠高3.22cm
40	②	ウシ	上顎歯				咬耗著しい			歯冠高2.14cm
41	②	ウシ	上顎歯				咬耗激しい			歯冠高2.46cm
42	②	ウシ	上顎歯				咬耗激しい			歯冠高1.72cm
43	②	ウシ	中手・中足骨		幹部のみ					
44	②	ウシ	中手・中足骨		幹部小破片	前面溝周辺	不明	不明		
45	②	ウシ	中手骨	左	遠位部のみ		骨化済み	なし	なし	Bd5.77cm
46	②	ウシ	中足骨	左	近位端のみ		近位部済み	なし	なし	スパイラル 遺存不良 近端Bp5.19cm
47	②	ウシ	頭蓋骨		角芯部	根元部分	不明	なし	なし	
48	②	ウシ	腓骨	右	遠位部		骨化済み	遠位部外面側	不明	表面遺存不良
49	②	ウシ・ウマ	手・足根骨	不明	完形		骨化済み	なし	なし	
50	②	ウシ・ウマ	手・足根骨	不明	完形		骨化済み	なし	なし	
51	②	ウシ・ウマ	手・足根骨							4点
52	②	ウシ・ウマ	大腿骨	左	遠位端	内側顆	骨化済み	なし	なし	
53	②	ウシ・ウマ	橈骨		橈頭・嘴欠損	右関節突起欠損	不明	なし	なし	
54	②	ウシ・ウマ	頭蓋骨		鼻骨付近					小片
55	②	ウシ・ウマ	頭蓋骨?							
56	②	ウシ・ウマ	腓骨	左?	遠位部	外側関節面のみ	骨化済み	なし	なし	
57	②	ウシ?	中手骨?	右?	近位端	前方外側のみ	骨化済み	なし	なし	
58	②	ウマ	下顎	右	P1～M3部分	歯はP3～M3が遺存	咬耗著しい	なし	不明	歯冠高2cm程度
59	②	ウマ	下顎	左	P2～M3間のみ	下顎枝欠損		P2外側にカットマーク	なし	
60	②	ウマ	下顎	左	関節突起～下顎角突起なし		骨化済み	なし	なし	
61	②	ウマ	下顎切歯	右			咬耗進む			
62	②	ウマ	下顎切歯	右			咬耗進む	下側にカットマーク		
63	②	ウマ	寛骨	右	腸骨翼欠損	座骨欠損	骨化済み	なし	なし	
64	②	ウマ	距骨	右	完形		骨化済み	滑車部	なし	切痕は新しい可能性あり GB5.68cm GH5.6cm
65	②	ウマ	距骨	左	滑車近辺欠損		骨化済み	なし	なし	GB5.51cm
66	②	ウマ	肩甲骨	右	遠位部		骨化済み	なし	なし	
67	②	ウマ	指骨		近位部			近位関節面にあり		
68	②	ウマ	指骨(基節骨)	右	後足? 近位関節面前側欠損	遠位関節面内側一部欠損	骨化済み	なし	なし	GL7.98cm Bp4.98cm
69	②	ウマ	指骨(基節骨)	左	前足?		骨化済み	なし	なし	GL7.57cm Bp4.48?
70	②	ウマ	指骨(基節骨)	不明	近位部		骨化済み	なし	なし	Bp3.75cmと小さい
71	②	ウマ	指骨(末節骨)	左?	足底突起欠損		骨化済み	なし	なし	Ld4.44cm
72	②	ウマ	指骨(末節骨)	不明	中心から半分	先端欠損	骨化済み	なし	なし	004と形が異なる
73	②	ウマ	上顎歯	左						歯冠高4.8cm
74	②	ウマ	中手・中足骨		遠位端	端部1/2欠損				遺存不良
75	②	ウマ	中足骨		II・IVのうち外側		骨化済み	なし	なし	
76	②	ウマ	中足骨	右				なし	不明	表面遺存不良
77	②	ウマ	踵骨	右	距骨隆起欠損		骨化済み	なし	なし	GB4.82cm近位部に大の咬痕
78	②	ウマ	踵骨	左	完形		骨化済み	なし	なし	GL10.89cm GB4.81cm
79	②	シカ	中足骨	左	遠位部		骨化済み	なし	なし	Bd2.72cm イヌ咬痕あり
80	②	シカ	脛骨	右	遠位部	遠位内果欠損	骨化済み	なし	なし	イヌ・ネズミの咬痕あり
81	②	シカ	踵骨	右	遠踵欠損		骨化済み	幹部前面内側にナタ痕	なし	両端にイヌの咬痕
82	②	シカ雄	右前頭骨				若獣	角座下にナタ痕	不明	左前頭骨間未結合
83	②	シカ雄	頭蓋骨	左	前頭骨		若獣	角座下にナタ痕	なし	右前頭骨とは未結合
84	②	ヒト	下顎	右側	下顎枝なし	歯なし	不明	なし	なし	
85	②	ヒト	上腕か大腿	不明	幹部のみ		不明	不明	不明	表面遺存悪い
86	③	ヒト	頭蓋骨		頭頂～後頭部			なし	なし	
87	③	不明	頭蓋骨		破片			なし		小片7点 中型以上の動物
88	③	不明	頭蓋骨		右側頭骨			なし		大きさイヌ程度
89	⑤	シカ	指骨(基節骨)	左			骨化済み	不明	不明	表面遺存悪い
90	⑤	イルカ類	歯							102頭蓋骨に伴う 長さ1.99cm
91	⑤	イルカ類	頭蓋骨		出土時にはほぼ完形			吻部上面に薄く削るカットマーク	なし	大孔から前縁形骨周辺に鋭利なカットマーク
92	④-A	ウシ	下顎	右	P4からM1		乳歯あり		不明	イヌ咬痕らしきものあり
93	④-A	ウシ	下顎	右	M1～M2		若獣		不明	M2は萌出しはじめ
94	④-A	ウシ・ウマ	下顎枝		小破片			不明	不明	
95	④-A	ヒト	歯	不明	歯根のみ					
96	④-A	ヒト	上顎犬歯	右						
97	④-B	イヌ?	腓骨		左後関節突起欠損			なし	不明	
98	④-C	ウマ	肩甲骨	左	近位部	近位端欠損	骨化済み	不明	不明	表面遺存不良
99	④-D	ウマ	右上顎歯1本	右	P3～M2のうちの一本	前方下側欠損		なし	なし	歯冠高5cm 7～8才か
100	④-E		長幹骨		幹部のみ					
101	④-F	ウシ	腓骨	右	近位端欠損		骨化済み	不明	なし	ネズミ咬痕あり
102	④-F	ウマ	切歯		下顎なり右		若獣	なし	なし	
103	④-G	ウマ	腓骨	右	近位部	内側欠損	骨化済み	なし	不明	遺存不良
104	⑤	ヒト	切歯							2本
105	⑤-A	ウシ	下顎	左	歯冠高 P3 2.8cm M1 3.2cm M2 4.4cm M3 5.4cm			不明	不明	ネズミ咬痕あり 遺存不良
106	⑤-B		下顎?							中～大型動物
107	⑤-C	ウシ	中足骨	右	近端内面関節面欠損		骨化済み	近端内外両側面	なし	
108	⑤-D									
109	⑤-D									
110	⑤-D	イヌ	歯	右上顎	P3・P4	P3は歯根のみ		なし	なし	P4 L17.7?cm
111	⑤-D	ウマ	歯	右上顎	P3～M2のどれか		歯冠高5.14?			
112	⑤-D	ウマ	歯	左上顎	P3～M2のどれか		歯冠高3.8?			
113	⑤-D	ウマ	上顎歯	右	一部のみ					
114	⑤-D	ウマ	切歯							
115	⑤-D	ウマ	切歯							
116	⑤-E	ウマ	肩甲骨	右	遠位端	小片	骨化済み	不明	不明	遺存不良
117	東棟出B	シカ?	中手・中足骨							他の骨の混入もあり

Ⅳ．第44次調査

1．調査に至る経過

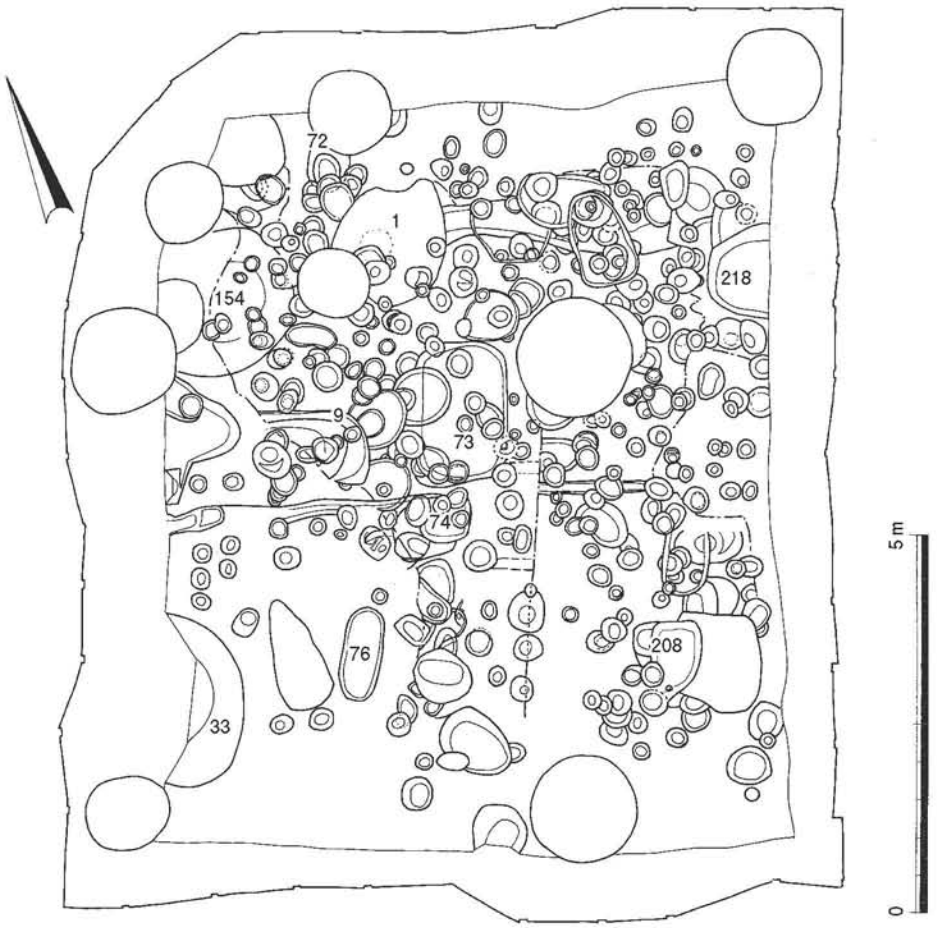
平成15年2月28日、児嶋邦男氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市東区箱崎1丁目35-3地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年3月3日、試掘調査を行い、その結果、柱穴等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。児嶋邦男氏と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成16年2月16日より開始、平成16年3月15日に終了した。

最後になりましたが、児嶋邦男氏をはじめ関係者の方々には調査に際し、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

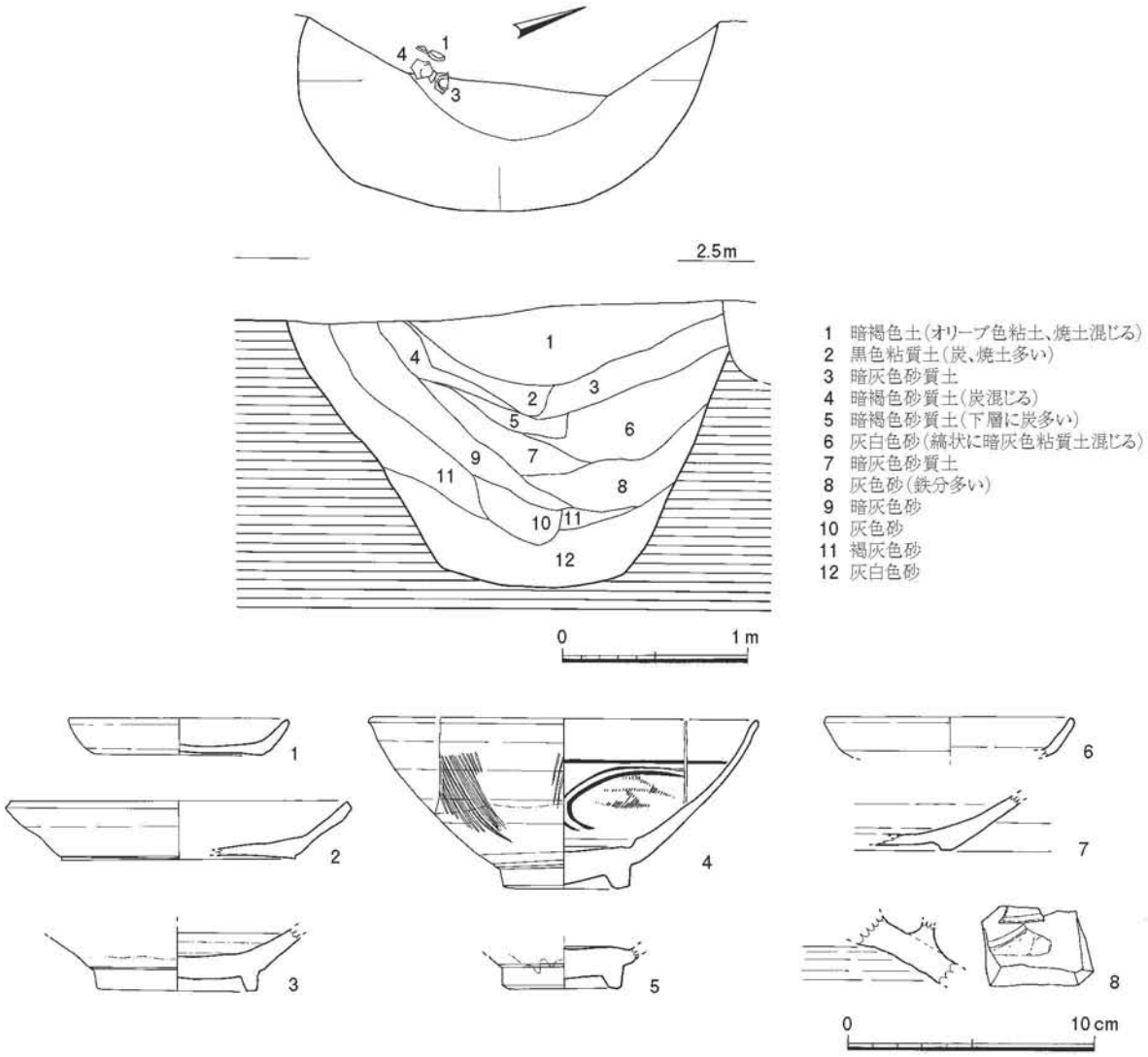
2．調査体制

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口譲治　山崎純男（前任）
	調査第2係長	池崎譲二　田中寿夫（前任）
事前審査	事前審査係長	浜石哲也　池崎譲二（前任）
	主任文化財主事	吉留秀敏　米倉秀紀（前任）
	事前審査係	久住猛夫
調査庶務	文化財整備課管理係	御手洗清
調査担当	調査第2係	中村啓太郎
調 査 員	上田龍児	
発掘作業	小川秀雄　徳永栄彦　吹春哲男　宮崎雅秀　竹原吉秋　花田昌代　野田トヨ子	
	井上ヨシ子　田中フキ子　光安晶子　大庭智子　村崎祐子　藤澤義一　園田豊	
	上田龍児　渡辺誠　田端名穂子　中村幸子　花田則子　安藤史郎　阿部純子	
	稲崎龍也　崎村雄介　永松弘恵	
整理作業	林由紀子　下川奈津代　釜崎法子　原陽子　三栗野雅子	

第 51 図　第 44 次調査区位置図（1/500）



第 52 図　遺構配置図（1/100）



第 53 図　SE-33 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

3．調査概要

第 44 次調査区は東区箱崎 1 丁目 35-3 に所在し、遺跡の中央西側斜面に位置する。調査は矢板打ち、重機による鋤取り後、人力掘削から開始した。廃土処理の関係から調査区を東西に 2 分割し、西側から順に調査を行った。また安全対策から矢板から 1 m程は残した。

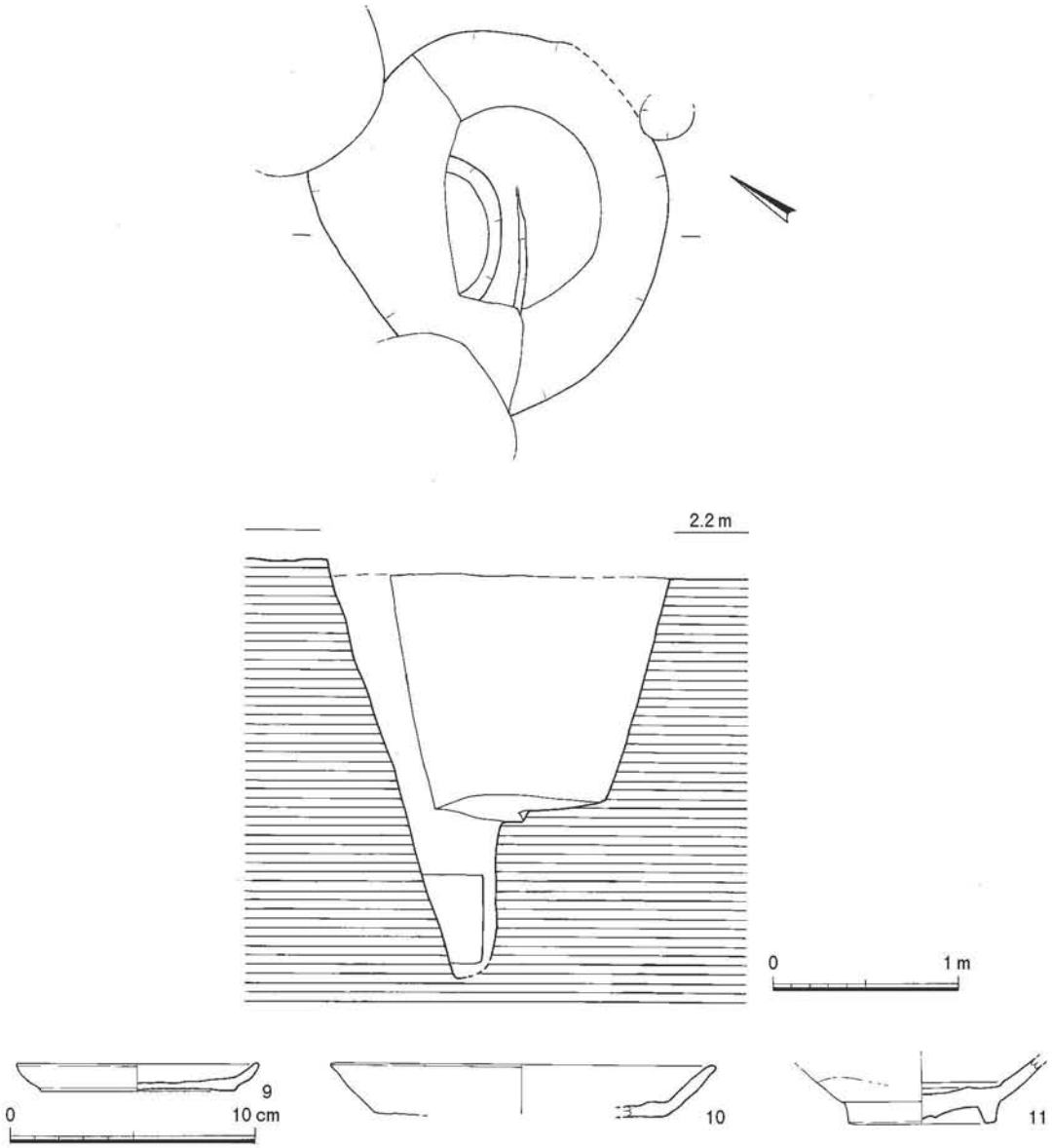
遺構は整地層上面と地山である黄褐色砂の 2 面で検出したが、第 2 面検出の遺構には第 1 面で検出できなかった遺構を多く含む。このため掲載した遺構配置図は 1 面、2 面を合成したものである。整地層上面で標高 2.7m ～ 3.1m を測る。検出した遺構は井戸 2 基、土坑、柱穴等である。調査面積は 114 ㎡を測る。

4．調査の記録

1）井戸

SE-33（第 53 図）

調査区南西に位置し、調査区外に拡がる。掘り方は円形を呈すると思われる。南北方向で幅 230



第54図　SE-154実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

cmを測る。井筒は確認できなかった。

出土遺物（第53図）1は土師器の小皿。口径9.4cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。2は土師器坏。復元口径14.2cm、器高2.4cmを測る。底部は糸切り。3は白磁碗Ⅷ類。4・5は同安窯系青磁碗。6は龍泉窯系青磁皿。7・8は陶器。

SE-154（第54図）

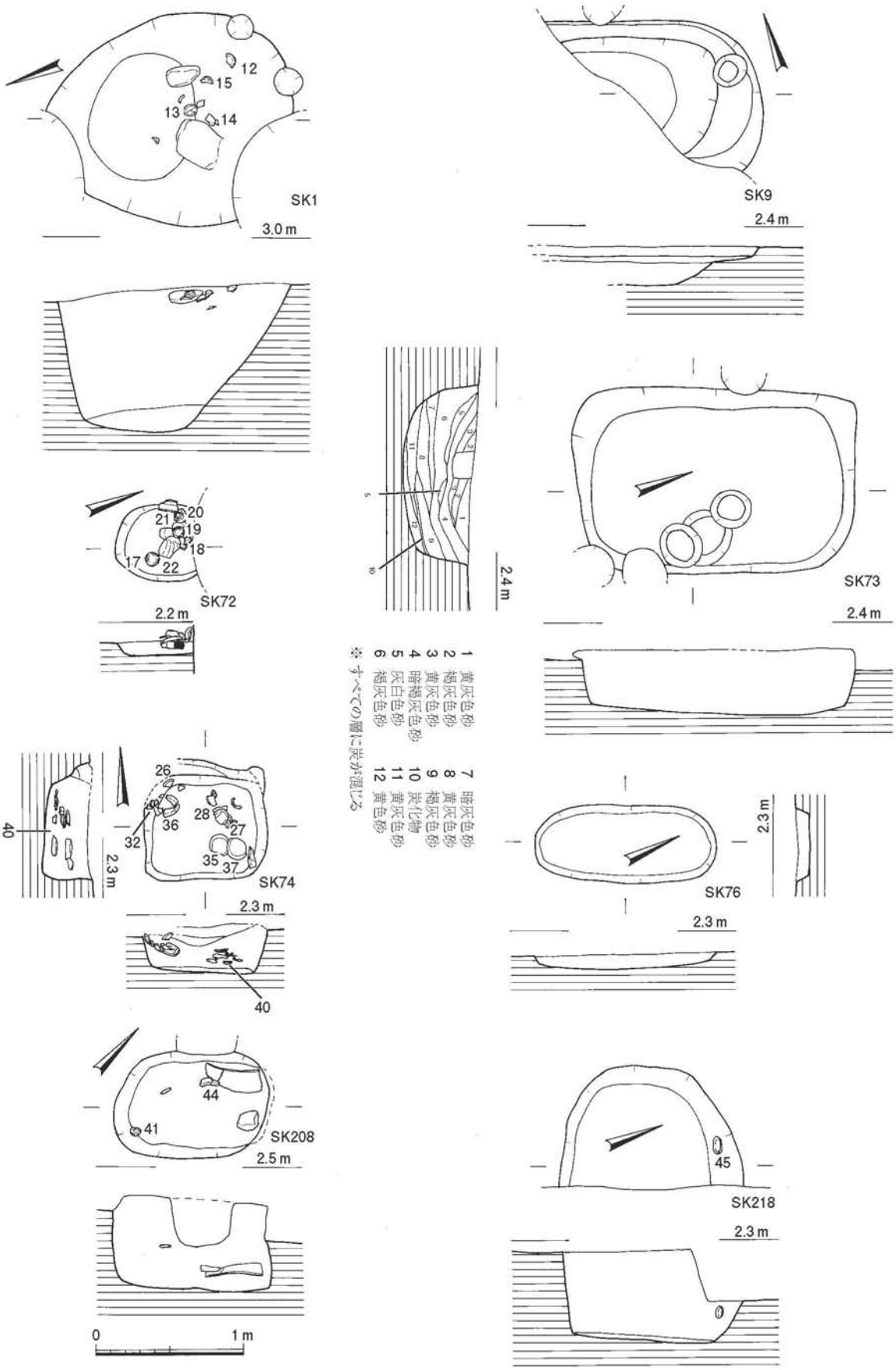
調査区南西に位置し、調査区外に拡がる。掘り方は円形を呈すると思われる。東西方向で幅200cmを測る。中位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に深さ90cm程掘削する。井筒は木桶か。

出土遺物（第54図）9は土師器の小皿。復元口径9.8cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。10は土師器の坏。復元口径15.6cm、器高2.1cmを測る。11は白磁碗Ⅷ類。

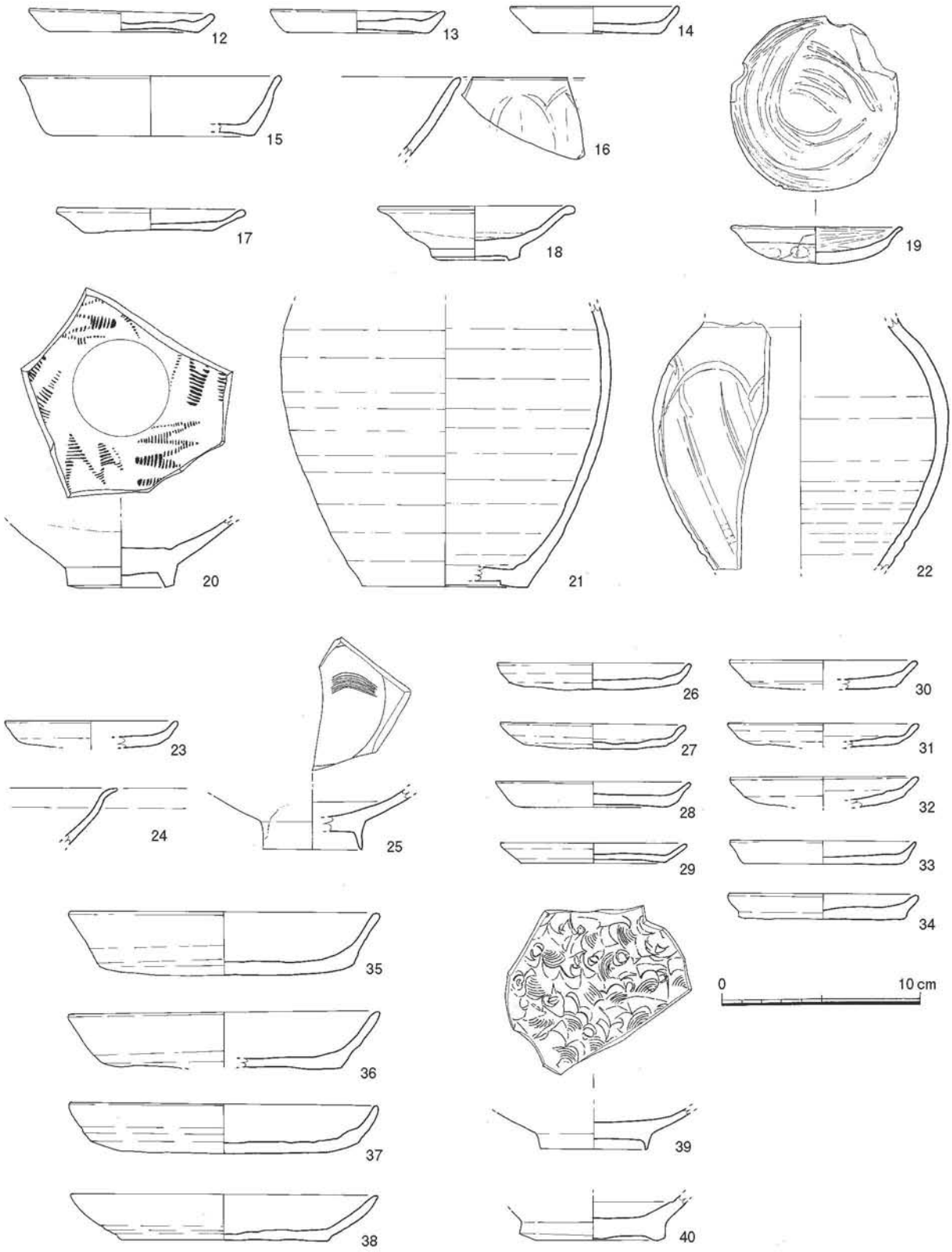
2）土坑

SK-1（第55図）

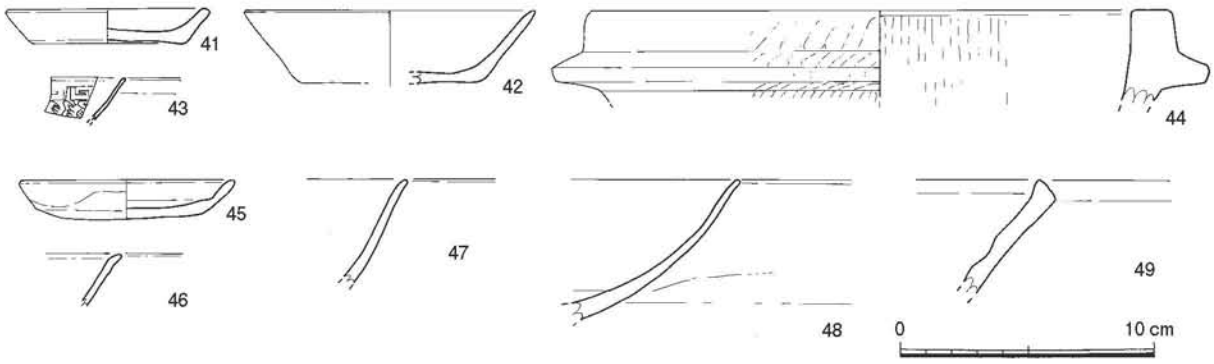
調査区北に位置する。楕円形を呈し、長さ155cm、幅145cm、深さ97cmを測る。



第 55 図　SK-1・9・72・73・74・76・208・218 実測図（1/40）



第 56 図　SK-1・72・73・74 出土実測図（1/3）



第 57 図　SK-208・218 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第 56 図）12 ～ 14 は土師器の小皿。口径 8.5 ㎝～ 9.4 ㎝、器高 1.1 ㎝～ 1.3 ㎝を測る。底部は糸切り。15 は土師器の坏。復元口径 13.4 ㎝、器高 3.1 ㎝を測る。底部は糸切り。16 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。

SK-9（第 55 図）

調査区西に位置する。楕円形を呈し、幅 95 ㎝前後、深さ 18 ㎝を測る。遺物は土師器、白磁の細片が出土している。

SK-72（第 55 図）

調査区北に位置する。北側を先行して行われた杭打ちによって切られる。楕円形を呈し、幅 52 ㎝、深さ 10 ㎝を測る。

出土遺物（第 56 図）17 は土師器の小皿。口径 9.6 ㎝、器高 1.2 ㎝を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。18 は白磁皿Ⅲ類。19 は瓦器の小皿。口径 8.6 ㎝、器高 1.9 ㎝を測る。調整は外面はヨコナデ、内面はヘラミガキを施す。20 は同安窯系青磁碗。21・22 は陶器の壺。釉は 21 がオリーブ褐色、22 が暗オリーブ色を呈する。

SK-73（第 55 図）

調査区中央に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ 190 ㎝、幅 122 ㎝、深さ 43 ㎝を測る。

出土遺物（第 56 図）23 は土師器の小皿。復元口径 8.8 ㎝を測る。底部はヘラ切り。24・25 は白磁碗。

SK-74（第 55 図）

SK-73 の南に位置する。隅丸方形を呈し、南北 85 ㎝、東西 75 ㎝、深さ 33 ㎝を測る。

出土遺物（第 56 図）26 ～ 34 は土師器の小皿。口径 9.4 ㎝～ 10.0 ㎝、器高 1.0 ㎝～ 1.5 ㎝を測る。底部は 26 ～ 28・30 ～ 32・34 がヘラ切りでこの内 26・27・31・34 は板状圧痕を有する。他は糸切り。35 ～ 38 は土師器坏。口径 15.6 ㎝～ 16.0 ㎝、器高 2.3 ㎝～ 3.3 ㎝を測る。底部は 38 が糸切りで他はヘラ切り。いずれも板状圧痕を有する。39 は青白磁。40 は白磁碗Ⅳ類。

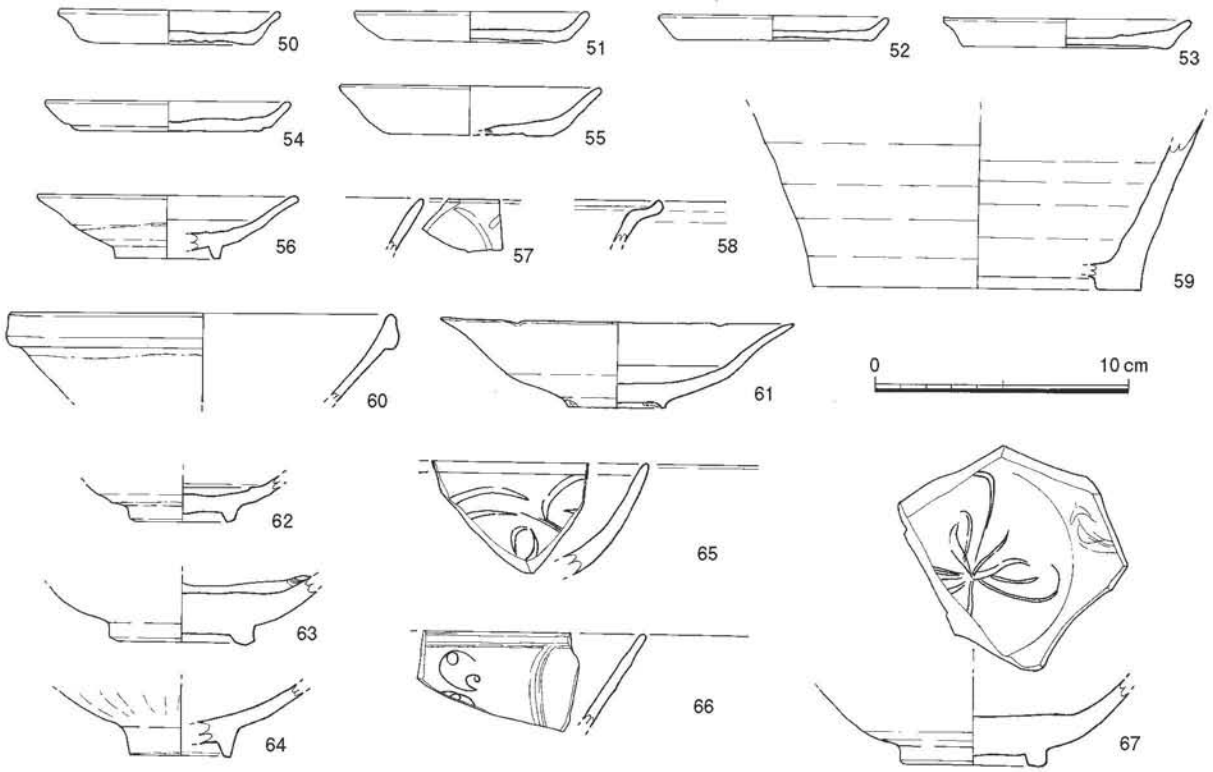
SK-76（第 55 図）

調査区南西に位置する。楕円形を呈し、長さ 124 ㎝、幅 50 ㎝、深さ 9 ㎝を測る。遺物は土師器の細片が出土している。

SK-208（第 55 図）

調査区南東に位置する。不整楕円形を呈し、長さ 103 ㎝、幅 72 ㎝、深さ 62 ㎝を測る。

出土遺物（第 57 図）41 は土師器の小皿。口径 8.1 ㎝、器高 1.4 ㎝を測る。底部は糸切り。42 は土師器坏。復元口径 11.4 ㎝、器高 2.9 ㎝を測る。底部は糸切り。43 は白磁Ｘ類。44 は石鍋。



第 58 図　整地層及びその他の出土遺物実測図（1/3）

SK-218（第 55 図）

調査区北東に位置し東側が調査区外に延びる。幅 120 ㎝、深さ 64 ㎝を測る。

出土遺物（第 57 図）45 は瓦器の小皿。口径 8.6 ㎝、器高 1.6 ㎝を測る。底部は糸切り。46 は白磁 IX類。47 は青磁碗。48 は白磁碗。49 は須恵質の鉢。

3）その他の出土遺物（第 58 図）

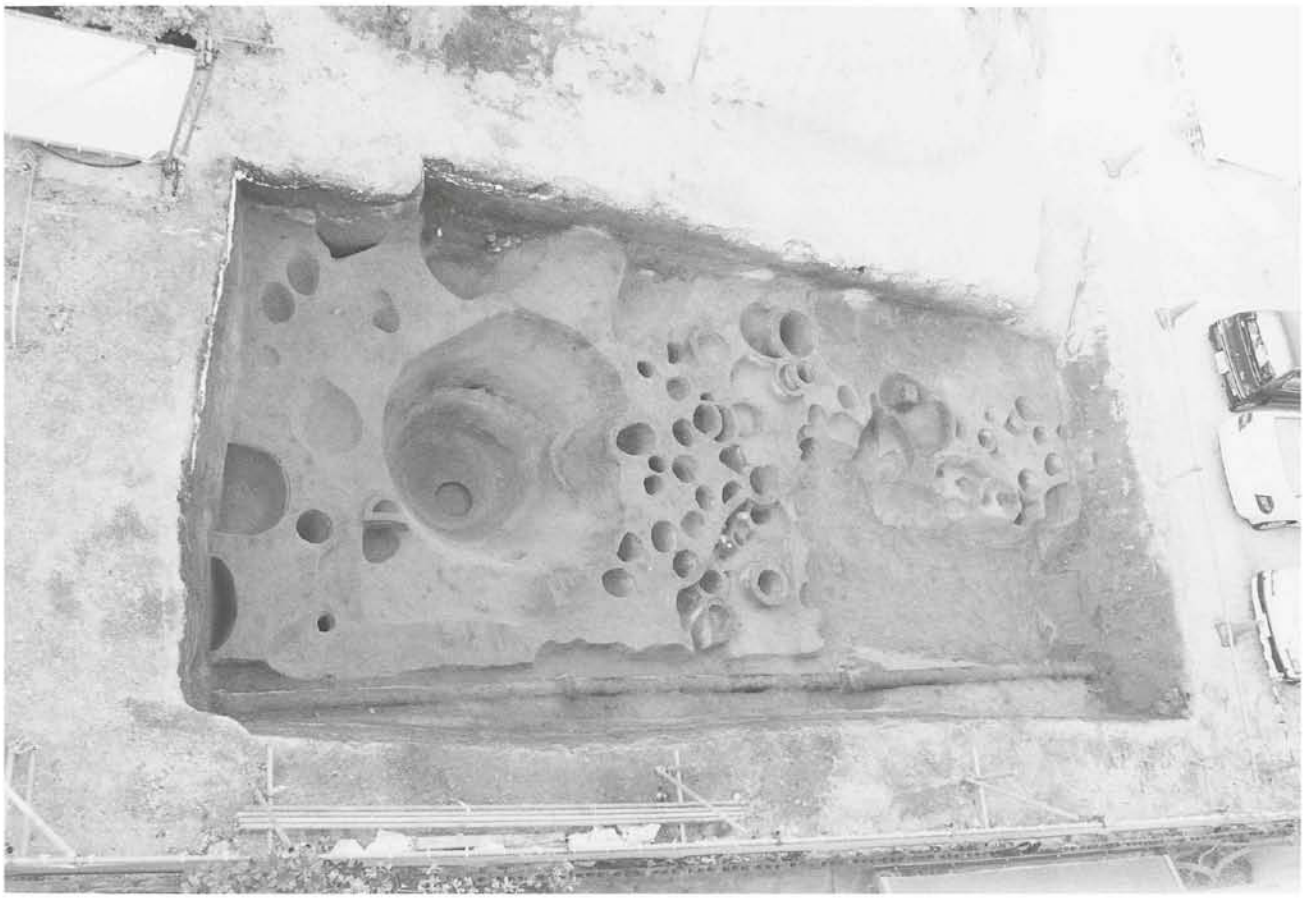
50 ～ 59 は整地層掘り下げ時の出土遺物。60 ～ 67 は第 1 面検出時の出土遺物。第 1 面検出面は整地層上層。50 ～ 55 は土師器の小皿。口径 8.8 ㎝～ 10.4 ㎝、器高 1.0 ㎝～ 1.9 ㎝を測る。底部は 53 がヘラ切り。他は糸切りで板状圧痕を有する。56 は白磁IIIIII類。57・58 は龍泉窯系青磁。57 は碗 II 類、58 は坏III類。59 は陶器の壺か。釉は灰白色を呈する。60 は白磁碗IV類。61 は青磁III。口縁部に輪花を有する。全面に施釉し、高台部に目跡が残る。62 ～ 67 は龍泉窯系青磁碗。

5．小結

今回の調査では井戸、土坑、柱穴等が 2 面で検出された。また第 1 面と第 2 面の間に焼土面及び焼土、炭化物を含む整地層が確認された。この層は遺跡の北西部を中心に広範囲に確認されている。これらについては最近、文永の役に起因する可能性が考えられているが、本調査においては遺構の密度が高く、整地層の出土遺物のみを完全に分けることは出来ていない。また第 2 面検出の遺構には第 1 面で検出できなかったものが含まれるため、焼土面及び整地層の時期を確定することが出来なかった。このためその可能性の指摘にとどめておきたい。

図　　版

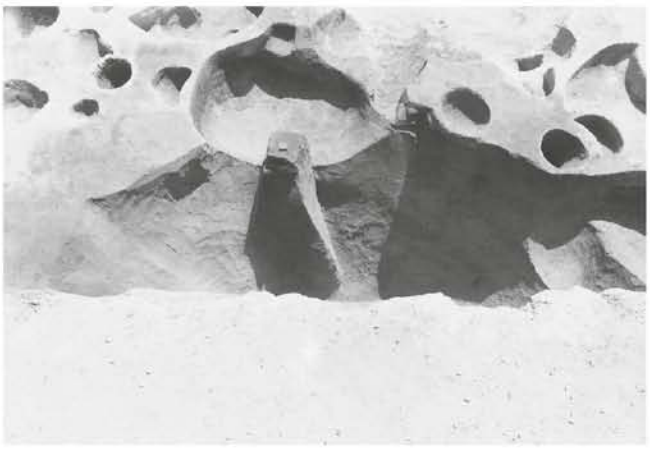
（1）第 39 次調査北半区全景



（2）第 39 次調査南半区全景

図版2

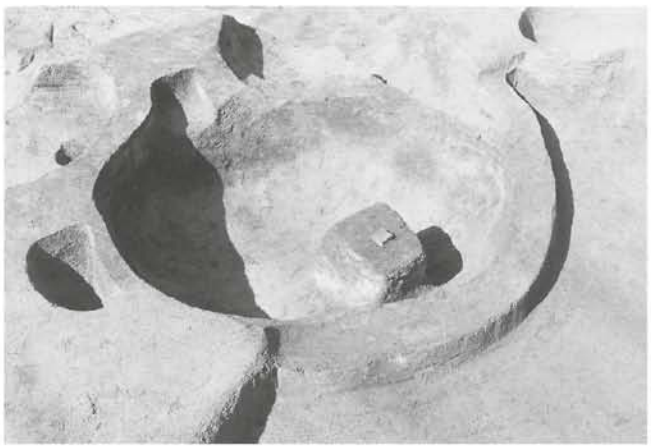
（1）SE-9（北から）



（2）SE-50（北から）

（3）SE-74（南から）

（4）SE-92（北西から）



（5）SK-40（北から）

（6）SK-63（南から）

（１）SK-69（東から）

（２）SK-70（北から）

（３）SK-73（北から）

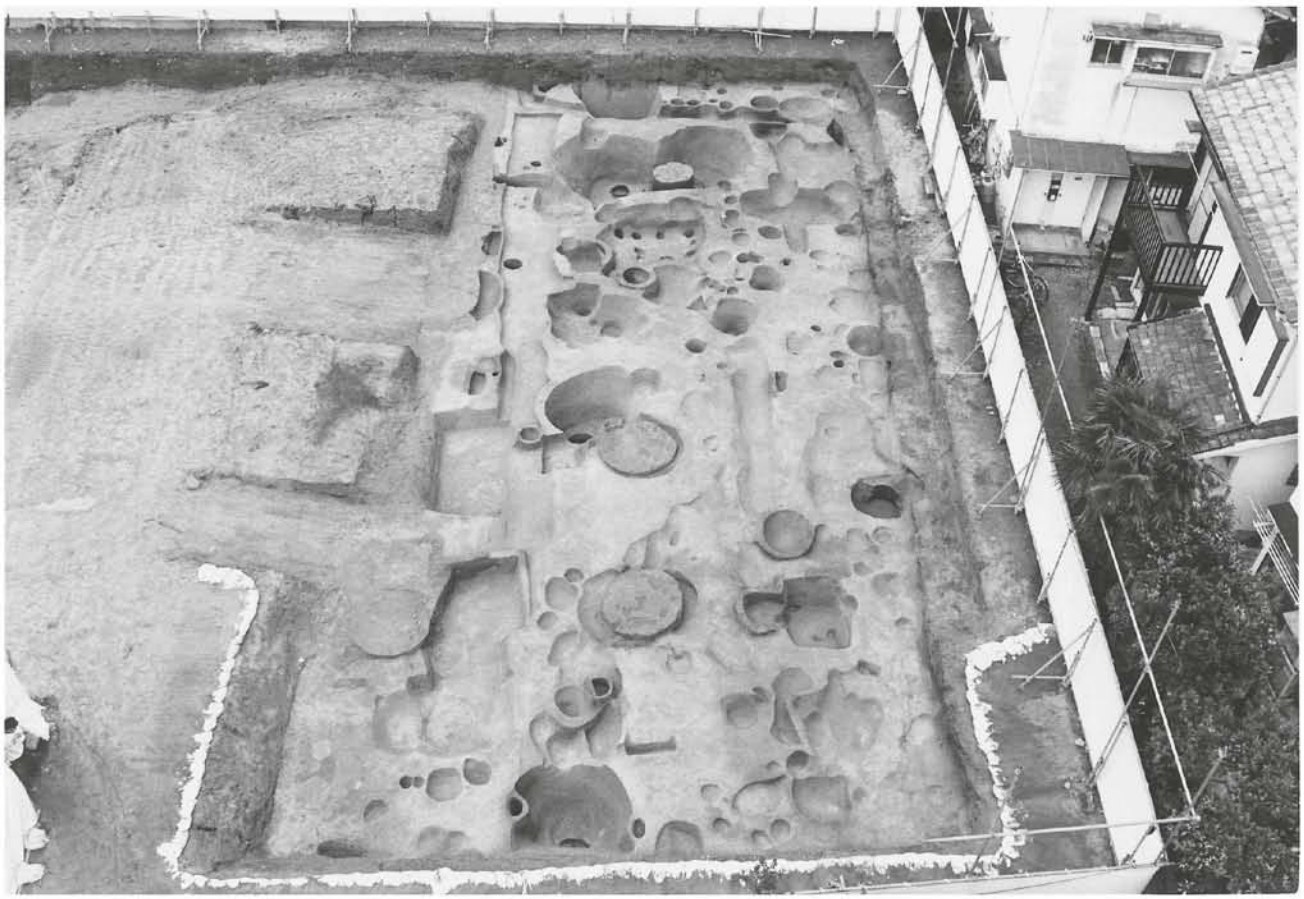
（４）SK-76（東から）

（５）SK-80・81（南から）

（６）SK-99（東から）

図版４

（１）第 41 次調査東半区全景



（２）第 41 次調査西半区全景

（１）SE-33（東から）

（２）SE-64（西から）

（３）SE-65（南から）

（４）SE-66（西から）

（５）SE-67（西から）

（６）SE-68（東から）

図版6

（1）SE-155（南から）

（2）SE-156（南から）

（3）SE-157・208（西から）

（4）SE-169（南から）

（5）SE-171（北から）

（6）SE-172（北から）

（1）SK-34（西から）

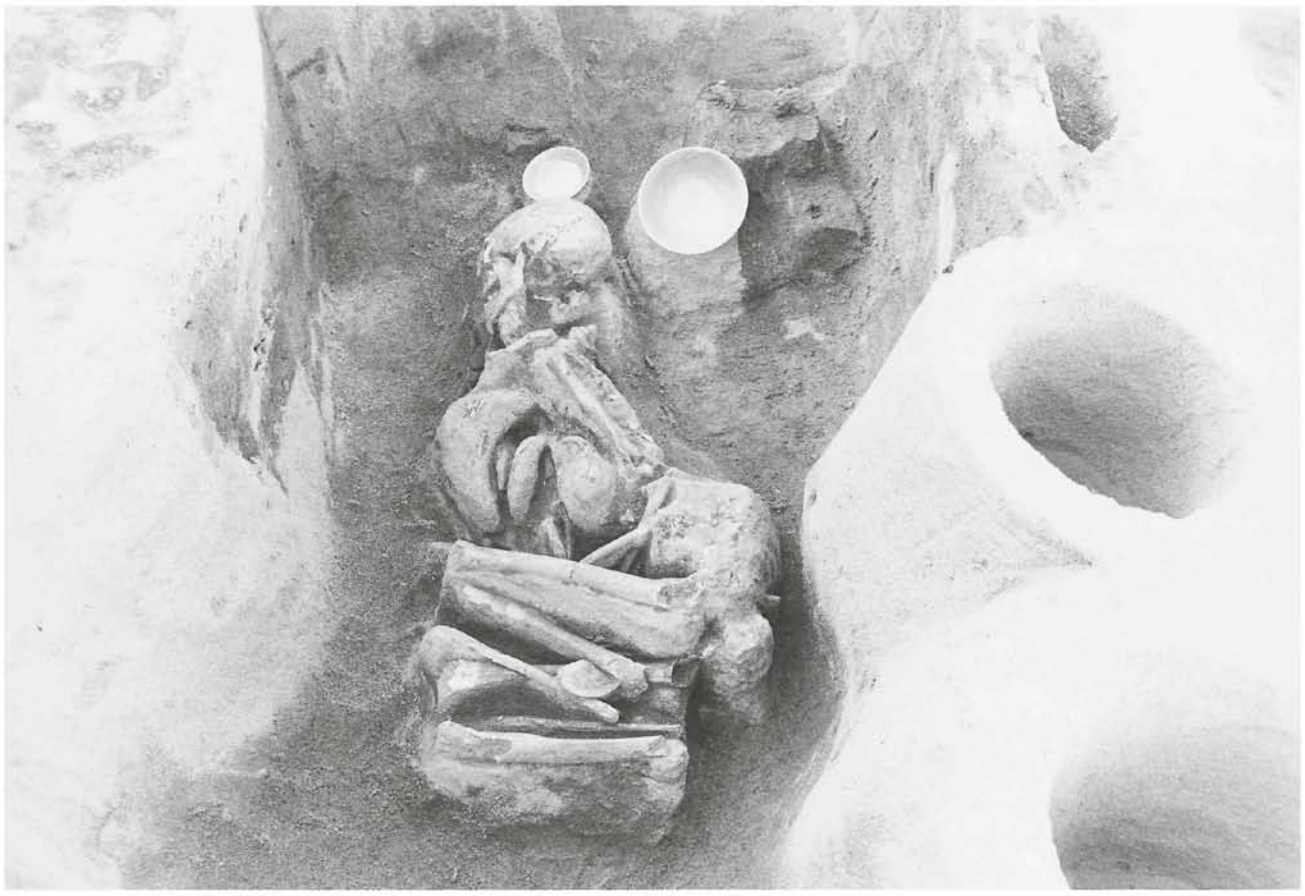
（2）SK-34（東から）

図版８

（１）SK-35（西から）

（２）SK-35（東から）

（1）SK-63（西から）



（2）SK-63（南から）

図版 10

（1）SK-30（西から）

（2）SK-18（東から）

（3）調査区東端部（東から）

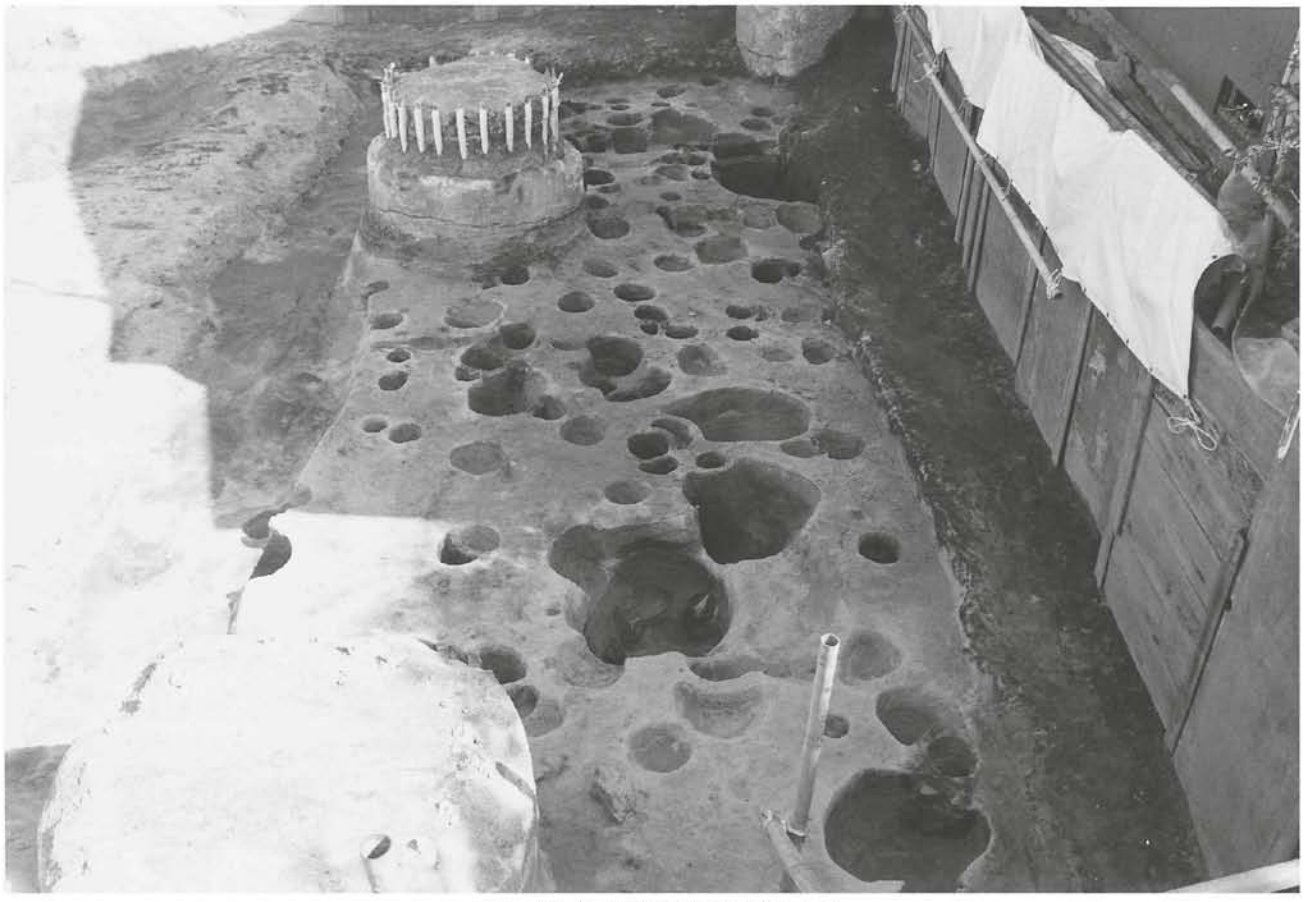
（4）調査区北拡張部（北から）

（1）第 44 次調査西半区第 1 面

（2）第 44 次調査西半区第 2 面

図版 12

（1）第 44 次調査東半区第 1 面



（2）第 44 次調査東半区第 2 面

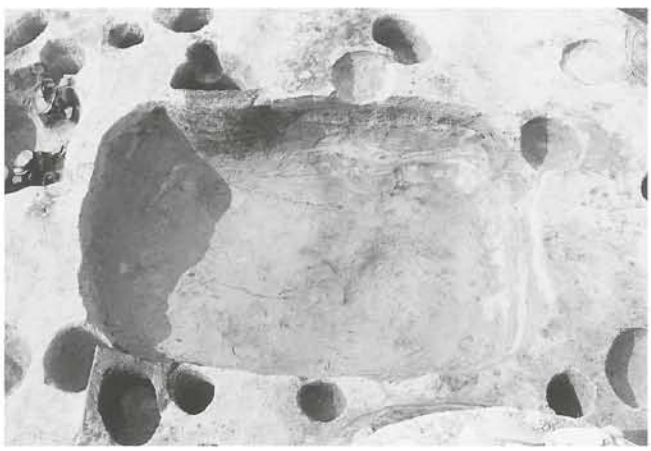
（1）SE-33（西から）

（2）SE-154（北から）

（3）SK-1（西から）

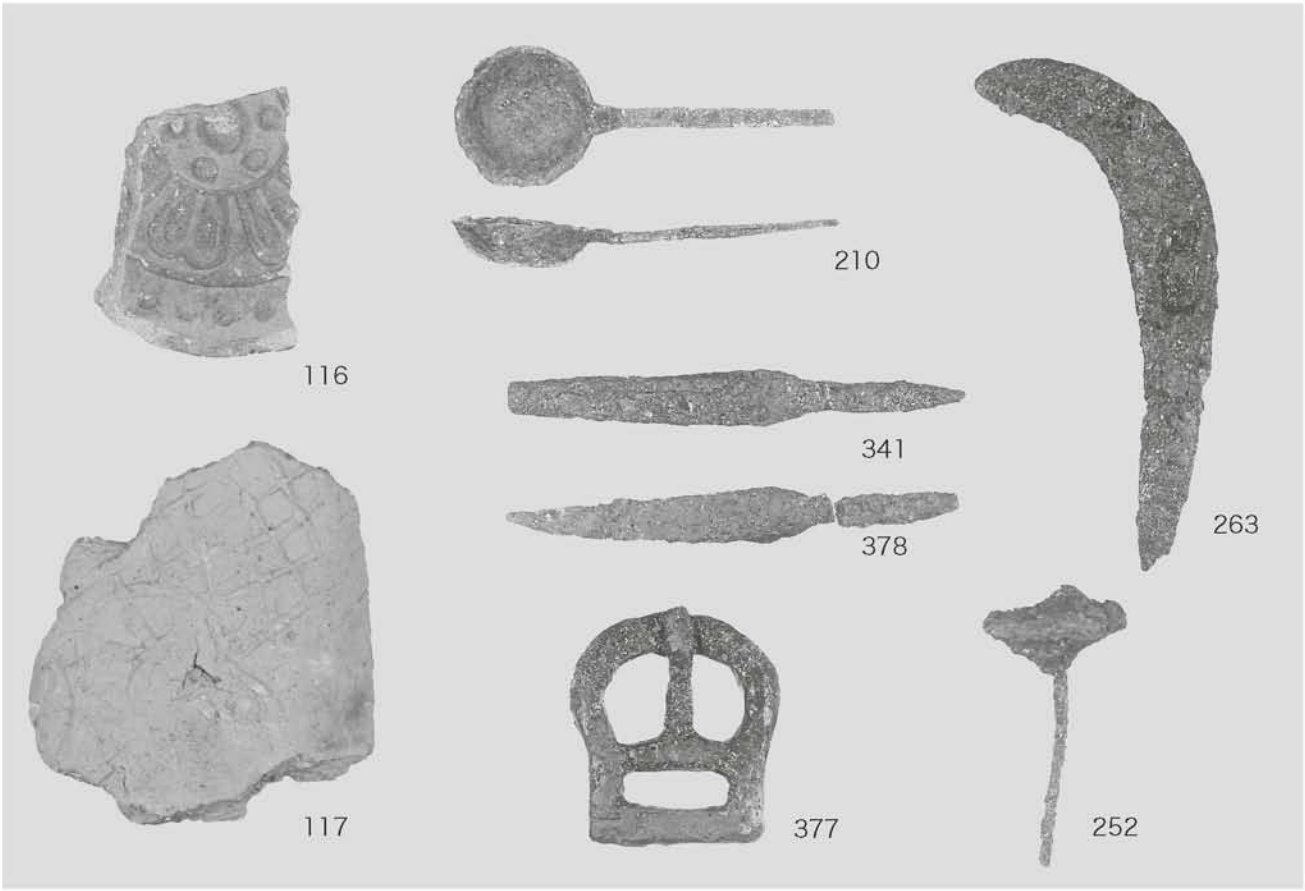
（4）SK-72（東から）

（5）SK-73（東から）

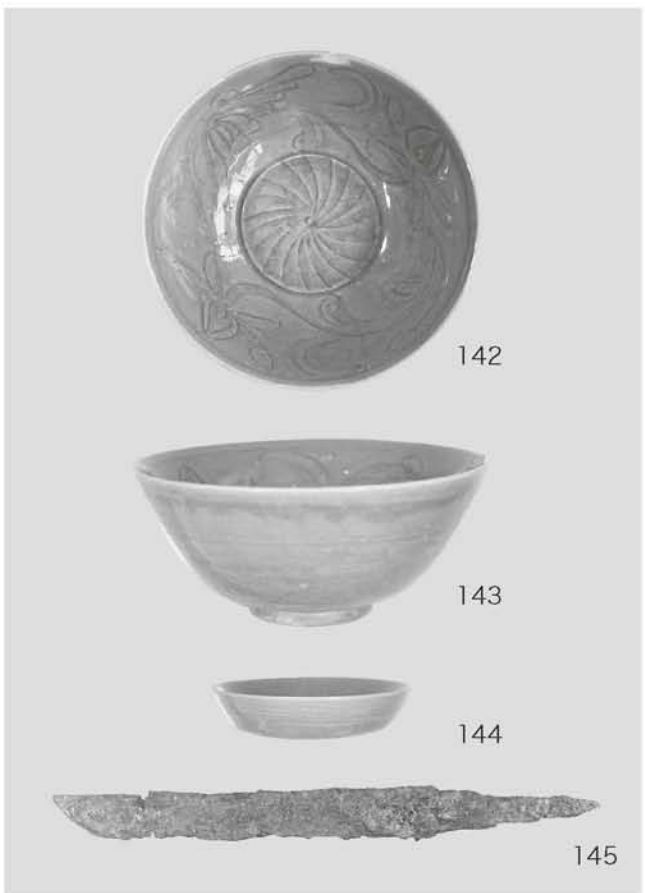


（6）SK-74（南から）

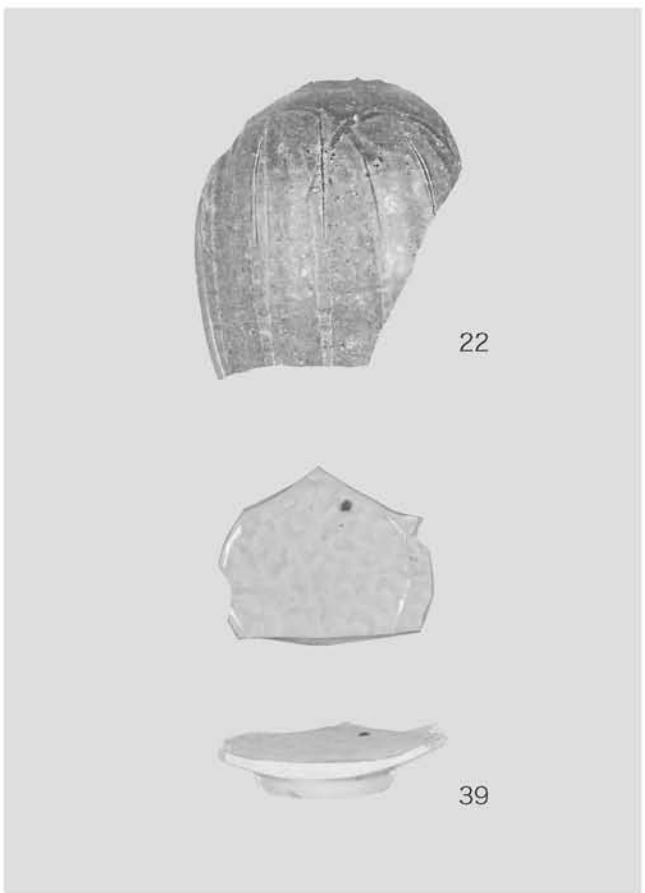
図版 14



（1）第 39 次調査出土遺物



（2）第 41 次調査出土遺物



（3）第 44 次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はこざき
書名	箱崎24
副書名	箱崎遺跡第39・41・44次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第854集
編著者名	中村啓太郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
はこざき 箱崎遺跡39次	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はこざき 箱崎1-2031他	401301	0116	33° 36′ 41″	130° 25′ 47″	20030410 ～ 20030509	149	共同住宅 建設
はこざき 箱崎遺跡41次	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はこざき 箱崎3-2426他	401301	0116	33° 36′ 57″	130° 25′ 40″	20030916 ～ 20031211	1000	共同住宅 建設
はこざき 箱崎遺跡44次	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はこざき 箱崎1-35-3	401301	0116	33° 36′ 50″	130° 25′ 29″	20040216 ～ 20040315	114	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡39次	集落	中世	井戸 土坑 溝	土器　陶磁器 瓦 石製品	
箱崎遺跡41次	集落	中世	井戸　土坑 溝 埋葬遺溝	土器　陶磁器 瓦 石製品	
箱崎遺跡44次	集落	中世	井戸 土坑	土器　陶磁器 石製品	

箱崎（はこざき）　24

－箱崎遺跡第39・41・44次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第854集

2005年（平成17年）3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷　川本印刷株式会社

福岡市博多区駅南5-6-18